

031, 2 Ki 297h

5x64

嬉遊笑覽卷六上

喜多村信

○音曲 琴 青葉笛 山路が笛 箏 筑紫琴 組歌 八橋 こと爪 爪

○三線 ○阮咸 月琴 古近江家譜墓碕 三絃六筋かけ八筋かけ 古製

管絃
絲竹の即管絃なりあかるを絲竹管絃とつらぬいふ事〔陸賈新語〕また王羲之が〔蘭亭序〕などにみゆ管絃これをあそびといふ真淵云神樂の事を云て神あそびと唱へし樂のことを後の物語にあそびといふ古より傳はれることにて〔古事記〕仲哀天皇條建内宿禰大臣曰恐我天皇猶阿曾婆勢其大御琴と見えたりそをかぐらといふの後世の言なれば古書になき事なりといへり一條禪閣の〔神樂註秘抄〕などに古語拾遺を引て神樂の始をいへり〔本朝書籍目録〕管部に〔神樂譜二卷〕とあり今傳はらず〔神樂目録〕の〔拾芥抄〕に出たり〔源氏物語桐壺〕月のおもしろきに夜ふくる迄あそびをぞま給ふなどいへるの管絃をあそびといへり

琴の雄略天皇の御時吳人貴信琴を彈ずそれより國史に往々載たり其外雙紙物語等にも出て世にの概はれし物にて雅樂の内すぐれし器なるに早く引絶しの惜むべし〔源氏物語〕〔宇治十帖〕に琴をひくこと今の好ずなり行とあるの廢れたるにこそ〔體源抄〕に寛治八年圓憲といふ者筑紫にて唐人に琴を習たりしが微音にて紙障子の内に蛇をこめしやうに聞ゆと禪空殿下笑はせ給ひしと記せりもとの琴との違ひたるにや〔源氏〕に五節の君が筑紫よりのぼるとて須磨の浦を舟にてつなで引するに琴の音風につきてはるかに聞ゆとあり蛇のやうなる聲ならばいかでかはるかに聞ゆることあらん〔春湊浪話〕すでに此ことを論じたり〔取かへ

嬉遊笑覽卷六上 音曲

はや二に吉野宮の唐にわたりて琴をおぼえたることを中納言聞たる處へ參りかよひて世にたへたるきんならひ奉りまた見及はぬふみの所々聞あらはさん〔同四〕に吉野の大姫君きんひく處すべて今の世にたへたる物にておさくひきならず人もなかめるをめぐらしくひきこめ玉へけるも有がたく

青葉笛

〔春湊浪話〕に青葉といふ笛の無雙の名物にて始り葉二ツといひける云々按るに〔拾芥抄〕名物の笛を擧て葉二〔江談〕云朱雀門鬼とあり〔江談〕に葉二者、高名横笛也、號朱雀門之鬼笛是也、淨藏聖人吹笛、深更渡、朱雀門、鬼大聲感之、自爾此笛乎給件聖人、云々、と見えたり〔世繼物語〕を按るに博雅三位朱雀門の前にて鬼の笛と我笛と取替て吹たる笛なるを三位失て後帝此笛を召て時の笛吹共に吹せらるゝに其音を顯す人なかりけり其後淨藏を召て吹せ給ふに三位に劣らざりければ帝御感ありてもと此笛を得たる朱雀門の頭にて吹せられけるに其門の樓上に高聲に猶逸物哉とぞ譽にけるとなむ攝州須磨寺なる青葉の笛のあらぬ物なることあるし敦盛の笛を青葉といふ事物に見えず〔江談〕に博雅三位の事をいはず又〔元亨釋書〕十淨藏傳和歌を琴に合せ彈と〔大鏡八〕天曆村上帝の御時のことなり承和殿の女御と申り齋宮女御に帝久しく渡らせ玉はさりける秋の夕暮に琴をいとめでたく引玉ひければ急ぎ渡らせ玉ひ御かたはらにをはしましけれと人やあるともおぼしたらでせめて引給ふを聞えめせばさらぬだにあやしき程の夕暮に萩ふく風の音をきこゆると引たりし程こそせちなりしかと御集に侍るこそいみじく候へと云もあまりかたじけなしやな

山路が笛

さん路が笛〔謠曲拾葉〕云世にとぬりやうなる姿のよき装束を着し牛に乗て笛を吹是を牧童の圖とす又この童をさんろ殿といふこれ又いふかしといへり按るに〔日本紀〕に弘計天皇御兄弟難を避け給ひ牛を牧給へる事を取て〔烏帽子折の草子〕に豊後國まの、長者が娘を用明天皇召て后に立むと勅ありしかどもまいらせざりし故天皇御身をやつし其國に下り給ひ長者が家の牛飼になり草刈童となりて御名を山路と呼その處に神祭ありてやぶさめを射る事なりしにこの事を知るものなかりしを山路知りて射し故長者これを賀となす又八幡の御告によりて天皇にましますこと顯れ娘を召具して還幸ありしといふことを作れりこれ山路か草刈笛の起る處なりさて牧童をさんろと名付しトキナ紀の齋名か暮春遊覽の賦の序に山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲などあるによりてなり故に〔えぼし折〕にやまと竹にめをあげたる草刈笛にて候を云々是をもちてこそ夜更て心すめるをばさんろの草刈夜の笛云々ともあり十二段の〔淨瑠璃〕に此文をとりてやまと竹にめをわけてさんろが吹しくさかり笛と有り猿樂の翁のうたひもの、詞昔より注釋なし〔南留別志〕にとうくたらしやらりうといふこと、樂の譜なるへし陀羅尼なりといへるひがことならんといへり〔職人盡歌合〕猿樂の詞書にあげまきやとんとうひろのかりやとんとうとありこれの〔催馬樂〕の詞なり眞淵云あげまきやをのわらひを云ふ一ひろはかり女とさかりてねたれどもつひにまろびあひたりとうくいとくといふなりとんとうの拍子なるへし〔郵曲〕五節のびんたゝらにやれことうとうとあるとうとうといへるも同じかるべしちりやたらり〔體源抄〕青海波の條に聲歌

太良利知良利々良太利良利(打夕取)とあり「源氏」にたけぶちちりくたりをなぞかきかへしはやりかにひきたることばなどもわりなくふるめきたりと有を「細流抄」に笛の音をまやうかにするなりたけぶちちりくたり唱歌なりと云り「體源抄」に聲歌と有いまやうがなるべしおうさいくひ于思に發聲をそへて云るなり「運歩色葉集」に于思翁申樂三番奏之詞也とあり于思の老人の鬚多き貌を云「春秋左氏傳」宣公二年宋の國城を築く者謳曰上焉于思于思寒甲復來と云註に于思の多鬚之貌と見えたり「卜養狂歌」に「うさいをうよろこびやりや悦あれあとの大夫に鈴菜まいらしよ

箏

箏のもと筑紫より起れること統秋が「體源抄」にみえたり、今の筑紫琴の箏より出「望一后千句」いまだ初春やふ殿に去年の冬よりつかへん、その始「琴曲抄」元祿八年肥前の人賢順後奈良院御時永祿巳筑後善導寺の僧に誰し誰箏術をうけて我同國慶岩寺の僧玄恕に傳ふ賢順都に上り古郷に歸らんとする時大納言數殿その藝を惜まれ居士が門弟の内然るべきを必越よといはれしによりて歸後僧法水といふものを「和事始」に善導寺ののぼせしが其藝いたく劣りければ人々心づきなきを法水みづから耻「備法水」あり恐ハ非て逃去り武藏國に至り還俗して柏屋と號し琴絃を商へり寛文四年刻「糸竹初心集」に中頃九州に支淨法やうな唐人より傳はり其後都に上り公家殿上の交りななし寛永二年のころ琴の御ゆるしを下し給はりて法水水關東に支淨支淨の一人なるべし其名いづれか是なるを八橋檢校はしめりこれに逢て筑紫琴を學び後肥前國に行行て玄恕に隨身し其奥義を究む八橋おもへらく筑紫樂の雅なれども俗耳に遠しとて新に十三曲を制す後また新曲二組を補ひ八橋一流となれり「上」琴曲抄の此頭八橋檢校ひき出したり此八橋

筑紫琴

八橋一流

組歌

も三線の上手なりしが中年より琴を學び不思議に琴の妙八橋の貞享二年に身まかれりどぞされば新曲を得て今日日本の名人となる云々是萬治寛文の初めを云なり安永八年山山住勾當といふ人生國二組のりしなり八橋が手をつけたるにあらざ「琴曲大意抄」田松黒撰鼻進して上永檢校となる又其後八橋と改大幣貞享二年刻に寛永の初攝州に加賀郡城秀といふ座頭兩人三なり新新に組箏を製し古組の足らざるを補ひ表裏中奥の曲譜の次第を定め今の十三曲となれり後都にのぼり箏術を廣む此傳をうけ續人々終に新八橋生田隅山繼山藤池など諸流に分る云々然るに箏の書たる者「八橋琴曲抄」近來安村が「雅譜集」の外いづれの流にも見え古八橋流にいふ古流前流當流さあり古流といひ蟬丸の頃より文祿年中迄といひ文祿より正保迄を前流といひ正保よりずこのつたを當流といふ云々是ハ和琴琵琶などの事にて組箏の古流當流ハ筑紫八橋よりこのつたを申へけれ云々扱組といふことハ三絃の曲より出その家にはおなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり「琴曲抄」の説も私あるに似たり筑紫樂も京都に寛永のころ専ら行はれて下賤のもの翫ひひしなりおもふに其時ハひと歌ふた歌のみにて長き曲ハなかりしなるべし「色音論」寛永廿はやりもの、ことをいへる處にうたふまやうかに琴の音ハみな家々におとづれて「盤草」寛永廿一たることもなく繪にかきたるをのみなかめぬる然るを此ころハ町かたに殊の外もてはやし座頭せせめくらの類の類まで我おとらじと面々にけいたしなむ故籠の前座あくたの邊ともいはずむさどかきならしぬる總して本樂ばかりにてあらハかく下臈などの手にかゝらんものハあらねどもいつその時より筑紫樂といふこと有て弾けるそれに隨てあひさの興に小歌などをせ侍るにより賤の耳に入やすく町かたに取あつかふとみえたり此頃猶しもつく

しやうにても樂ばかりもてはやさばすこしのおかしからむに小歌のをかざきをとりなどの
 みにてひきまはれば琴の道のはやすたれたるやうになむ有けるといへり筑紫樂といふの今
 の組歌の一曲づゝのもののみゆ〔春臺獨語〕に箏のものと樂器にて管絃にのみ入りしに三百年
 のむかし公家の入筑紫に流されて配所のつれづれに箏の手を弾かへて越天樂の歌をのべて
 ふしを長らし箏に合せて弾れしを筑後國善導寺の僧その曲をならひ傳へて弘めしより筑紫
 箏と號て世の翫となれりとかや其後八橋檢校その曲を習ひ越天樂のふきといふも草の名と
 いふ歌を本として色々の歌を誰人にか作らしめ組と名付てさまざまの曲節をなしけるより
 彌世に行はれて貴賤の玩となれりと云へり享保の末より三百年の昔ハ文安前後なるへし此説も又覺束なし先づ筑紫に
 配流せられし人の誰にか越天樂を長く延たるか本にてそれを善導寺の僧習ひ傳へて世の玩
 となるほどに弘たらば越天樂ひと歌のみに有べからず然るを八橋より色々の歌出來たる
 やうにいへるのいかによやもと箏の器の仁明天皇御時に遣唐使の傳ふる所とも又内教坊妓
 女筑紫の彦山にて唐人に是をつたはるともいへり此二説〔體源抄〕に出いづれか是なるのま
 らざれども筑紫に傳へぬること古しとあらるこれに依ておもふに雅樂の俗耳に遠ければ
 おのづから筑紫樂の其處に出來る物にて其歌の皆今の組歌の内に入しなるべし三絃の組に
 倣ひて組歌に造りたるの八橋に始れり
 慶長六年霜月二日江戸より下總行徳へ大風に物の飛たる事の處に七尺の屏風も火事にいな
 ぞか飛さらんと〔見聞集〕に見え又〔鷹筑波集〕寛永十一年琴を聞てぞ命延ける七尺の屏風もすむ

とをどり越是今のふき組の唱歌なり〔同集〕琴よりもまつ引の振そで花の頃愛宕へ參るつくしもの筑紫琴に付たるなり
 りまた貞徳が〔新犬筑波集〕只まいれ蓼ひや汁のからだせん琴のまやうがであそぶ夏の日自
 注琴のまやうがにからだせん地蔵が戀に腰をそらいたと云ことありと云り〔夷曲集〕寄若僧
しき地蔵のこまき若僧に死ぬるからだせんはかりなりからせんハ法羅陀なり〔地蔵經〕十輪是今の梅枝の唱歌
經曰在法羅陀耶山諸牟尼仙所依住處〔延命地蔵經〕曰在法羅陀與大比丘衆萬二千人俱なご有り
 に八十の翁の戀に腰をそらいたと云うたひかへたり此ら八橋より前にふきの歌ばかりにあ
 らざる事あるべし又三絃の歌をとりたるも多かるべし〔三絃秘曲の七傳〕に堺といふ曲あり
 其唱歌に「幾春もこゝに猶みはしの櫻色まさる雲の花の久かたの空ふく風も及ばし云々
今の〔花笠〕又〔小歌惣まくり〕寛文二年版秘曲天下大平長久に云々桐壺の更衣の云々たそやこの夜中
 の唱歌なり年版にまされば戸を敲くハ云々恨めしき我もん云々なごある皆今の組歌の中に入たり是らも彼
 筑紫樂の唱歌を三絃のかたに取たるものもあらむ〔箏曲大意抄〕に橋姫古作不知手付絶た
 るを倉橋の時代三橋補明石末松空蟬、北島檢校作九段七段調子、作者不知五段調子、北島生
 田兩家の内、作者不分明、新雲井弄齋倉橋檢校作、三曲に可附、古新曲羽衣若葉、北島牧野兩家
 の内、作者不分明、思川北島生田兩家の内、作者不分明、中古新曲飛燕清平調、安村檢校作宮鶯三
 橋檢校作、口裏可附、中古新曲二長雪月花六玉川浮舟、三橋檢校作、中可附、中古新曲四季富士
 玉葛四季戀雲井九段與、前同作、裏可附、近來新曲四季友友千鳥、久村檢校作、花宴石塚檢校
 作、三曲可附、近來新曲春宮曲、三ッ石塚檢校作、凡組三十三曲段調子七弄齋二首也○別に當流
 唯授一人々秘曲、あり四季源氏乙の曲と云と近來三橋申されし八橋北島生田倉橋より三橋

傳來りて此曲を同門安村へ傳置よし聞ゆ此秘曲今多くひく人あり中にも三橋より傳授きたる人彼此ある也さすれば只授一人の曲とも申難し古八橋流に「四季源氏」の曲乙の曲と二曲ありこゝに章歌を志す「八橋四季源氏」の曲「春のおまへの池水にからめく舟のよそはひらうらゝにさしてゆく袖の棹の華に花かはる月のかつらの追風に調べ合せむつま曲の聞すがたき君かゝや催し顔のほどゝぎす合手」朝夕霧の光もよのつねならぬいろくたもとかゝやくせんざいのちゝに亂る、秋風あれたるやどのかき庵につもる雪の橋をはらへどもとの末の松あをたつなみのおもかげ千代萬代のよもさき君がめぐみのはやましけやまかげたかく賑ふ民の家々〇乙の曲「いさゝらば時鳥涙くらべん諸どもに我も昔の忍ばれて夜もすがら夢も結ばず命あらむかぎりいなれし君の面かけ何としてか忘れんと思へばいとゆかしきおもひを人にあらせじと心にふかく包めども戀しさいやましてわれとこぼるゝ涙かな袖にふれし移りかも落るなみだにそゝがれて形見にのこる色だにもうせておもひのます花なきハ世の中のうきみにつむ柴ぶねのたかぬ先よりこがれ行この身何となるべき波にゆらるゝ濱ちどり逢夜かたし我袖にあとふみ付よわはれにもせめてとり見てもまのばむ右二曲ハ古章歌なり「當流四季源氏」乙の曲文章古作にあらざる云々又云いにしへ奥秘事鑿の曲といふ曲あり章歌右曲生田の作なるよし云古流にキンのあらべギンのあらべありとこの事むかしより申つたへたりいまだ不考古八橋流に「四季源氏」の曲乙の曲なるよしをいふ

〔春湊浪話〕に箏のこをひくに今作り爪をさしてひく是ハいつよりのことにや齋宮女御

こま爪

假甲 爪ひき

三線

村上女御御子の箏を引給ふに右の御手の爪をれしみ給ひ常にハ左がちにひかせればしませし故に後にハ御僻になりしと「夜鶴庭訓」に見えしされども「大鏡」にハ此箏をひく人ハへらに爪を作りて指にさし入て引ことにて侍りしと「芹川御幸の物語」に見ゆ然ば昔も必一様にもなく作り爪をも又用ひしなりと云りまた相國宗輔公琴の爪にて枇杷の實をむきて蜂にあたへて散らさしりし事「古事談」また「十訓抄」等にもゆねもふに假甲ハ後に出來し物ながら此器有て後のこれを用るが本にて手の爪して彈ハ假なるべし今爪ひき云々假甲も漢土の製なり「資暇録」に今彈琴、或削竹爲甲、以助食指之聲者、亦因泝公也、嘗思代損、而舊甲方墮、新甲未完、風塵靡澄、撥琴思、泛假甲於竹、聊爲權用名德、既崇人爭、倣効好事者、且曰司徒甲云々、「山堂肆考」云、妓女以鹿角琢爲爪、以彈箏、曰繫爪、〇「浪話」又云つれづれ草にある男の爪をおふしたるあり琵琶などひくにやと書たれば兼好法師の頭も作り爪なくてひきける歎されどもひはを引に爪をおふしたるといふいかいぶかしといへり爪ひきの箏のみならず「源氏物語紅梅」宮の姫君へ紅梅のせめきこえ給へばくるしとおぼしたる氣色なからつまびきにいとよくあはせてたすこしかきならし給ふ是はを引と有り爪彈ハ假そめの事なから其道を嗜まむものハ用意に爪を生したりとみゆ

三線「藝苑日涉」云據事物紀原及絃子記、則秦謂之絃鼓、魏晉以來謂之秦漢子、宋人謂之嵇琴、者、即今之三絃也、未知果然否、大氏絲竹之制、古今或不同、况如三絃、本出胡部、而熾於晚近、假令爲絃鼓遺象、後世率意增損、恐非復古絃鼓矣と云り西土にもその起源さだかなら

阮咸
月琴

ず按るに「三才圖會」の阮咸其形いとよく似たる物なりされども此圖の阮咸のもの形に
 ならず故に「三才圖會」も其説に、武后時、蜀人鞠朗、於古墓中得銅器、似琵琶圓、時人莫識
 之、元行沖曰、此阮咸所造、命匠人以木爲之、以其形似月聲、似琴、名曰月琴、杜祐以晉竹林
 七賢圖阮咸所彈與此同、謂之阮咸、云々、四絃十三柱、倚膝撥之、謂之壁、以代撫琴之艱、今人
 但呼曰阮、と見えたり然らば形圓く琵琶にひとしき物なるべきをその圖さもあらぬ、此器
 當時王思義其書王思義其書あるものを載たるにて古物傳はらざる事とまらる此圖説の適はさるにより
 てや「和漢三才圖會」に琵琶に似たる物を圖せり是をかしながら杜撰に作れる圖にもある
 べからず今月琴とて清商の持來る物ありそれと形似たれども異なり是もそのかみ月琴とて
 渡り來し物なるべければさまざまに作りたる事とみゆ王思義が時より後に出たるものなり
 王思義が出し、圖の二絃なり是の形の異なれども月琴にひとしき月琴の四絃あれ共其
 實の二絃なるも同じく二絃ツ、同調なり南都東大寺正倉院の寶物の中に四絃の鳴器ありこ
 れ古への月琴なるべし西土に却て古物亡びてその製りさまをさるるものと思はる但し
 陸奥國會津農家に四絃の器あり「集古十種」に載たり槽の今の三絃の槽のことく柄の三段に
 續たり長さ總て三尺二寸二分木にて作る大よそ今の三絃の形に似て四絃なり何ころの物な
 るか彼王思義が圖せる物の類とみゆ「楊升菴外集」に今之三絃始于元時、小山詞云、三絃玉
 指、雙鉤艸字、題贈玉娥兒といへり然れ共元史の樂志曰、火不思、制如琵琶、直頸無品、有小槽、
 圓腹如半瓶榼、以皮爲面、四絃皮絃、同一孤柱とありて三絃にあらず但「庶物異名疏」に湖撥

二絃

四絃
五絃

三絃の渡
り始
小弓

琉球組

四長二尺計三絃「事物異名」に三絃子胡不見蒙古と云るの渾不似を三絃とするなり絃の數の
 阮咸も定まらず「事物紀源」に四絃十二柱或五絃十三柱といへるが如し今も異國より來る虵
 皮はれる三絃其槽方圓ひとしからず半瓶榼の如きものもあり「五雜俎」に有所謂三絃者、常
 合簫而鼓之、然多淫哇之詞、倡優之所習耳、とみゆ趙子昂が婦人管道昇がかきたる繪に三絃
 をもてる女あり予「三絃考」に載て委しくいへりよりてこゝに略す
 三絃のこゝに渡りし始「糸竹初心集」寛文四年版文祿のころは石村檢校と云ひは法師琉球の
 島にわたりけるに彼島に小弓といひて糸三筋にてならずものあり小き弓に馬の尾を弦にか
 けて引なれば小弓といふとぞ石村これを探りみるに琵琶をやつしたる物なり糸のあらべ
 やうも一二いびはの如く三の糸いびはの三よりも二調ほど高くあはせたるものなりと思へ
 り所の者いひけるに此島に眞虵の多き所なるがラヘイカといふもの有て此まむしを食物
 とすさればラヘイカの鳴聲小弓の音に少もちかはさる故眞虵を退けむが爲に専ら引なりび
 は法師も爰に逗留の間いひき給へといふ其後石村京都にかへりておなじく琵琶をやつし此
 三味線を作り出せり琉球の島より得て來るといふ心にて琉球組といふことを作り置り弟子
 虎澤檢校に残らず傳へしかば虎澤又組破手といふことを作り出す虎澤より山井檢校に傳授
 して世に廣まる糸の合せやうの是も一二の琵琶のことく三の糸いびはの四の糸の調子なり
 神田定宣「淺草船遊の記」三味線の起り、元琉球より薩摩へ渡れり琉球國ハ虵多く有て民屋路次に横り女童を憐す五月
 雨洪水の頃ハ分て多く出てうるとかりしカミも三味線と小弓の音ハ恐れて寄不來それ故男女ともに此二種ヲ樂み彼難義
 とのがれ或ハ一興をなせりといふや三味線ハ虵皮小弓ハラヘイカと云り何の頃にかこの國に渡り日本にあまれくわきて武
 江に斷びて懸慕の道のよせ太鼓と云々眞宣ハ江戸の人元和中に生る此舟行ハ明曆以前にさればしき事あれどたしかにハ

云難また〔大幣〕貞享二年刻永祿年中琉球國より是をわたす其時の蝟皮にて張て二絃なるものなり
 泉州界の琵琶法師中小路といひける盲目に人のとらせたりけるを云々長谷の観音に七日
 参籠し彈やうを祈りしにあらたなる靈夢によりて一絃をまして三絃とせしをまばらくして
 虎澤といひし是を彈かため本手破手といふことを定めて是を傳ふ其後澤住といふ盲人あり
 て是を彈おぼえ歌にのせてひき出したりそれより公家武家のうちに賞翫させ給ふ方多く有
 てみづからもひかせ給ふ其後の此器に緒をつけて頭にかけて引を用とす云々淨瑠璃といふ
 事をのせて三味線を引初たるの澤住がなす所なり然して後寛永の初め攝州加賀郡城秀とい
 ふ座頭兩人堪能なる事古今に獨歩せり東武に至り加賀郡の柳川檢校城秀ハ八橋檢校となれ
 り柳川流入橋流といふのは是なり此兩人三味線の鼻祖たり是によりて今世三味線の工人に
 八橋の柳川のといふも此名字をゆるされたる者なりとみえたり〔松の葉〕元祿十六年版にハ中路
 リ〔大のさ〕ハ石村ハ竹齋物語ニこれハ石村檢校みえたり慶長の頃なりこれらの説をも合せ考ふるに〔糸竹初心集〕にハ三線を小弓よ
 りといひ〔大幣〕にハ二絃なりしを一絃を添たりといひて其説おなじからざれども造り改め
 て新たに引出したるやうにいへるのいづれも私説なるべしこはもとより三絃子にて琉球國
 の彈やうを習ひて其後さまざまに彈出し術も器も彼よりの勝れし事となれるなるべし又小
 弓も二絃もそのかみより渡りて有しこと、みゆ琉球より渡れるよしの琉球組三線歌の始に
 て〔吾吟我集〕の自序慶安二年さみせんの糸のよりに絶ずぞ有ける是より先の歌を集めてな
 りりうさうと名づけたりける云々其器早渡りしも有べけれど世のさわがしきはどにて翫ぶ

ものもすくなくよく彈おぼえたるものなごのなかりしにやされば永祿頃より有といへる
 〔大幣〕の説隨ふへし文祿中に石村よく彈出し者ゆゑ是を始といへる説も有と聞ゆ中小路ハ
 めの名も聞ゆれば抑此器緒の數定まらざりしこと〔事物紀源〕に見えたるが如し然るを靈夢によ
 りて一絃を添たりといへるの其物を貴くしてその術を賣むが爲なり二絃三絃四絃もみなも
 どより有し物なりこの古畫に四絃も往々見えたりさて三絃もや、古く渡りたることハ明
 らかなり〔室町殿日記十九〕遊女二人を中に置いて何心なく三味線を彈て遊び居ける天文永祿の
 日記なり〔狂言記〕外五十番の内昆布賣口まやみせんにて上るりふしに昆布賣ことあり狂言ハ古きものな
 らば〔義殘後覺〕に三味線大鼓にて踊をすることあり此書文祿五
 年の跋あり〔醒睡笑〕永祿よりこなたの都の
 人東の宿なる中ぬに相馴たるが別る、時一まゆのさみせんをつかはしたる物語あり又慶長
 頃の物にハ多く見えたり〔仁勢物語〕光廣卿の
 作といふむづかしと平家もまらざやみせんもひはも小
 歌もいがで過てき〔恨のすけ草子〕雪の前が三味ひく處に華美を盡した三線のさまをいへり
 猶多くあれどもこゝにハ略すさばかり世にもてはやし、器なるに久仁が歌舞伎にハ未だ是
 を用ひすそハ舞臺樂等とま
 れびたる故なり淨瑠璃などには是を用るとハ異國より然り〔廣東新語十二〕粵俗好歌、凡
 有吉慶必唱歌、以爲歡樂、云々、其歌之長調者、如唐人連昌宮詞琵琶行等、至數百言千言、以
 三絃合之、每空中絃、以起止、益太簇調也、名曰摸魚歌、或婦女歲時聚會、則使瞽師唱之、如
 元人彈詞、曰某記、某記皆小說也、其事或有或無、大抵孝義貞烈之事爲多、竟日始畢、一記可鞠
 可戒、令人感泣沾襟、と云り

古近江家
講墓碣

三絃の器のもと蝨皮などはりて製作ふつゝかならずしをこゝにてよく作りなほし、石村よりこなたとみえたり古近江といへる匠の造りたるを世にこよなき寶とすめり元祖近江の稱を源三といひて京都の人なれど今の墓處も定かならず實名さへ忘れずといへり按るに近江といへるが即實名なるべし又この家石村氏なれば石村檢校の子孫か又その名字をうけたるもの歟柳川八橋ハ三線の名人たるに依て工人其流の器を作り八橋柳川など呼ぶるが如きにや近江が子孫江戸に來り世々其器を作る今その家譜と墓碣とによりてその時代をさるす墓の三田の大信寺にあり其古き墓の上の右の方少し缺たり左の九名を刻す行譽淨本信士寛永十三年三月二日法譽性眞信士寛永五十九年九月九日正譽道薫信士明曆三丁酉廣譽源智信士元祿九十年二月二日實譽淨眞信士元祿九丙子正月廿七日教用院淨玄信士寛永七十九年八月廿八日心譽昂還信士正徳二年七月五日西譽永欣信士元祿八十六年八月十八日また石村近江累代と記したる墓あり、石村近江住京師墓地未詳淨本信士道薫信士淨心信士性眞信士本立信士相流信士倫超信士又別に太兵衛が墓あり累代とある墓の後に建たる物なり古近江九代孫春峰孤雲信士天明七年正月廿二日俗名太兵衛忠豐石村わきの方に孤雲翁世をかく南無鳳尾「苦守と成て朽るか捨ころも十代目近江月峰秋善信とあり

元祖近江の俗名源三京師に住す二代淨本俗名源左衛門始て江戸に來る依て江戸元祖淨本近江と云ふ三代道薫淨本より以下源左衛門實名忠義四代淨心墓碣に淨眞と有る實名忠政四代迄ハ作る處の五代性眞實名忠次俗名善兵衛といふ此時より始て燒印を用ゆ此者總髮にてありければ世に總髮善兵衛と云ふ六代本立實名忠貞七代相流實名宗忠六代迄は實子にて相續す七代めに至り男八代倫超實名忠陸俗名善五郎六代忠貞が實子より九代春峰實名忠豐俗名太兵衛世に太兵衛近

江と稱する是なり十代秋元但馬候妙工の家絶む事を惜み此時扶持せらるとなり右の燒印相傳へて六代めころいいたく損へるに依て七代めに今の燒印に改めたりとぞ此家の風にて三絃の槽の裏鼓の胴の鏝かたに似て綾杉といふものに造れり燒印の根緒かくる處の下に押こど常なり燒印あるもの古近江にあらざれども太兵衛が如き者の殊に名手の聞えありて祖先に耻ざるものなれば新古をもて工拙を論ずべきにあらざり南敵老人が「假名世補」に古近江は源左衛門二代め善兵衛隱居して惣髮となり真心と號す世俗がつそ近江といふ三絃に自名を付るさいへり初代源左衛門にあらす源三なり善兵衛ハ五代めにあらす真心といふ者十代の内になし五代め善兵衛ハ性眞なり何に據て書たる歟いさ妄なり又相屋近江とあるハ初の號にあらじ

〔雍州府志〕近世筑紫琴三味線之流行也、非古樂之所及也、依是巧人亦多云々ハ人倫訓蒙圖彙に琵琶琴三味線同職あり室町一條上、長門釜座二條上、近江此外寺町處々に有といへり〔琴曲抄〕をみれば長門の今井氏にて二家あり其一ハ一條通室町西へ入ル町今井播磨なり近江の神田氏にて是も二家あり室町通四條上ル町神田七左衛門なり此外に東洞院佛光寺下ル町永田内記といふあり〔江戸總鹿子〕貞享四年刻琴三味線師京橋北一町目石村近江この外に石村河内石村山城とあり近江が家京師にもあれど名匠の江戸に出るにや〔風流徒然草〕何事も東の物いやしくふつゝかなれども近江が三味線の耻ずといへば江戸さやみせん屋の申侍し近江にかぎらず何れの細工人も外より勝れたり其故の江戸の繁榮に付れきくの籠申おく方より高直にかまはずあまた打出す故とせんその妙を得たり殊に近江の古作の名人の鞍の筒うちのかんなめなどよく考へさやみせん筒のうちの一ツのかんなめを工夫たり是秘

藏の事なり此かんなめにていづれのよりをも調べ侍ると申き凡まやみせんわづか三ツ緒をもつて何れの調子にも叶ふなり云々近江がまやみせんわづか三ツ緒はすよき調子なりといへりかくあるの總髮善兵衛などの時をいふなるべし

樂器の其藝未熟なる者名物の器を用ればふさはしからねは常の器よりも鳴りがたしとぞ〔北窓瑣談〕に新九郎物語に六條本願寺に近江の作の三絃あり類なき名器なり折々借し給はりて是を弾くに少しにても無利あり按へ所の坪厘毛も違ふ時一向に鳴らず弾きやうに無理なければ神妙の音を出す故にあやまち明白に聞えて耳に立我ながら藝の不熟なるを覺えられて器に對し耻かしくおもふといへり新九郎も三絃にとりての妙手にて人みな知ところなり然るに彼三絃などいまだ不相應なりとみえたり

三絃六筋がけの〔原本洞房語園〕に慶安の頃江戸町二丁目の揚屋喜齋といひし者六筋がけとて其頃隠れなき三絃の上手なりし〔一代男四〕てくたんのつぎはの六筋がけを取出し云々らうさい其聲の美しさ〔西鶴置土産〕番町にさる御かたの隠し藝に八筋がけをさるのびでま引せられしが又もなき音曲是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびし是は本手小歌のなごみえたりかく八筋がけなごみえふもあるをおもへば糸のさるふとさして三線の棹も大きなるをいふにやあらむ又古書にみえたる三絃に今の根緒かくる處に金物の環ありこれの〔大幣〕に此器に緒をつけて頸にかけて引を用とすとわればその爲に設たる物とさるる又撥のもとに緒を付たるがあり是も三絃に添置に便利なる故と見えたり又三絃にかせかくることも古くみ

三絃六筋がけ

八筋がけ

古製

續さほ

〔世話燒草〕明暦二年刻三味線も月にひかんの企にかせや手車ならべ置秋かせは鹿をかせきといひ二股の杖をかせ杖といふ是より出し名に〔柳巷談苑〕に續さみせむの琵琶に續びはあり長明〔方丈記〕にみえたり是によりし物にやと思はるれをさにあらず前にもいへる會津農家の四絃の古器續柄なれば三絃もとよりつぎたるも有しなるべしその調子の爲にあしければにや近江が家に造らずと歎次にいふこ先哲のこを書たるものありその内に東涯先生が續三絃の匣をあらざりしこを擧ぐ此説非なり余が傳へ聞し先生醫師の用る百味たんすやうの古き匣を買て諸書より見いだしたるこを少なき紙に書て其類を分て入る器とせられたりとぞ此事を誤れるにや續三絃をだにあらざりして〔制度通〕〔名物六帖〕をつくりたるハ怪しむべし此の語ハ仁齋妓家に入てその妓家なるこをささりしといへるにおなじ〔宮崎錦圖〕にもこれに似たる物語あり實に是をささらざらむらば至愚といふべしいかに一家の學を唱へて一代の儒宗といはるべきもし人を欺けるならば惡むべしこにかりる事を稱美するハ彼管神を雷になり給へるさいへるにびさし

催馬樂 風俗 鄂曲宴曲 今様小歌 ふうさい 隆達なけふし 長唄 ぼそり 口説 けりやす 土手節 大盡舞改かじるよし山 小倉

催馬樂

催馬樂の〔體源抄〕云狗朝葛新作と云ふ〔續教訓抄〕云催馬樂と云ハ催馬樂といふ樂あり其より事起れり此樂の唱歌に駒を催すと云ことありけるをやがて歌となして國々よりうたひ出したり我駒といふ催馬樂是なり故に馬を催とかきたるなり古注にむかし貢調の歌といへるの誤なるべし此説も心得かたし先づ催馬といふ樂ありとい異國の樂名とするに似たりその章に駒を催すとあるを歌となして我駒だ、一曲ならば國々よりうたひ出したりといいかゝその本の催馬樂ハ早く亡びたりなといふ心にやいとおぼつかなしも此歌ハ萬葉十二に乞吾駒早去欲云々ある歌なり初め二句馬を催す詞なるもて催馬樂とい名けたりこの樂のこど先輩種々論じたれども定かならず〔和名抄〕に催馬樂律我駒 津澤田河 曲是也 狹條河 曲是也と並び出たり〔拾

芥抄（催馬樂部ありて目錄多く載たる内に狹齋河も入たり（和名抄）に併び出たれども催馬樂の我駒曲のみにて狹齋河の別なり然らばもと我駒の曲のみなりしをその曲調に種々の歌をうたひ出しなりもとより駒催す歌なれば貢物を納る時の口すさみにも謠しなるべし
今も船歌こむろふし木やり石引それの歌あるがこしこの曲調にびたるの頃の頃にか（年山紀聞）に賀儀（定基朝臣）今日歌遊（准久安富家神閣七十賀儀）件時催馬樂也、其曲調斷絶、仍以朗詠代之、といへり久安にいまだ傳はりしなり

風俗

風俗の諸國の國より歌なり（拾芥抄）に目錄あり東遊もこの内なり新井白石の（學對）に東遊の駿河國有度濱に神女降て舞遊ぶ事有しに起れる由を申傳ふ安閑天皇の御時の事なり道守氏の人其曲を傳へしなど申すされば又是を駿河舞とも申き（江家次第）「公事根源」等に見えたり

野歌

野歌、四條大納言公任卿（朗詠集一卷）を撰み四季雜を分ち時にあたりし句を見むに便ならしむ此曲をうたはむ料也安齋人の間に答云野曲のすべて歌をうたふ事の總名なり催馬樂今様其外何にてもうたふ事なり野曲とて定りたる歌のなきなり（徒然草）に梁塵秘抄の野曲の詞こそまたあはれなる（野槌）云野曲の楚國の都なり（文選）に客有歌於野中者云々これより歌曲を野曲といふなり後に宴曲といふもの出來たり其譜（宴曲集）等種々あり水宴曲などいふも是なり

今様（紫式部日記）わかやかなる公達いまやう歌うたふもふねにのりおほせたるをわかうれ

小歌

らうさい

かしく聞ゆる云々（枕草紙）藏人すけたゞのいみしうあらく（ま）ければ殿上人女房のあらはにとぞつけたるを歌に作りてさうなし（無左右）のぬし（主）ればりう（尾張）のたねにぞ有けるとうたふの尾張の兼時がむすめのはらなりけり是を笛にふかせ給ふ（主上の御）其外（續世繼）等諸書に見えたり思ふに今様といその當時の歌にして新たに作り出るなり文字の數など定りしこといなしとみゆされば（平家物語）に佛御前が「君をはじめてみる時の千代も經ぬべし姫小松云々また（東鑑）文治二年四月八日鶴岡の廻廊にて靜が舞曲の處「吉野山峰のさら雪ふみ分て入にし人の跡ぞ戀しき」まづやまづまづのをたまきくりかへし昔を今になすよしもがな（是ら尋常のれさ曲調）「平家物語考證」白拍子の謠歌の今狂言の花子の小歌に曲節相似たり故に狂言の徒花子の小歌を秘曲とせりと云り然らば今四ツ拍子にうたふを今様とする者の非なるべし今の琴曲の内に雲わらうさいと云ものあり寛文の初ごろ八橋雲井の調を引出し、なり是また三線のかたより取たる物とみゆ（松の葉）なが歌の中に雲わらうさいあり其歌「やまのはいかな夜も人こそあらぬ閨のなみだのふちとよなるよしやなげかしかなはぬとてもさだめなきこそうきよなれわれふりすて、一こそゑばかり何くへゆくぞやまほとゞぎす是によりて雲わらうさいなるべし（琴歌）はなれく（うき雲）の雲井のこゑをはりあぐるにとれる名と聞ゆ（今昔物語）天狗のつきたる女の物語に聲を雲井の如くして叫ぶといふことあり（あら野集）唱歌のまらず聲はそりやる嵐雪「なみだみるはなれく」のうき雲に同是をみれば今の琴歌も三線にての唱歌なり琴の調子三線の三下りに合するの彼らうさいの調子にてこれを雲井の調子といふ

をもてその曲三線よりとれるを知べしうさいの弄齋など、書る故人の名のやうに思はるゝから「昔々物語」に百三十年ばかり已前弄齋といふ遊び坊主りうたつがことを學び是も歌を作り歌名をうさいと付て唄ふといへるの妄説なりうさいといへる歌うたひの事いまだ聞ずらうさいの癆瘵にて病の名なりうさい流行したこと流行病にあらざり「見聞集」に見し今らうさいはやり皆人煩らへり去程にくすし達この時花病をなほし手からにせんと術を盡し良薬をあたふといへども治することかたし爰にくすしにもあらざる老人申されける此煩の起りを伺ふに風邪寒冷よりも出ず心よりおこる病なり然る間此病を心氣と名付て薬にて治し難し唯おのれが心を轉じ變ずべきなりと有り「似我蜂物語」にはなげのばして月なみをかつらをしてこのまねぎやるに或連歌さらひの者いひけるの扱もく此小歌よくぞや作りたり何のこともなきに月をあはうげに仰のきにながめわけもなきにぶうくこのどろにうなりらうさいやみの食をくらふと同じ事とあるは連歌師ををしりて云ふなり物思ひつゝ月を見空を詠めなせするによりてらうさいの歌の出来るなり「寶倉三」三線の條くすしもあらぬわつらひにいらうさいの一ふしを薬ときなし手なれしかども云々故に俳諧に「はなひ草」に癆瘵の癡病なりとす後藤佐一が「病因考」癆瘵の人のことを病に必死で祭らるゝの義歎といへり是らうさいを戀やみとするにや「貞徳文集」に普請奉行被成候哉云々材木屋鍛冶屋塗師屋疊屋近來多召連在京仕爰元作相濟申候勞瘵薬に候世界の重寶候恐々頓首これの苦勞なく作事出来るを勞瘵薬と云た

長唄

り「けだ物歌合」七番右いたちのこしぬけばう「らうさいにかみうつゝいたちをみるにこしほねなへにけるかな判云戀しきこと數まざりてらうさいとなりかみもうち腰ぼねもみるたびになゆることくなるべしこれの世の人の小歌に「きみのうつくゝかるたをうつかわれいらうさいにてかみかうつといへるをふまへたと見ゆれども云々是又戀やみを云りまた「昔々物語」長唄の始の右近源左衛門が海道下りに始り小歌の隆達より起れり弄齋の歌のはそり又いたゝき扱とて皆短歌といひしとかや其後長歌口説歌などいひし云々いへるすべて誤なり歌いもどよりうたふべき物なり「金葉集」永縁きくたびにめづらしければ時鳥いづもはつねのこゝちこそすれ俊頼朝臣の歌をかゝみのくつどもうたひけると聞て永縁僧正うらやみびは法師をかたらひてさまく物とらせなせして此歌をうたはせける又「無名抄」にみゆこれ今様なり「新撰類聚往來中」歌長歌短歌之今様とあり「榮花物語」玉の村きくの巻「川をひ柳風ふけばうごくときれと根のつよしといふ今様あり後世なげぶしの唱歌に似たりその今様うつりかはりて小歌となる室町將軍の頃専ら行はる猿樂の狂言小歌ぶしの事多くみゆ又早歌あり思ふに今の小うたひのやうなるもの今の淨るりふしなど昔曲節急なり

隆達の聲よくて一風をうたひしなり「界鏡」に高三隆達元日蓮宗常陸顯本寺の寺内に住す故有て還俗し高三世俗りうたつ流きてうたひもてなすきみゆ古寫本にふしつけたるもの往々あり或は自筆にうたひしたるに「文祿某年自庵隆達とあるしたるもあり自庵の隆達が別號なり「篤尾琴」に見えたり元祿刻本の書目録に「隆達小歌二卷とみえたり

「恨のすけ草子」慶長十九年の草子あやめ殿かれうひんかの御聲にて當世はやりけるりうたつふしとおほしくて吟じ給ひける「君が代の千代に八千代をかさねつゝ岩はとなりて昔のむすまで

隆達なげぶし

なげぶしといふもの即これなり近江すげ笠などの歌のふしにん、やあこれのといふこと有
 なげぶしの末をよんどはねるらうさいの猶古きものにや「松の葉」になげぶしの事元來江戸
 らうさいのふしをなほしてうたひきたるとかや 音聲あめやか寛永十九年の「音攝物語」にらうさいの
 えたに三絃の音ひしく聞ゆなご見りに調子ひくきかたよし云々古へ大坂屋河内風といひてうたひしのかみまもの句さらり
 と三味線あひまらひも短く歌のとまりやんとうたひしなり今やういふしのたけゆるやかに
 ならしもの相の手撥敷もすくなく歌のとまりいふしにていひすてゆるくと聞え侍る云々
 中頃より二上りの調子を用ひて此ふしをうたへることありこれに本調子とつれひきよし
此河内風さいへるなげぶしな
 り大坂屋さあるハ誤なるべし「一目千軒」なげぶし明暦の頃かしはや又十郎抱へのたいこ女郎河
 内といへりしもの諷ひ始めしなり云々其後正徳ころ三文字屋左衛門抱へのたいこ女郎よし
 松といひしものこの歌に名人なりよし益諸方へ弘まり行はる其後山本やつやのかへ
 小倉といふたいこ女郎上手なりし寛保の頃迄居たりしなり今にこの一ふし相續して名物と
 ぞなれりける島原のなげぶしよし原のつぎぶし新町のまがきぶしとて古來より三名物なり
元祿の頃行はれし節なりさいへれと天和二年に刻したる「武藏曲」通
 世の餘所に妻子をのぞき見て「芭蕉」つき歌耳に残るよしはら「歌水」
 一上り 調子水府史館總裁にてありし小池源太左衛門中根元圭に逢て音律のことを聞ける時
 二上り 三下りなど三絃に申候一上り一下りと申こともこれ有べきにいまだうけたまはらず
 如何と申候へば喜び候て申候一上りの調子の音曲を引て見候へとて銀座のよはご三絃ひ
 きの者へ先年申候て引せ申候にとかく妙音出申さず候ひし然る處近年何かしと申座頭一上

一上り
下り調子

りの手を引出しことの外おもしろき由頭日うけたまはり候といへり元圭の律に委しく日本
 の律學取立んとして故ありて打捨たりとぞ

なげぶし

「紫一本」金輪寺の條抑なげぶしと云こと往古にもなきに非ず野曲にも是あり逍遙院殿御歌
 に「おもふことなげぶし聲にうたうなりめでたや松の下にむれぬて紀逸が「雑話抄」に光廣
 卿御作自筆のなげぶし「おなじ空なる影かとおもてみればあやしや月さへさまと共にみぬ
 めいかはるけな「松の葉五」なげぶし唄百首ありその内に「あめのふる夜の一しはゆかし云
 々又」のべに蛙のなく聲きけば云々などあり是今も歌ふめりやすの唱歌なり延寶八年「洛陽
 集」なげぶしや親父初音のほど、ぎす行正「五元集」淺妻舟につゝみを入れて月をみる女の水干
 に扇かさしたる畫に「思ふことなげぶし誰月見舟爰の山中もりのかげ月夜からすいいつ
 も鳴と云ふ隆達が歌を立て秋もの、月よからすいいつもなくと伊丹の鬼貫が句あり
 「春臺獨語」に盲法師妓女などのうたふ歌も寛文延寶の頃迄の長歌らうさいなごいふ曲あり
 て俗ながら詞やさしく節もゆるやかにおほらしき事ども多かりかりそめのそゝる歌も小倉
 よし野などいふの詞やさしくよき人の前にて諷ひても聞にくからず
 慶長ころざんざと云歌はやれり「竹齋物語」に石村けんげう參られて歌のてうしを上につ
 り情の今の思ひのたねよつらき後のふかき情よ雨のふるよにたがぬれてこぞのたそとお
 しやるいよそ心さかなさかづきとり出したひく申てはづかしけれを又ざんざなごうた
 ふ云々「一代男」越後寺泊の條に六七人聲して三國一しや拍子があふのあはぬのと同じこと

ざんざ

踊まばつき

のみうたひけるはどに亭主にやうすをきけば此ころ上がたよりさうんざと申小歌がはやり
來りこゝもとの若い衆いろくけいこいたせども聲がそろはぬと申はべるさても世のひろ
いことを今おもひ合すまばがきおどりのまつてかどたづねけるに夢にもあらずと申云々
ばがき承應明曆ころはやれりこれ田舎の流行におくれたることをいへり

〔大幣〕に貞享新曲として載たるハ皆長き歌なり〔松の葉〕元禄十年にハ是を長歌といへり天和頃の歌舞
に小歌ありて長歌ハなし又あやつ
り座にも小歌端うたなきあるしたり

ほそり

〔大ぬさ〕の頃まてハ長歌といふ名いまたあらざりしにやその長歌ともハ江戸淺利檢校佐山
檢校京朝妻勾當當風引出すとわれは歌舞伎より起るにあらすはそりハ〔大ぬさ〕破手の内に
唯ひと歌あり〔松の葉〕にハ下總はそりとあり七歌ばかり載す〔大ぬさ〕に出たるも入たり
〔小歌惣まくり〕にほそりづくしありて其歌の内にはそりのヤレ出さるハやまとの
つばさそのふしなをすなみのいたにぐみさあるハ西國順禮の歌より出たるに似たり口説ハ長歌にあらす〔松の
葉〕端歌の内にくとさありもと平家山節の名なり舞なども口説あり

加賀節

〔昔々物語〕享保よりなれば寛文四年に當るまかれ共寛文元年に法度ありて今の如く芝居三
ヶ所に定れり六十年已前禰宜町の狂言勘三郎座に多門庄左衛門野郎に出來島小ざらし花井
才三郎上村吉彌玉川千之丞山川内記玉川主膳これらハ禰宜町にて無隠美男の拍子利なり
聲もよくこれら寄合加賀節といふ歌を唄ひ出す諸人感せり最前のろうさい節に負ぬ歌なり
といへり〔錦繡綴〕に「とふしを加賀商人の聲れかし□□やりての下戸や宵の間の月其角是
元禄中の付合なり天和三年の文三千風が〔行脚文集〕加州金澤の文に燕樂の加賀節も此時に

めりやす

はやり出悲哀の柴垣早歌ハ遠く廢れて吟人さらになし加賀節唱歌ハ〔松の葉〕に出たり短歌
なり〔松の葉〕端歌の内かゞぶし「つとめものうきひとすぢならばとくもきえなん露の身
のひかけ忍ぶのよるく人にあふをつとめのいのちかな、是程の歌六らたばかり出たり山
東京傳が〔大盡舞考證〕に秦の始皇のみかりの時云々此一段加賀ぶし上るりの文句をとりて
作りたるものなりと云りこれ今ときは節にかたる老松の文句なりかゞぶし上るりとい件
の端歌のかゞぶし上るりにあるべからず宮古路豊後が弟子にて脇をかたりし加賀太夫が
ことハあるべからず元禄十四年版〔諸藝太平記〕に此文句にふし付たるが出たり

めりかり

今歌舞伎芝居にめりやすといふハなにもふに江戸らうさいの移りたるもの歟〔櫻橋〕に明暦中都島
よし原にてつきふしさいへるもの大にはやり萬治年中大坂新町のまがきふしさいふ元禄寶永の頃迄これを相傳して江戸
し正徳年中より中絶して古ほど行はれず今も常津廊の内はこの唱歌に妙を得たるものありてこれに開侍りしに都島原のな
げふし江戶半太夫ふしさいの問の
のにて幽玄にて面白き歌なり云々
手覆のめりやすハ手の大小ともに合ふなれば其義をとりて此歌狂言の合方によくかなふと
の心に名付たりといふハ非なりめりかりハ音聲の甲乙をいへり上下輕重の差別なりかりを
俗にがんといふあがる音なりめるハさがる聲なればめるハ易きといふ義なるべし手覆のめ
りやすの
こゝハ服飾部に出
たり見合すべし俗にめかりのきくといふことハこのめりかりの省きたるなり豊前の國なる和
布刈の神事のことハするハ非なり

原武太夫ハ〔斷絃餘論〕ハ元文中三絃を弾ことをやめて年經て此論を著せり昔の上手ハさ
のみ達者を好まず種々弾かたに趣段ありてひきしめゆるめのびちみおこづきとび込さま

りりり

くの間拍子手くだか有て歌も聲よろしきばかりをば賞翫せずかたり味に工夫せし故面白
 き手くだか感應なることあり今に其歌のこりやんことなき席高位の間にもふつゝかならず
 歌の文句もやさしかりしが今のめりやすといふことはや野鄙なる文句歌のさまもいやし
 く成ていつともむけんと言ふのかたちめつたむさやうに打つけたきつけてひくを達
 者とやらいふよしなり（めりやす豊年藏）に長き歌あるを件の説に合せ見れば歌の長端に
 よらず（歌舞妓事始二）に扱又一部の内毎事樂屋にて三絃をならす是をめりやすと云ふ（甲
 陽軍艦）にも出たるめりやすと云ことを下略して是を名付る（同書四）或人云めるはる
 はるのめると云ことあり藝をなすものせりふをはり突こみてする時の見る人めるなり仕打
 骨髓になす時の見る人はるなり因てめりはりの大事なりこれらによりて見れば樂屋にてひ
 ける三絃をいへるかもとにてそれに合せうたふ歌をもめりやすといへるなるべし
 山崎久卿云（女里彌壽豊年藏）といふもの實曆年間の刻本にしてめりやすを集たるものなる
 にその中に長歌これかれを載すさればその頃の長唄をも槩してめりやすの内に入る是をも
 てみれば長唄のめりやすの長くなりしもの歎といへりいかさま原夫がいつとも無間と獅
 子との形たき付てひくなといへるの今いふめりやすのみめりやすといふにあらざるぞ
 「松の葉」長唄あり其歌ども今も上方歌の中にあり然らば狂言に合せ作りたる芝井歌の大か
 ためりやすなるべし寛保のころ佐野川千藏といふ女形聲よくて初めの豊後ふし淨るりなど
 を出語りにあたりしが頓て富士田吉次楓江と名をかへ歌うたひと成て大に行はれぬこれよ

り歌舞伎唄を世に翫こと盛なり後安永頃萩江露友よくめりやすをうたひたれども楓江に
 及ばず

土手ふし

土手ふし（洞房語園）に尾高如醉齋といふ隠士あり寛文の頃鶴鶴組吉屋組等の男達のうたひ
 はやりし土手節といふ小歌の此翁の作なりといへり（同卷）に醉翁作とありて土手ふし（か
 りる三谷の草深けれと君が栖とおもへばよしや玉のうたてもなうておろかでござるよ所のみ
 るめもいとはぬ我ぞやにねわらひやるな名のためつに、其頃吉原へかよふ者往來にうたひし
 也或人云「吉原雀」富士田吉次がうたひし唄
 也なり市村羽左衛門書妻藤藏所作をたたり其唄に「それわみ等もそこにおけ二階さしきり右か左か
 奥さしきでござりやす云々いへるの土手節を其儘とりたるなり此歌三絃の手原武が作なりとぞ
 （京鹿子）も同人の手付なりと云り

大盡舞

大盡舞の俳優二朱判吉兵衛が作の小歌なりといへり吉兵衛小唄の上手なるよし（吉原徒然
 草）に見えたり吉原にふるき小唄の残りたるの是のみなりとぞ吉兵衛の俳名を一其と云ふ
 小男なれども藝の位上々吉に至る其頃乾金の二朱判の小くて位よき金なれば准へて異名に
 よべり明和二年八月十六日享年八十餘にて死すと云り（醒齋が「大盡舞考證」
 の説もかくのこと）其文句の一人の作に
 のあらじ平澤氏が（後の昔物語）に我父の友に小久保洋也といふ老人ありこれも乙卯の生れ
 にて我に六十とし上にて此老人の咄に几帳といひし傾城の紀伊國屋文左衛門に請出された
 る女郎にて有けん此几帳になじみたる士の此隠居の覺えたる男と聞えしが名も忘れたる
 几帳紀文に請られて力を落せしを餘の人半太夫ふしに作りて語りたりとて隠居も語りき
 「舟の着たるサア起されふつゝはつたり寐入らぬ儘につくく」と宿の首尾のみ案ずれば

半太夫ふし

我黒かみもまらがとなり樂しみ盡て悲しみのなんだ袂をうるほせり几帳にのたまされて二枚五番の小脇差純子三本もみ五疋綿の代迄とり揃霜月半に送りしに終にそれとてみせもせず今の文左が寶もの、と云ふ文句なり云々いへり「松の葉」あづま淨るりの部半太夫節にきてうといふ歌即是なり少し異同あり此老人の覺えたるの本の儘にて文左など名も出たりそれを二人が中とかへて廣くうたひしなるべし大盡舞にこの贈りものを紀文がことにまたりさにいならず

いぢるこ
いふ事

なげふし

よしの山

今俗何藝にてもすこしばかり學びたるをかぢるといふのもと三絃にのみいひし事なり「伊呂芝居」と云草子に當世女の子をぞだつるやうをいふ所何市くらゐの座頭藝の上手なれと隙などいふを開出し此わろにかけて時行歌よしの、山の鼠がかぶらふとも二上り三下りにあたまから仕込てもろふ云々「色競馬」けいせい吉野人の琴ひく所爰を通る熊野道者手に持たる椰の葉笠にさいたも椰の葉といふ歌を今の目から見れば鼠のかぶるやうに琴かきならせば扱もこの幾筋もある糸を一時に指ひ唯三本にて引ならし給ふの名譽なりと聲をろへて譽たてけるこれ近代なげふしといふいなぎぶしのかはりにて籠の鳥かや恨めしやと「好色大鑑」の作者が作りかへたる唱歌の根元なりといへり投ぶしをなぎぶしとするの非なりその歌「大鑑」の作者箕山が作も有べけれと悉くさにはあらず

小倉踊

川崎音頭

間の山

伊勢音頭

れどもさやうのものなし云々花のふいきりよしの、山の歌なり昔の初めに是を教へしなり「春臺獨語」に小倉よしのなどいふ詞やさしく云々いへるこれなり小倉をどり「をぐらの野への一もとす、いきいつかほに出てみたれおをたまこがれて秋こがれつ」といへる歌なり「卜養集」に八月十五夜の月をみつまたの波に船を浮べて云々世の人も酒もりをすたれふねなどにて小倉踊といふ事をうたふその頃の歌に「さすやうでさんくさぬいぬいぶ夜のつまとおたまこがれて秋こがれつ、云々「紫一本」に宵國川納涼の所に當世風流伊勢音頭さすやうでさ、ぬい人まつ宵のから木戸延寶巳年より伊勢をこりはやるさいへり小倉踊のかへ唱歌を伊勢音頭にうたひし川崎音頭の始の間の山節なり「二代女」神風や伊せの古市中の地藏と云所のゆさん宿に身をなして所からとて間の山節あさましや往來の人に名をながすといつれがうたふも同音にしておかし云々伊勢兩宮の間なれば間の山と云ふ今も淨るりに加はりて間の山と云ふ音節残り「伊勢名所圖會」に古市の昔の市場なり古市も間の山の内にて間の山ぶしをうたひしものなるに物あはれなる節なる故いつの頃よりかうつりて川さき音頭流行して是を伊勢音頭と稱し都鄙ともに華巷のうたひものとなれり古き文義の甚雅なり今も年々新作出といへり川崎といふも其わたりの里なり舊名川崎の里と云ふ又按に小倉の歌におたまこがれてとある此歌を間の山にてうたひし故お杉ね玉といひはやしたるにやね杉といふもさる類にうたわりしなるべし

琵琶法師 平家物語 地神經よみ 天夜尊 都方城方 雨夜の城了 城をひと訓し

琵琶法師

こと ○盲女 御前腹どり按摩、
樂いすべて警者の業なるべきを唯琵琶の蟬丸よりこのかたむねと盲人の業とす故にびは法師と稱する事古より聞ゆ〔源氏物語明石の巻〕入道びはの法師になりていとおかしうめつらしうてひとつふたつ引出たり〔抄〕云小右記寛和元年七月十八日の條を引て云召琵琶法師令盡才藝給少録云々あり後世〔平家〕出きてより専ら是をうたふ平家物語作者のこと數説あり普通〔徒然草〕に後鳥羽院の御時信濃前司行長遁世して慈鎮和尚の扶特をうけ平家物語を作り生佛と云ける盲人に教て語らせけり武士の業の生佛東國の者にて武士に問聞てか、せけり彼生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師の學びたる也〔參考〕云行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや平家のふしもたはくは家の聲明のこゑに似たる所あり〔六道講式〕のはかせ及び叡山大會の時などよみあぐる聲明のふし今の座頭のかたるによくうつりのまがふ所多し又頓寫の時是をかたるも台家より始れりといへり〔和事始〕に云〔臥雲日件録〕むかし爲長播州にあり後性佛といふものこれを音曲にのほせて歌詠すといふ是警者平家物語をうたふ始なり性佛の後と如し檢校云ふ如一が弟子二人あり一と覺一と云ひ二を城一といふと有り〔一枝軒隨筆〕に如性城一其弟子城賢恕一其弟子明石角一高師直に師と語り聞せ馴治が事起る云々といへる、當道記條の説にかなへり角一〔太平記〕に覺一とあり

平家物語

法師の平家を傳ふる者一部十二卷に通ずるを一部平家といふ其外に鏡劍の巻と云ことあり今この録卷を〔太平記〕に附るは是を大秘事として護りにうたはず故にその文段を去らず世に傳誤なり〔平家物語〕に屬へきなり是を大秘事として護りにうたはず故にその文段を去らず世に傳ふる古寫本多く異同あるの警者の口授其儘あるし、故なり警者の用るのかたり平家として印本との異なりとも云り〔長門本十二卷〕〔東見記〕云長門赤間關に平家物語あり常の常の平家物語とは

琵琶法師
參院の事

いたく異にして〔源平盛衰記〕の異本といふべきもの也毎卷長門國安徳天皇儀奉納信濃前司行長以自筆一本書寫畢と記せり又〔八坂本十二卷〕奥書云寛永三年春の頃藤田檢校城慶加賀國にて筑後方檢校城一用ゆ雲井の本と奥書侍る平家物語を求め侍りき此本則雲井と奥書侍る故に藤田檢校城慶此本を用て入坂方の平家と號す〔平家物語抄〕〔廿四卷〕ハ作者詳ならず十二卷と上その中抄傳記圖經等の説々載す〔平家物語考證〕〔十二卷〕松堂閑人四醉生編洛陽後學源道格集羽林中郎將藤原定俊補とあり此書物語の本文ハ要をつみて全文とのせず諸書を引用して註す事甚詳なり

〔醍醐雜抄〕云平家作者事或〔平家雙紙奥書〕云、當時命世之盲法師了義坊實名如一之説云、平家物語、中山中納言顯時子息、左衛門佐盛隆、其子民部權少輔時長作之、又〔將門〕〔保元〕〔平治〕已上四部同人作、云々、此時長先作平家廿四卷之本、龍伊勢太神宮訖、是佐渡院之御時也、順徳帝是也、後嵯峨院御在位之時、吉大貳入道輔常作之、平家物語、民部少輔時長書之、合戰之事依無才學、源光行誂之、十二卷平家資經卿書之、〔同書〕又云、又〔鶴談集第七〕云平家のものがたり民部少輔時長かきたりける合戰の中をばさいかくなしとて源光行にあつらへたりけるとなむ十二卷平家と云もの資經卿書之

びは法師參院事〔薩戒記〕應永卅二年六月廿七日、云々、藏人中務丞源重仲來密談曰、近日主上上皇御中不快、其故召琵琶法師、可聞召平家物語之由、自内被申院、無先例不可然之由、有御返事、同閏六月廿一日己丑、天晴、依召參院、琵琶法師參入、語平家物語、

〔貞徳文集〕〔卯月四日條〕今朝都方城方檢校衆勾常列座平家聽聞申候云々調子甲乙明に相交白聲又ハ二重三重被線上候面白事無申計候又〔九月十六日條〕夜前平家殊勝之由檢校衆被感候云々指聲

白聲口說中音三重自由自在誠に昔覺都も可被及難候物語節の書寫寺聲名之聲句被摸由候
必定候哉云々〔臥雲日伴録〕に爲長平家を作り播州に留むと有によりて書寫寺の聲明を摸せりといふ説もあるべし白
しと〔花洛六百句〕に「近江林武藏調布千之丞聲なきつて伊せの濱歌云句あり前句ハ玉川の名物をほめたり脇にいせ
と云へる此の後に伊勢に退きたればなり扱このかなぎつていへるを〔西鶴大鑑〕に千之丞が風吹いおきつ白聲にて
調ひ出して家体の御座をあげての〔俳諧懷子十〕ことばの色もやさかたにして平家さく人引とむる琵琶
面かけ云々いへるにても知べし〔俳諧懷子十〕ことばの色もやさかたにして平家さく人引とむる琵琶
一種盲人琵琶を鼓し〔地神經〕を誦して寵神を祭る佛說地神經一卷あり鄙俗の文字にして藏
中になきものといへりくわうじんハ障得神にて如來荒神鹿亂荒神怒荒神の三身を三寶荒神と
よべり〔元障得經〕にてたり寵神と荒神と稱し祭る佛說になき事とぞこの寵神をな
すもの今ひははうしと呼で當道の替者の賤しめて部類を異にするものなり古へびは法師
といふのすべてびははうしは彈て平家かたる者をいふなり賤きびははうしも古くありしなるべし直
幹申文の畫卷物に地上に菰を敷て居りびはを彈て錢乞ふさまの盲人をかきたり享保十三年戊
申九月十九日

地神經よ
くわうじ

天夜尊

名字の最
筑紫方
八坂方

子光孝天皇御同腹の御弟なり〔當道式目〕にハ光孝
の御子なりとあり御兩眼あるさせ給ひ貞觀十四年壬辰二月十七
日御歳四十二歳にして薨し給ふ御法名法性禪師と申す云々〔當道式目〕にハ洛中の盲人を集め御伽と
の盲人等に勾當の女官を賜たまふ尊へ大隅日向薩摩三ヶ國の□□檢校の官位の内を以て御節に賜り年々
貢物を船に積山城國鳥羽の濱に漕入綱引す尊の憐愍有て盲人是と別分す其後停止其代として□□たまふ
當座名字の最初の後宇多院御宇城一檢校在名筑紫方是の菊池某庶流にて其頃筑紫に住居た
るが故に號す城一の弟子在名八坂なり伏見院御宇久我殿の御舍弟にて八坂塔の邊に住居た

坂東方

總檢校

紫衣勅許

一八坂方
綱引
漕入

涼の塔

るにより八坂と號す一方の初ハ如一檢校是ハ城一弟子在名坂東其頃坂東住居たる故坂東と
號す一方中興ハ覺一總檢校是ハ如一が弟子在名明石其頃足利家の庶流にて播磨明石に住居
たる故なり是職役總檢校の始なり云々

檢校へ紫衣を勅許の宣旨蒙りしハ百三代後花園院御宇竹永總檢校なり平家琵琶の最初の性
佛檢校なり是ハ四條院御宇攝政家
道公御孫なりといへり〔當道要集〕云四條院御時性佛と云僧あり比叡山檢校なりしが
俄に盲人と也山王の示現に依て平家物語を語る云々城一檢校在名筑紫城一弟子二人有一人
ハ如一檢校として一方の最初在名坂東一人ハ城玄檢校として在名八坂八坂方の最初此時一方ハ
坂方兩派に分る今の綱引正月漕入の儀式是より始る又ハ石塔として毎年二月十六日當道出仕
かの尊の祭儀をなす又一萬卷の心經を讀國土安穩を祈り卷數禮物相添久我殿へ納む云々二
月十六日石塔として都鄙の檢校勾當末々の座頭迄出仕綱引として職祝儀の平家を語り始其後頭
人延喜聖代を語る六派より五句の平家を勤同十七日未明東河原に出仕諸道石塔を積是ハ天
夜尊の御吊と號す三月廿四日に御經流しとして法華經を書寫し兩職事檢事にて加茂川へ流す
事是ハ安徳天皇の御吊と號す趣意ハ平家を語るを以て當座の家業とすればなり六月十九日
涼之塔出仕石塔おなじ今ハ石塔に河原にハ出づ佛光寺高倉に清壽庵といふを設てそこに天
夜尊其外あまた檢校の位牌あり爰に詣づるなり久我殿より警固の人來る又右等の會集に一
老ハ出づ二老より出席あり座次ハ三升の紋のやうに居る衆分ハ中座なり是世諺にいハゆる
座頭の中さしき也とぞ石塔のこと〔雍州府志〕陵墓門に見えたり清壽庵を清聚庵とあり〔望

一后千句の涼みによりてひくびはの音大瓶をくみはじめぬる職の前これ六月の集會をいふなり今も大瓶に酒を盛て出すことなり

天野氏の「鹽尻」に昔朝家盲人を憐み玉ひ上加茂封境の内に田疇を置て歸する處なき盲人を扶持し玉ひ又日向國に官稻有て衆盲の食に充給ひしと云々是又療病院の類なるべし中世大地田施藥療病悲田の四つの院を建貧病及び重病のもの此内に養ひ其勇壯になりし者には業を授け生を遂しむ凡此四院の内敬田院のみ僧侶の舎にして殘る三院は多くハ惡疾穢火の者聚り或ハ一旦食せしものあればそれより進じて彼三院より出たるもの末ハ乞食の部類と呼なり云々

昔天王寺の四院ハ攝河兩州の内にて官稻三千束を費用に賜りしと古記に見え侍る然れ共生佛已來如一覺一などが如きの又別にや殊に覺一の明石檢校と稱し尊氏將軍の族なりし是より盲人世に威ありといふ又城了が聞雨の歌「夜の雨の窓をうつにも暗ければ心のもろき物にぞ有ける天聽に達し夜雨と勅號を下されしとかや後小松院勅賜なり盲人の事かける物に光孝天皇の皇子明をうしなひ給ふて雨夜の御子と稱せしと云々帝紀を考ふるに光孝三十三子にして雨夜といふ皇子なし思ふに雨夜の城了が事を傳へ誤れるにや光孝帝を小松の帝と稱し城了に號を下されしハ後小松帝なり故に事をわやまり記を作りかくいふにや例せば或書黒谷上人光孝帝の姫宮玉判加陵風芳といふありし是江口神崎室兵庫等遊君の濫觴なり或云八人の皇女を七道に遣して君の名をとめなんと傳ふ按ずるに光孝帝にかゝる御名の皇子ましまさずさすれば當時天皇孤獨の窮民を愍み所々に田を置て恵み給ひしを後世誤りて皇子を姫君をといひ傳へ侍るなるべし蟬丸を延喜帝の皇子といひ又乞食の祖といふも此たぐひ歟といへり

丁 雨夜の城

城字都字

城と一と訓し

盲女

いふ

城字都字のこと「庭訓往來抄」には法師中頭ハ旨たる者入道して鼠色なる衣を着てびはを袋に入て廻なり云々近代公家に或公達の旨目ありしを直垂をさせて京中ばかりを經廻られし也餘りに平家面白かりしに依て禁裏へ被召琵琶を彈じ物語をせしなり其恩賞に城といふ字を賜るやさ方の上につくいち方の下につくなり何れも城字なりといへり此こと正否のまらず城字をひとよみしこも都の字用るが如くなりしことあり「醒睡笑」推ハ違ふたさ内和泉の堺市の町に金城といふ平家の下手ありといふに金城にキンイチとかなを付たるハ前説に合へり市の繁昌ハ都城にあれば義を假りたる歟心得がたし「五元集拾遺」凡蟬丸より官をつぐ座頭の都といかにといはれて「三味線」に引てのこりし四ッ緒の一ハめくらの名になりけり然らば城といかにといふ時「幸に成あかりたる土めくら城といふ字のかきのぞきせよ「古記録」に「檢校を建業とも書たり「二水記」永正元年五月七日云々福一建業語平家云々これ記録がきの假字なり

盲女の「甘露寺職人歌合」に琵琶法師と女盲と番ひたり其繪髪をさげ眉作りたる盲女赤き衣きて上に白き衣打かけたるが鼓打て歌うたふさまなり繪の旁に宇多天皇に十一代の後胤いとうか嫡子にかはつの三郎とて詞書あり「曾我物語」なとらたへるにや其歌及び判詞に大鼓かしら打といふ事あれば舞まひの類なるべし舞まひハ此職人歌合の内曲舞まひ白拍子と番ひてありこ曲外百番」小林云曲ありこせごも八はたに詣て内野合戦山名臣下小林の上野介がこせごうたふ處惣じてこせ達の語には女御更衣帝王の御事をも諷に作てうたふ習ひ云々これ「職人歌」の女盲と同じものこみゆ

今女盲をこせといふもと御前の貴人の邊なり故に人をうやまひていふ詞なり物語草子など

に多く見えたり御まへたちといふの御前に侍る人をいふなり今も音にて呼ながらせんと
 いへば重き詞なり物語などに殿の男を申し「源氏」玉かつらの内侍と申すのこのお前といふの女を申
 すならひなり名物の琵琶に殿御前と云あり「胡琴教録」に殿御前の琵琶の繪の、盲女もやむことなき御ま
 へに侍るよりせせといひ習へるにや又の警女の音などにや「落穂集」に我等若年の頃迄の
 躍子杯と申者の縦令いか程高給を以て召拘申度と有之候ても御當地町中に一人もなく
 三味線と申物をば盲目の女より外にひき不申事の様子に有之云々去に依て其節の大名
 衆奥方にの警女と名付たる警女を二人三人も拘置御慰など、有之節の三味線を鳴し小歌
 やうのものも諷ひ座興を催申事に有之候當時の件のごせ杯と申者沙汰もなく躍子三味線
 ひき計りの様に罷成候の元祿之始已來の義にても可有之哉とあり「人倫訓蒙圖彙」に女盲
 が男に三線教る所をかけり其條に御前の光孝天皇の御子雨夜の前にはしまるといふ説あり
 是もれきくのおくがたへも出入又のいとけなき娘子に琴三線を教へ侍れば身持きやまや
 にありたきものなりといへり此草子に座頭の條に雨夜の御子の事はなく却てこの處に
 漢土に「陽谷漫録」宋人京郡中下之戸、不重生男、每生女則愛護、如捧壁擊珠、甫長成則
 隨其資質、教以藝業、用備士大夫採拾娼侍、名目不一、有所謂身邊人、本事人、供過人、針線人、
 「堯山堂外記」曰、杭州男女警者、多學琵琶、唱古小說平話、以覓衣食、謂之陶真、云々、

陶真

按摩

腹さり

按摩さり
笛を吹く

足力

薦僧
馬ひじり

次にいふ按摩の「令」の典藥寮條下に師二人、博士一人、生十人、と見えたり接骨もこのわざな
 り「榮華物語」布引み奉らせ給てなかせ給ひければおと、宇治殿のなになくいたきところやある
 東宮の給ふなりはらどりの女にとらせよかしわれもさこそすれと有はらどりの按摩なり「續
 白川天皇」なり「かふるやり手にたいて持せやざとらにわんまどり」

按摩とり笛をふく事「太平樂府」に河東夜行、按摩痲痺吹笛去、温飴蕎麥麩火行、是明和六の撰なり
 しいふにや江戸の、其後天明七年「狂詩諺解」に按摩の笛を吹の近ごろの事なりといへり「甌北
 集」に兒童敲背詩あり兒童娛我度、良宵、如巖拳輕把背敲、一个西瓜分八片、阿翁大費爲酬勞、
 次に云「雲谷臥餘」に朱少章名辨と云もの建炎年中金の國に使に行て灸二百餘壯をすへたる
 中に排律二十韻を作れりその内の句に煙微初灸手、氣烈漸讀皮、こゝにて世俗初めの三壯を
 皮さりと云是なり

足力「福富雙紙」に軀か夫の腰を踏む處あり

薦僧 尺八、簞、依客尺八を吹、 鼓弓、ちへい、 提琴、胡琴、 四ツ竹歌板、 木琴、擊、 風樂、オル
 音律の妙、山びこ、

薦僧の「甘露寺職人盡歌合」に暮露とあり其歌に馬ひしりともいへり「徒然草」にさら梵字と
 いふ暮露師の仇なるいろおし坊と云暮露とかたみにつらぬきあひて死たる物がたり有てば
 ろくといふもの昔のなかりけるにや近き世に梵論字梵字漢字などいひける者其始めなり

けるとかや世をすてたるに似て我執ふかく佛道をねがふに似て鬪諍を事とす放逸無懶の有
 さまなれども死をかくして少しもなつまさるかたのいさぎよく覺えて人のかたりしまゝ
 に書付侍るなりといへり暮露といふものその所行右のごとく其形状の「ぼろく」の草子
 明惠上人に兄弟の出家あり兄を蓮華房弟を虚空房とぞいふ兄の念佛修行に諸國を廻り弟の活
 僧の風を學び頭髮を半にきりて繪がきたる紙衣をきて一尺八寸の太刀をはき八尺の檜木の
 棒をつき諸國を行くといへり尺八のこの腰刀の寸法なれ此さま「職人畫」の畫にかなへり髪は散亂
 ば後にこれに「へたるにやる、故に鉢巻をなし刀をさし黒き袴に白き衣着たるの紙衣なるべし兼好が物語の暮露此さ
 まにこそ「沙石集八」ある入道法師云々所領得替の後ひたすら暮露々々の如くにて惟に紙
 衣をきてぬるその頃いまだ尺八をふかす其後薦といふのむしろをも負てありきければなり
 「三十二番の職人歌合」に算おきと薦と番ひたり題の花と述懐なりこの歌「花ざかり吹と
 も誰かいとふべきかせにのあらぬこもか尺八」さし入もみるや酒やのかすはらし聲をかへ
 てもこふの茶がほり判詞に薦僧の三味紙きぬ肩にかけ面桶腰につけ貴賤の門戸によりて尺
 八ふく外に別の業なきものにや云々も僧の歌糟法師に乞食の愁吟をゆづりてわづかな
 る竹のふしに世をわふる聲を切いたしけむもわりなき方便とこそおぼえ侍れみそにも酒に
 もはなれぬ詞にて此かす法師いひよりて聞ゆとあり其この畫大概前に引る「職人畫」のさ
 まと似たれども鉢巻せず紙きぬの袖なくて放ちて着たり腰に面桶と薦の巻たるを付たり薦
 の野外露宿の用意なり今宿なしの乞食をこもといふとおなじはろくとい「徒然草」に梵論

こも僧尺
八と吹事

普化禪師

と云名のぼろ見えたれどそれよりの名にもあるべからず今もいふ詞にて物の朽やるゝやう
 のことにいへるこれなり「今物語」に門の下に法師のまことにあやしげなるがかしらいたつ
 かみにおひてかみきぬのぼろくといあるうちきたる暮露と書かななり
 こも僧尺八を吹ことい傳ていふ法灯國師漢土より居士四人をつれ來り播州鷲靈峰に居る或
 人海上を船に乗り通りければ異音の聞ゆるを怪み尋ね求めて山に入ば一人の居士尺八を吹
 居たりよりて其術をこひ弟子となれり霧海渡り其時の曲名なり禪語に霧海南針と云事ある
 による是より其者名を虚竹と改め諸國に遊行せむと居士語を書て贈るこれ臨濟が録の内
 に普化鐸を振て市中を唱へ歩行く其詞に明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打、四方八面來也旋
 風打、虚空來也連架打、云々、師曰、我嘗疑着此僧といふ語なり師は臨濟なり是今かの徒の本則と稱す
 るものなり此語書たるを本寺より許され得て遊行し物を乞ふ事なり江戸に、鈴法寺と一月寺の
 二派本則と出す鈴法寺本則
ハ鈴鐸語普化禪師也、常入市振鈴云々ありて疑者清漢といふ處迄書その次に後街峰頂看雲人、普化堂中第一祖、武州多
 摩郡青梅嶺山虚空院鈴法寺印、現住某印月日興ふる人の名とありまた一月寺本則ハ普化常於街市搖鈴曰云々、疑者遺
 漢とありて尺八、夫尺八者法器之一也、謂尺八者大數也取三節之中定上下之長短、各所表三節者三才也、表裏之五紋者
 五行也、此是萬物之深源也、吹之則萬物興我融、冥而心鏡一如也、天蓋夫天蓋者壯嚴佛身之具也、故吾門準擬之也、靈山一
 月影輝、萬派普化、孤風德覆、三州下總、嘉飾、郡風早、
 庄小金龍山梅林院、二月寺印、院代某印と有り、また虚空といふ曲の右の虚空來に本づくかの輩をほろ
 んじといふの尺八に五穴ありこれを五智の如來に表す其内笛の背にある一ツの穴をポロン
 に充その梵字永かくの如し佛の種字なりといへり此説うけがたしぼろんじが後に至りて尺
 八を吹たるなれば尺八よりぼろんじといふ名起るべきにあらざり又俗説に普化の時空中の鐸音と學
 びて虚空の曲を作れりといへり
 「鹽尻」にこも僧の尺八を業とするの良菴といふ禪僧より起るといふと有り良菴といつころ

の人にか〔狂言記拾遺〕の内にもろわんしの尺八の書といふことみゆもしこの良菴歟〔雍州府志〕吸江菴中世有異僧、號朗菴不知何處人也、慕普化振鈴之作略、常好尺八、自號普化道者、尺八一枝之外、不携一物、有人問佛法、則吹一吹而去、與大德寺一休和尚善友、有一壇越、建圓音寺於宇治川邊、請之寺中汲江菴、其所常住也、居無幾不知其所終、此寺始在檜島良隅、云々、後逢祝融變、近年再興黃檗邊、今黃檗派僧住焉、一說虛無僧之爲祖也、非普化而風穴延沼也、風穴好吹尺八、因爲祖者也、

〔都名所圖會〕普化墓黃檗門前の南二町にあり傳云中頃虛無僧の祖普化良菴と云もの、墳なり古へ此地の竹林にして都鄙の虛無僧等此竹を争ひ截て尺八に作る故に今荒廢す原普化禪師の異國の人也此良菴と云もの其宗風を慕ふてもつはら尺八を愛し四方に遊ぶ世人これを呼で和朝の普化と稱す〔博物筌〕に云明暗寺京三條より十三町も僧の本寺關西三十三ヶ國の支配釋朗菴一休と常に尺八を吹みづから風空道者と稱す到る處もむしろに座す依てこも僧と云ふ

尺八

尺八の〔和名抄〕に長笛の次に擧て〔律書樂圖〕云尺八爲短笛カタサヤコ縦向ヘテ吹者也とありて和訓なし〔容齋隨筆〕に逸史云開元末、一狂僧住洛南回向寺、一老僧令於空房內取尺八來、乃笛也、謂曰汝主在寺以愛吹尺八、謫在人間此常吹者也、汝當回可謂此付汝主、僧進於玄宗時以吹之、宛是先所御者、云々〔呂才傳〕云貞觀時、祖孝孫、增損樂律、太宗詔侍臣、舉善音者王珪、魏徵盛稱才、製尺八者十二枚、長短不同、與律諧契、太宗召才參論宗事、尺八之所出見於此、無

由見其形製也〔爾雅釋名〕亦不載と見え〔通雅〕に馬融所賦長笛、空洞無底、剡其上孔五孔一出其背、似今之尺八、云々、こゝにても此器絶て久しく用ひざりし事にや但し〔源氏末摘花〕公達集りて云々大ひちりき尺八のふえなどの大聲を吹あげつゝたいことをさへかうらんのもとにまらばしよせて手づから打ならしむとびおはさう格別にて常に用ひざる物をも取出しにや〔續世繼〕保元三年内宴に此笛を再興の事あり是も今ある尺八に有べからず〔吉野拾遺〕つくしのみや此宮の後醍醐の皇子中務卿懷良親王なり御としもゆかせ給はざる御時尺八をめてんせい妙を得させ給ふよしの川の御幸にふかせ給ふにぞみなれぬうろくづ數忘れず水よりをどりあがりうへにもめづらかに興せさせ給へばたぐひなき御事とぞと有りおもふに今の尺八の後世の尺八を禪僧の將來きたるより弘まれる物なるべし曲尺の一尺八寸なり〔古事談〕に慈覺大師音聲不足の間尺八を以て引聲の阿彌陀經を吹傳しとをいへり

一節截

一節截のまた其後に出來しなり東大寺〔三倉寶物圖〕の内に古代の尺八あり一尺四寸五分と有り尺八の考となるべきものなり又法隆寺に洞簫あり同物なるべしともいへり一節切傳來の宗佐高瀬備前守三井寺日音院近江の安田の城長大森宗薫といへり宗薫が傳の〔日本人物志〕に出たり尺八を吹しもののみな吹事なるべし一節切の抄〔洞簫曲〕に書目あり〔三〕いかのほり其外〔糸竹初心集〕などにも一節切の譜あり貞享元祿ころまでもはやりて琴三絃の合せものに多く用ひしなり〔人倫訓蒙圖彙〕に一よ切の尺八より作り出すものなりさまくの手あり委の〔洞簫記〕に見えたり當時吹手の相國寺の内原田是齋寺町通三條上ル町今西一音とあり

俠客尺八
な吹

〔守武千句〕にまへの四ツうしろのひとつやくをみよなだの志はやの尺八の穴また〔貞徳自注百韻〕に鎌倉の海道遠きさめがぬにおとす尺八何としてまし注尺八の手に海道下りと云のことありといへり〔新竹齋〕に五月五日卅三間堂の處此ほとりほろくの住所なりと云につけて古き發句を思ひ出「口によるや尺八はどなこもちまき又鉢扣をも暮露といへり〔楊鳴曉筆〕に夕がほの暮露人といふ者にかとはれて人の家ことに頭をたゝかれし有さま云々あるの空也流の鉢扣をいひしにや仙臺の人の語りけるの奥州のかたにての今もこも僧茶筌を賣ありくといへり然らばこも僧空也流をも學べる歟とも放逸無慚にしていさみある者故に後世遊俠を好む徒尺八を習ひて吹たり〔見聞集〕に大鳥一兵衛といふもの士農工商の家にもたづさはらず當世異様を好む若黨を伴ひ男のけなげだてたのもし事のみ語り常に危き事を好て町人にもつかず侍にもあらずその者武州八王寺酒屋にて古無僧と争ひして尺八を尻より吹たる物がたり有これ男達といふもの、尺八を吹始なるべし〔江戸技折〕に尺八あはざがらすの鳴なるもの云なるべし大坂新町邸の内に新京橋町新堀町二丁目古へ又この類のみにあらず寛永頃尺八はや阿波座にありしと慶長年中此處に移さる因て此とあはざさいふへとみえて〔目覺草〕寛永二の版獨ずみなとの徒然送るのさらなり調子を習ふに用もありといへどもたゞすきのもの、集り日毎に吹たるおこがまし其ころより延寶頃の譜などになどいへり此尺八ひとも切と弄ぶ圖多し伎に名ある人多くあれ共宗勳のことに高名なり〔日本人物志〕大森策翁宗勳の其先彦七より出幼より音楽を好み尺八に妙を得たり一日宗勳樓に登り曲を吹しに鶯來鳴て是に應ず後陽成院詔して五調子の尺八を作らしめ給ふ是より其名ますく、高し今に至る迄尺八の宗勳を

名ある人

こも僧の
体古今異
なり

法とし學ぶといへり本書漢文今貞享の初宗三といふ者一節切を吹に高名なり宗勳が流なるべし〔雍州府志〕尺八所々造之其内宜竹之作を妙とす近世指田某が作亦よし笛を吹もの數流あり牛尾流一柳流守田流等なり近世兩流あり宗左流西實流といふ宗左が弟子理庵宗勳といふ者世に稱美せらる其次を宗招といふ今西實流の絶たり云々〔萬寶全書八〕横笛付一節切宜竹の一代に三十管を作る寒竹なり但し裏のせみに法橋と印なり指田二代今も家あり大森宗勳京の住人二代あり但し名判ある物なり同原紹參三代目なりもろすの竹よし原是齋延寶の頃なり尺八に角カクの内に定の一字あり京逸竹これ又延寶の頃云々享保十八年版本〔江戸名勝志附録〕慶長十七年壬子大鳥逸兵衛并其同類數多江戸にて誅せらるこれけんくわと好み辻切をなす惡黨なりこも僧の體も移り變りて今のむかしといたく異なり承應明曆のころ野郎あたまにのあれど散髪にて常の編笠をかぶり白布のひとへを上に着たるのそのかみの紙衣の遺意なるべし此体元祿の初め迄もまかり其頃より袈裟を着たり笠の其後迄も淺く開きたるなり其磧が〔賢女心粧四〕俄に尺八をけいこして袖を鼠色に染させ綿厚に仕立て摺鉢をみるやうなあみ笠をとくのへ云々いへるがごとし寛延の頃に至りて大かた衣服も今のやうに丸くけ帯などをなりしが笠の下の方廣き窓ある編笠なり今年人食食杯の着たる笠なり錦の笛袋を腰にさげ笠も沓める形を用ひて今の笠にくらぶれば少し淺きかたなりだて風俗になりし、明和以來なり

鼓弓の三線と同時に琉球より傳ふ琉球にの毒蚰多しラヘイカといふもの有て蚰を食ふラヘイカの鳴聲小弓の音に似たる故に蚰これを怕るその小弓の製糸三筋なり石村檢校これを傳

鼓弓

らへい

へて三線を作り出せりと〔糸竹初心集〕に見えたり三線を鼓弓によりて作れりといふの非なるべけれど鼓弓も糸三筋を用ひしこといさもあるべし寛永ころの繪に於ける鼓弓三絃にて槽圓く弓いと小さし鼓弓もこの檢校能手にてありしにや〔竹齋物語〕に又あるかたを見てあれは遊女ゆふくん集りて若き人々打まじりあやみせんこきうにあや竹やまらべそへたる其中に石村けんげう參られて歌のてうしを上につけり云々此器かの蟲の鳴聲に似たる故テヘイカとも呼りて見えて神田貞宜が〔淺草舟行の記〕に琉球にて三線の蝮皮小弓のラヘイカといへりとあるせりラヘイカ何にかあらん蝮を食ふ蟲のむかでなりむかでの鳴よしをきかず〔宋書〕王素傳、山中有蝮蟲、聲清長聽之、使人不厭、而其形甚醜、素乃爲蝮、賦以自況、といへり蝮の馬蝮にてやすでと云ふ虫なり〔本草〕にも夏月木に上りて鳴と云り又鶏犬に毒なることいへれども蝮を避ることいみえず

〔中山傳信錄〕また〔琉球國志略〕に蝮虎尤多、作聲如雀、冬夏皆然とあるの蝮の類か薩摩大島にヘヒリといふ物は是なりといへり蝮を食ふやいか〔季吟獨吟百韻〕に神代よりこそ伊勢おどり歌あまてらす月のこきうの弓張て〔春臺獨語〕に胡弓といふもの三線のたぐひなれども其わざこといやしげなる故にや好むものも少く唯めくら法師非人の所作にてやみぬれば風俗を破るほどの事なし〔和漢三才圖會〕に鼓弓始於南蠻といへり南蠻といひづくをさすとも辨へがたし唐がらしを南蠻胡椒といふ類にや然らば廣く異國を云なるべし此器も三味線に種々の形あるが如くその形さだまりたることもなきにや今新渡に於るはず竹

提琴

胡琴

四ツ竹

歌板

にて造り槽のさしわたり二寸計の竹を長さ二寸五六分計に截たる面に蝮皮を張たるものなり柄の細きこま竹を用ひたり弓の柄の長さほどありこれを清の人の提琴と呼ぶ古畫に見えたるといいたく異なれども馬尾にて糸をする其音かはりたることなし又一種槽を木にて作り形の面の方にして裏の圓くこれの蝮皮を面にはかり張りたり其さま圓腹如半瓶楹とも謂つべしこれの馬尾をも用ひ又の細き竹にて磨る〔藝苑日勝〕潘之恒〔絃子記〕曰、余與吳門張聘夫交、特父小塘以提琴授、今聘夫以三絃鳴之有提琴、これなり〔秋坪新語十一〕拉胡琴唱秦腔〔鼓子詞〕古より琵琶をのひ胡琴をのひ四ツ竹此器の今もいと賤きものにて誰もその始など尋ぬるものもあらじ其起りの承應元年その頃長崎より一平次といへる男來て四ツ竹と云事を始て手拍子に打世に此を持はやしたりと西鶴が〔大鑑〕にみゆ犬うつ童までも玩しかども貴人の御手に觸らるゝ物にあらざといへり〔人倫訓蒙圖彙〕に長崎の一平次といふものはしめ有徳なる者にてありしが藝の身をたすけぬ籠のうづらとやらんにて四ツ竹故に大坂にのぼり芝居はられたりと有り〔中山聘使略〕に相思竹〔ダゲ〕とありて圖を載せ傳へ聞琉球にて是をならしなから踊ることありといへり是又清俗に倣ひしものなるべし彼國の南京繪に女の手にこれを握り鳴して踊るさま畫きたるもの有り漢土にての歌板といへる物は是ならむ〔秋坪新語八〕蘇州に一乞人詩を賦して死す官捨屍得其所書、乃七律一章曰、心性從來似野牛、偶携竹杖過江頭、醉監帶露宿殘月、歌板迎風唱晚秋、兩脚踢開塵世事、一身歷盡古今愁、從今不倚人門戶、猥犬何勞吠不休、官憐之爲具棺歛葬之、義塚立石表其事、かく乞丐などの業にて賤きものなれども樂家

木琴 擊甌

に用る笏ひやうしも雅俗のことなれど其用の同じ〔輟畊錄十二〕南方或謂折花曰撈花唐元微之詩試問酒旗歌板地今朝誰是撈花人また〔古杭夢遊錄〕得翁に舊教坊用るところ色部のことをいふ内に策部大鼓部云々方響色歌板色などありこの教坊の紹興十一年省よりこれを廢すと云り故に舊といへるなり〔金瓶梅廿四回〕一般兒四個家樂在傍撥箏歌板彈唱燈詞〔西門慶家童女四〕また〔因樹屋書影〕先大人常作觀宅四十吉祥相有益於世道人心云々不在席上接優人曲不以筋并足代爲擊板その小註に擊板接曲去優人幾希これら板を筋などにて擊拍子をとると見えたりおもふに歌板にも種々の製ある歟こゝにてもさうらわや竹などの如く用ひて拍子をとる〔二代男〕〔元〕枕踊四ツ竹の拍子に合せて其頃の時花うた唐人の戀するのきつくりきつちやなんぞいわけもなき事のみ云々又比丘尼が四ツ竹をうちしこと〔一代男〕〔年板〕耳がしましき四ツ竹小比丘尼が定りての一升ひしやく勸進といふ聲も引きらずはやりふしをうたひ云々ありこれのわや竹を四ツ竹にかへたるなり〔古き譜に比丘尼二手に竹を持左の空手にて膝を打こころあり〕〔丹前能〕〔五〕伊勢の處びくにあやとりといへる是なりあや竹の放下の條にいふべし

音樂にあやうちやくさんくことつらねていへる〔玉造小町子壯衰書〕に簫笛琴笙篋其音純宜々その内に簫笙篋のこゝにて用ひざるものなれど唐土の賦の體にかくつらねたるのみ今の出處も定かならぬ鳴器種々あり須磨ごと〔一〕蝦夷琴木琴〔木の數十四枚板の裏さま〕に影てあり板島の内酒宴に蘭人黒奴筋を吹木琴と云う國風を唄ふことないへりオルゴール等なり按るに〔樂府雜錄〕唐大中初有調音律官大興縣丞郭道源善擊甌用越甌形甌十有二以筋擊之其音韻妙於方響また〔事物紺珠〕八岳如水琰

オルゴール 風樂

凡八置之卓上擊之、後唐司馬滔作、とあり朱琰〔陶說〕按擊甌之風盛於唐、其法、甌中用水加減以調宮商也、習於音而聰者能之、甌取質緊而聲清、此非如點茶佐酒、其竈法佳否上手立驗、〔溫尉集〕中有郭處士擊甌歌、即道源也、又有馬處士者善此技、建擊甌樓、張曙有賦、武公業妾步非煙、亦以此名、見〔非煙傳〕此本因于擊缶、以十二甌、主音律、則擊甌變法、後唐司馬滔、以八缶置卓上擊之、又以擊甌、新意參擊缶古風也、〔楊升庵〕云、今人水琰本此、おもふに木琴の擊甌と方響歌板とをまじへて作れるもの、如し今飲席に木琴を學びて瓷器の鉢皿を筋にて打ならす、却て擊甌の古風に近し〔長崎歲時記〕に出島の内酒宴に蘭人黒奴筋を吹木琴をうち國風を唱ふことをいへり

オルゴール〔廣東新語〕澳門條下に、寺曰三巴、高十餘丈、若石樓、彫鏤奢麗、云々、有風樂、藏革櫃中、不可見、內排牙管百餘、外按以囊、噓吸微風入之、有聲鳴々自櫃出、音繁節促、若八音並宜、以合經唱、甚可聽、是是なり又〔輟畊錄〕に輿隆笙、在大明殿下、其製植衆管于柔草、以象大匏、十鼓二章、按其管則簧鳴、篳首爲二孔雀、笙鳴機動、則應而舞、凡燕會之日、此笙一鳴、衆樂皆作、笙止樂亦止、この笙も似たる物なり

あやぎり今歌舞伎にて打だしの太鼓をあやぎりといふ〔吾吟我集〕祇園會の歌に「精舎に諸行無常となるかねのあやぎりあやぎりにかはる祇園會是歌かねのあやぎりとつゞけたるのかねにもあやぎりと云と見えたり又〔松の葉〕長歌富士詣に兩國川の氣色をいふ所遊さん船がさばぎ集りてあやぎりのをどの合手おひやりこひやりこ云々あるの笛の譜なり〔同

護花鈴
鳥おとし
風鈴

草子「端歌部つしま祭」津島まつりにうかれ出て云々あんがらにちやんきりまつきりふなを
そび云々このちやんきりと有いあやんきりの誤なるべし皆あもじを云文句なればなりあや
んきりの即あやんきり也これに因りておもふに突拍子を今ちやんきりといふもあやんきりの
訛言にや猿樂狂言に金鼓の音を學びてあやまうといへり「松の落葉」あつま上るる露の
路ふりあをのけば入舟のめあてにたつるみあかしの上のお寺のさいかい寺あやんきりくづ
でんど、うつやたいこの音のよさよ云々「歌舞伎事始」小舞唱歌上の寺いつもよりけさうつ
太鼓の音のよさよ上のお寺か安國寺か云々せきりくずでんど、うつたる太このねのよ
さこのせきりもあやんきりの誤なるべし「續五元集」あやんきりを打てのり出す舟吉原にあたな娘のなかりけり
護花鈴など引板なる子の類にて鳥おとしの具なり其他風鈴の風を知る爲のものにて音を
弄ぶ具にのあらず然るに「圓光大師傳四十八」上人の弟子法性寺の空あみだ佛の極樂の七重
寶樹の風の響をこひ入功德池の波の音を思ひて風鈴を愛してとこしなへにつゝみ持て至る
處どに必これかけられけりこれ多念念佛の根本なり云々其圖をみるに「薄き板金を」花
がたに小さく刻みたる物を糸のさきにつなげるを幾筋も集めてさげたり
陸放翁枕上聞風鈴詩に流汗沾衣熱不勝、饑蚊乘勢更縱橫、夢回忽覺南風起、時聞鏗然一兩
聲、また枕上の詩に冥々梅雨暗、江天、汗浹、衣裳、失夜眠、商略明朝當、少霽、南檐風佩已鏗然、そ
の會注に都下新作「藥玉、風響如、古佩玉、珩璜、瑤瑤、悉備、とありかの「圓光大師傳」の古畫の風
鈴も是なるべし

音律の妙

調子を聞
て占ふ

音律に委しきもの種々奇特あり「閑際筆記」に警者城松と云ものよく尺八を吹瀧に向ひて吹
に笛の聲ばかり聞えて瀑の音せず慶長の初ふと人に云やう風水に異聲あり此里に禍おらん
とて愛宕山にのぼりて是を避けるが果して其夜地震つよくして畿内に死る人多かりしとぞ
又「塵滴問答五」十二徒の調子を聞て占ふ事あり近代も伊勢の望都と云る座頭など此術を得
たり又「歌舞伎事始」に元祿中岸野次郎三と云歌舞伎の三線ひきあまたをこれに劣らぬ山本
喜市と云ものあるとしの秋虫の鳴聲を聞三絃の調子細めてそれに合せて弾ければ忽ひしの
聲止たり暫くありて虫また鳴出す時調子を高くして引ければもそれにて虫鳴止す是より
工夫して種々曲節を作れり次郎三の其身芝居に行ずして三絃をならし其日の見物人数多少
をまねり鳴神と名付る三絃を秘藏して常に是を以て音律を論じたりといへり按に鳴神は古近江
人原武と稱す品川にて三絃を弾けるに常に
異なるを怪み沓潮ツツナの來へき事を知れりとなん「耳袋」に近きころ名人紫まらべ賜はりし新九
郎いまだ權九郎といひし頃日々鼓を出精まける召仕の老婆毎朝茶を持來るが或時主人のつ
いみ上達せりと申を權九郎おかしく思ひ其知れる譯を尋ねければ老婆答るに「我鼓をま
べきやうなし先の新九郎の鼓を數年聞けるに朝々煎じける茶釜へ音ひきき聞えける是まで
權九郎打る、鼓のその事なかりしが此四五日その音茶釜へひききける故さてこそ上達を知
侍るといへり年久しく聞なれて自然と微妙に善あしも分るにやと權九郎も感じける
按るに尺八の瀑布の聲に應じ三絃の鳴虫の聲に應ずる各その調子よく合へる故に水の音虫

鸚鵡石
響石

の聲止むが如くなりしにやこの異ながら響石などに、笛の聲金の聲の應せずといへり、〔軒小録〕に伊勢宮川の源なる鸚鵡石を觀たるよしを記して云ふ、其岩の上に居て言へばかの石も亦人の言ふごとく對ふ謠をうたひ鼓を打三絃など彈ずれば石も亦それくの聲をなすさゝやけばさゝやく聲をなすわめければわめく音をなす屏風障子のあなたにて人の言ふがごとし一行の内に笛を携て來る人あり試にふきけれどもかつて對へず不審なる事なり云々又奥田氏より言來る志州の海邊安樂島と云所ありその處に又一ツの響石ありて鸚鵡石のごとし其地海畔にて風景尤宜しき所にて同言石と云となんあり〔本朝俗談志〕新鸚鵡石志州答志郡磯なり音曲管絃ひき答ふるこゝの瀬のあふむ石にかはらず近年きし出せしこゝなりといへり予も先年磯部村伊雜宮に詣し道に鸚鵡石を一覽たり小き出茶屋一軒あり旅人爰に休らへば其三絃を彈て響を聞しむ石よりも十四五間もはなれて三線を彈を聞人の石に近き所に居て聞なりいとめづらしき聞ごとなりき試に石に近くよりて手を拍ものをいふにもよく應ずれども少し隔りたる方應對のあやよく分れてよし土人いふ物の音何にても移らぬいなし唯金の聲のみ對へずとかたれり此石山を和合山といふとなんこの石より後人の付たる名にやあらざり此ひき移るこゝ井戸のそきて物をいふも同じかるべし山彦さいふ處左右鼠敷にて路のかぎの手に曲りたる處にて門立のものもちひ二人して三絃彈來るに逢へり其聲鼠敷の曲り角に對ふるこゝ彼あふむ石のこゝし後に人の話と聞に京師東山の邊に響應する處有り俗にあふむこゝ辻さいふこゝ〔五雜俎〕に響谷寺有琵琶谷拍手輒鳴作琵琶聲其處の形によりて對る聲も異なるにや

〔夢溪筆談五〕高郵人桑景舒、性知音、聽百物之聲、悉能占其災福、尤善音律、舊傳有虞美人草、聞人作虞美人草曲、則枝葉皆動、他曲不然、景舒試之、誠如所傳、乃詳其曲聲、曰皆吳音也、他

山びこ
鸚鵡か辻

日取琴、試用吳音、製一曲、對草鼓之、枝葉亦動、乃謂之虞美人操、其聲調與虞美人曲、全不相近、始末無一聲相似者、而草輒應之、與虞美人曲無異者、律法同管也、其知者、臻妙如此、景舒進士及第、終於州縣官、今虞美人操、盛行於江吳間、人亦莫知其如何者、爲吳音、〔同書六〕予友人家有琵琶、置之虛室、以管色奏雙調、琵琶絃輒有聲應之、奏他調則不應、實之以爲異物、殊不知此乃常理、二十八調但有聲同者即應、若徧二十八調而不應、則是逸調聲也、云々、〔北窓瑣談〕に我友源子和が家に常に用る茶碗あり管を吹て雙調に至れば茶碗おのづから鳴る子和が父長昌此碗を雙調雙調と呼し

〔湖瑠雜記〕棋盤山條下に、一池石壁高廣、云是龍湫、遊其間者、小諾小應、疾語疾應、譁然叫笑、答響滿野、人或曳履而趨、中亦若有曳履者、躡其後也、孤坐其間者、每生疑悞、斯境亦佳、然以湖上可遊之地甚繁、履齒往々不及、〔笈埃隨筆〕十二勢州あふむ石の條、嘉栗智恩院古門前細川侯のやしきの邊より西に向ひて呼べばはばらくありて答ふ是ははじめのひき喰ちがひの壁にあたりてこなたの言はなたぬ内に答へそのひき繩手西側の家にあたりて答ゆるなり夫故まばらくの間あるゆゑにはつきりと聞ゆあふむが辻ともいはんか又南都東大寺のこだま塚も門一重越て本堂にひき故かくの如く同じ又江州八幡の人ありていひける、長命寺に入幡より行途中に山陰を通れば人の聲よくひきく處あり作事に通ふ路なれば農夫の通ふを憎み畑に垣ひて人を入しめず

八人藝 三絃曲びき 八撥 羯鼓 八からかね

八人藝
三絃曲ひ

三線の曲びきの江戸に鳥羽屋三右衛門といひし者三線にて種々の曲を盡す左の手に撥を持
 そへ太鼓をならし右の手に撞木を持をへふせがねをならし三絃の曲を彈三人してはやすが
 如く是を分ちて曲を盡せりと「歌舞妓事始」にいへりこれ今八人藝と云者のするわざなり八
 人藝の始り「一代女」貞享三年萬治年中駿河國阿部川の邊りより酒樂といへる座頭江戸にくた
 り屋敷がたの御慰に紙帳の内に入て鳴物八人の役をひとりして間を合せける云々「五雜俎」十
啓者善琵琶能作百般聲音世屏幃後作之初作老嫗喚彼者聲樂作伎者稱病不出往復數四評語勃發遂至御器
 破鉢大小紛紜或言或哭或助坐客驚駭欲散徐撤屏風則一啓者把一琵琶而已作無一物也又有以一人而歌曲
 擊鼓拍板鏡鏡合五六器者不但手能擊足亦能擊此亦絕世之伎惜乎但爲玩弄之具非知音者也また「虞初新志」
 にも八人藝のこゝあり其文長ければ記さず又蘭書の小冊繪草子の如きものを「書名あらず」見し事あり其内に放下師な
 じにや腹に鼓をかけ胸に笛あり頭上にも鳴器あり足のくびすの上にも小き鉦を付片足に撥を付たり歩行ながら打ならず
 まを盡けりいづこにも似たる事有り寛文中はやり物種々いひたる短歌に八人座頭のみせ物に仁王之介が大力と云こ
 事なるべし

「述異記三」楊州郭猫兒善口技とありて於席石設圍屏不置燈燭郭坐屏後主客靜聽この
 下八人藝の如き事を語る其中犬のさま々々哮る時の鳴聲鶏の聲猪の聲さま々々の物の聲な
 どをなす前句付廣原海一倍にな身すぎ憂や八人藝も手足四ツ「江戸名物鑑」に八人月こよひ將
 門にげよ藝座頭このわざ其後の聞えたる者なかりしが天明の末に川島歌命と云ものあり其
子歌遊寛政の頃より赤坂に川島歌遊といふもの巧手にて此伎をするものみな是を學ぶ文化
 の初にや此輩このわざの祖長崎聖理と云もの、百年忌を吊ひしことあり聖理が事いまだ外
 に所見なし

八撥

羯鼓

八人藝の座頭のみな川島流で歌流歌曉などいふ徒あまたあり文化の末のころ牛島の者にて
 桶を作りて業とせしものとか八人藝をよくして牛島登山と名のりてこれを興行せしかば彼
 盲人の方よりこれを尤めてさせまじき由をいへりしが登山のそのかみ花房夫山といへるも
 のより傳ふることを云て其儘に興行することなりぬ夫山啓者にいならず登山の一眼なり
 八撥「撮壤集」に八撥「打玉樂」とみえまた「尺素往來」八撥曲舞なごみゆ八の數の八ある
 にいならず彌ツの義にて必しも定りたる數にあらすすべ物のかさなることをいふ八撥の
 羯鼓をうつに兩頭を撃ゆゑに名づくるなり「杜氏通典」に羯鼓、正如漆桶、兩頭俱擊、以出羯
 中、故號羯鼓、亦謂之兩杖鼓、とあり兩杖の即八撥なり「唐書禮樂志」に帝又好羯鼓云々、帝常
 稱、羯鼓八音之領哀、諸樂不可方也、とみゆ帝の玄宗なり開元二十四年に胡部を堂上に升せ
 てこの戎羯の音をいみじくもてはやせり故に天寶の樂曲に涼州甘州伊州の名あるのみな邊
 地になすらへたるものにてそれらの胡舞ともに羯鼓を用ひし也八撥を打たびの數と心得る
 ものの非なり「安齋隨筆」に小笠原刑部大輔信綱の「乘馬方事」といふ書に手綱を長く取候て
 肘の後へまはるをば八ばちたつなど云てわろき事に申す云々八鉢を八からかねともいふも
 のもらひの童のすることなりと有り八鉢と文字にて書たるより安齋の説なるへし八からか
 ねを八鉢といふこと見及はず羯鼓を頸にかけ胸につけて撃とき肘後へ廻るべきなりされ
 ば是も八撥手綱と心得べし八撥の右の如く羯鼓の兩杖なるを後の大鼓うつにもいへるの曲
 打することなり木義に「鷹筑波集」八ばちをうちて踊れや十六夜また十六になる袖のやさし

さ八撥を二度までうてる子供達〔俳諧懷子十〕時しもはりずほろゝうつ聲つれの春日な
くさむ八ばちに致也〔古今夷曲集〕に入椀をうつをみて二笑橋ならぬ蜘蛛手の曲の八ばちや大鼓
うつゝに世をわたるかな

八からが

八からかね〔訓蒙圖彙〕に入打鐘これも歌念佛のたくひなりもどの念佛申て一心不亂に踊
けるをいつの頃にか只一筋に廻りはじめしより口に唱る念佛をも略し無二無三に巡るを手
からにするなりみるにくるしき世わたりなり其圖の若衆の鳧鐘に緒つけたるを多く首にか
け打鳴しつゝ巡るさまなり余か幼き頃の古版の道中雙六に〔此圖ありき前句付に早いこと
ひろがれば風車なりやからかね 〔芝居役者伎藝古實〕に市村羽左衛門九代め所作事の妙といひて此外ハッ
鉦の拍子事ありさいへり芝居にても學びつゝ其頃行はれしを知るべし〕

〔耳袋〕といふ物に寶曆頃迄存命のかぶき役者海老藏長十郎羽左衛門等或屋敷方へ呼れ其藝
を望みけるに羽左衛門家に四ッ竹八ッ拍子といへることあり三絃三挺にて羽左衛門麻上下
にて扇を二本持て藝をなしける面白きこと〔由勿論けやけきことにていなし仕舞をまひ候
やうなる趣にて其拍子のえもいはれずとなり彼八ッ鉦の拍子といへる是にや〕

寒聲

寒聲〔正保三年神谷季貞が〕江戸町名俳諧〔徳元判〕寒の中の手足にさるゝひゞや町出て聲つ
かふ橋本の町〔俳諧懷子〕寒けき月に聲つかふ人夜軍を引る勢の下知をして〔諸艶大鑑五〕厚
ひんの若き男松はやしのためにとて寒聲をつかふ〔好色つれ〕草年のくれ果て家毎に寒
びきするころぞまたなくあはれにひもじさうな聲にてさく人もなきすかゞきに手もこゝへ
云々古き〔前句集〕立にけるかな〔寒聲や橋のつまかき二十九夜〕六玉川〔初篇〕金にする聲

いあはれな寒の内又入もせぬ聲もよくなる寒念佛

説經 淨るり 祭文 門説經 門談議

説經

説經の說法におなじもと佛事を供養するに法師を招て聽聞するものなり〔宇治拾遺物語〕に
山の大眾日吉の二宮にて法華經を供養しける導師に仲胤僧都をまやうしたりけり〔説法えも
いはずしてはてかたに地主權現の申せとさふらふいとて此經難持若暫時者我即歡喜諸佛
亦然と云文をうちあげて誦して諸佛といふ處を地主權現の申せと我即歡喜諸神亦然とい
ひたりければをこら集りたる大眾異口同音にあめきてあふきひらきつかひたりけり此問にあ
まれをして講師に其云々仲胤説法をとりて此ごろの説經師のすれハ犬の糞説經といふなりとい
ひけるとあり猶此書にもまた他書にも説經師のことハ往々見えたり枕草子二心ゆく物説
經師ハかほよきいとまもらへたることを其説こと〔の貴さも覺ゆれハ今昔物語廿八〕教圓座主物
可笑く云て人咲はする説經教化をなし云々説教師とて一業たつる者の初ハ詳ならず〔徒然
草〕に或者子を法師になして學問して因果の理をもまゝ説經などして世わたるたつきとも
せよといひければをしへのまゝに説經師にならんために先馬に乗ならひけり輿車もたぬ身
の導師に請せられむ時馬なぞむかへにおこせたらんにもゝありにて落なんの心うかるべし
といへる事を載たりこれらハ専ら説經を業とするものなり諸抄共に注釋なきハいかにぞや
是もどうたひものにあらざうたひものとなりぬるに和讃より起れり〔志保之理〕に諸の講式
より和讃の起りて後世極樂院の鉢扣が和讃變じて説經といふうたひものに落丹波金やき地

淨るり

藏善光寺かるやき堂の故事本縁な俗傳を作り淨るりとなりし此間には通事といひて矢作寺樂師の本縁を作りし以來戦場のさま佛神の靈をさまく年を追て作りし近世の如きひたすらたはれてよしなし事を作りて昔のすがたなく中ごろの體に異なり況や佛法の跡なくなりしといへりされども此説淨るり牛若の事の作者をば普通の説の如く心得たるの誤なり此事後にいふべし其餘のさもあるべし今も何くれの本地といふかな書本のあるのみな説經師のかたりし物なるへしよりて思ふに淨るりのもと藥師佛の本地をかたり後に牛若の事作り出たる物ならむ説經より淨るり起りたる事の疑なし橋窓自語にも上るりと云もの説經より出しものなるべしと云り余思ふにさはかりにも非ず平家をも取しものなり後の説經のまた上るりをとれるか

鉢扣の歌

鉢扣の歌の空也の教へたる法語となむ諸法實相と聞ときい岑のあらしも法の聲萬法一如とくわんずれのはまの蝶蟻も佛なり佛の三世にましませどかゝるひぐわんいたのみなしひぐわんきやうあゆの釋迦だにもねはんの雲にかくれますましてや凡夫の愚にていかで無常をのかるへき無常眼の前にて火宅を出よとすいむれど名利の心つよければ聞て驚く人もなし人の男女にかはれとも赤白二ツに分られて生するときもたゞひとり死するやみちに友もなし東岱前後の夕煙北嶺朝暮の草の露れくれ先立世のならひ只何事も夢ぞかしのなふれの佛も我もなかりけり南むわみだ佛なむわみだぶつくらや上人の御法事

鉢扣さゝら摺り別に條あり見合すべし説經者も又さゝらをすりたり和訓栞に説經の藝苑供奉志にみゆ西庭按るに古杭歩遊録に説話に四家あり其内に説もと法師の中に妻を帶たる説經師と云ものありて佛法の貴き事どもを詞につゞり世の無常なる昔物語をのべてふしをつけう

たひし元祿頃の事なりとぞ安居院の澄憲三井の定圓などを祖とすといへるのいたく誤れり始め説經師さて定りしものなかりしに一業と立るもの出來たる後和讀の如きうたひものさなりさゝらに合せたりそのはて淨るり變り以上三變なり「醒睡笑」に途中にてひとりの姥やすらひものあはれさうに泣きたり行逢ふたるもの何事のかなしみありてそちの涙にむせぶぞやとどひければさればとよわれへ行男をみればかちんのかみもをつけ傘をうちかたげてふどころにこゝらのやうなるもの見えたるの疑ひもなき説教ときなりあの人のむねの内にかはをわはれにまゆせうなる事のあらふずよと思ひやられて袂をさばるとかちんのなる敷つけたるを着て上帯きたるなど古昔にみえたれどもかちんの上下着たるはめつらし又説經さきさきいへりみな長柄の傘をさし人の聚る路傍に立て居るなり

俳諧に「守武千句」さゝらをや若紫のすりころも袖うちさはれとくひさやうきやう犬子集聞せつ經のさゝら上手や貞徳自然居士出舟を早く追かけて「半井ト養千句」からかさをもたで立よる木の下に説經ときも花やみるらん鷹筑波集傘を物さきにしも拵へて赤をばしきつとくひ説經「正章千句」秋風のさゝら何と摺ぬらん門立して物をふもあり「季吟獨吟」せつきやうを聞ばかならず涙落棧敷の上であくびをぞする五元集竹のせみさゝらにさばる時もありさゝらするにさばるといふ手あるか但し聲をさばるといふにや「枕雙紙」すまじき物の條けん者の物のけてうすさて云々せみ聲にさばり出しよみぬたれと云々此文よりこの句は作

「春臺獨語」に説經といふものゝもと法師の内に説經といふ者有て法師の説法に因縁物語す

る類なりその物語の偽説にまかせたしかならぬも多けれども詞のむかしのことばにていやしき俗語を交へたる中にやさしき事もすくなからず其上幸若の舞の詞の如くむかしより定れる數ありていつも古き事のみをかたりて今世の新らしき事を作り出さず其聲も唯かなしき聲のみなれば婦女是を聞いていそゝろに涙を流し泣ばかりにて淨るりの如き聲にはわらずさみせん有てよりこのかたのさみせんを合する故に鉦鼓を打たるよりも少しうきたつやうなれ共甚しき淫聲にあらすいひあはれに傷るといふ聲なり淨るりにくらべてすこし勝れるかたならん（口宣受領）是ハ官府のひの寫しをみしに説經者由緒關清水大明神蟬丸宮別當寺山城國愛宕郡日暮小大夫唯重右以唯重依願繼目所補大夫號仍如件正徳二壬辰九月廿八日説教日暮小大夫唯重、正滿講師、淨密講師、淨榮講師また同ころ（四條河原淨瑠璃名代改帳）に説教日暮小大夫右小大夫と申名代古來より蒙御免所持仕候處三拾六年已前親より譲り受相續罷在候とありこれ後のものなから小大夫古き名代とあらる〔京雀六〕日暮小大夫がやぐらに抱き栢の紋を付たり又日暮八大夫といふ名代ありこれもかの〔名代改帳〕に同じ文言にゑるせり〔口宣受領〕にも日暮八大夫名跡本久とみえたり〔歌舞妓事始〕に説經讚語名代とありて日暮八大夫右八大夫名代前々より免許云々日暮小大夫今なし又云慶長のころより説經語與七郎七太夫といふものありて後名代御免にて興行すといへり大坂七郎太夫といふがあるハ興七郎七太夫未カ後に見たりもと歌念佛を日暮と稱す西鶴が〔二代男三〕西の宮のゑびすまはし日ぐらしの歌念佛といへり又日暮といふよしの〔永代藏〕にむかし伏見の御上代の時諸大名の御成門軒をならべて輝

歌念佛

き金銀珠玉を鏤め云々この清らなること言葉にも迷がたし彼京の鉦たゝき孟蘭盆の頃勸進にまはりしが朝日かけ御門にうつろひしに是に氣をとられて詠めけるに實に秋の日のならひにてはや暮て驚き願以此功德空袋かたげて都にかへるをみて人申ならはして日暮坊と其末々今に名高しとあるいいかゝあらん恐らくハ彼日暮の門日ぐらしの歌念佛ハ事ごなるをかくいへて米一升さいへる是鉦たゝきハ西鶴が滑稽なるべし今も童謡に鴉ハ熊野のかれたき一日扣い弟子林故林達等を擬べり

歌念佛〔釋氏要覽上〕昔陳思王曹子建遊魚山、忽聞空中梵天音、清響哀婉、其音動心、獨聞良久、乃摸其節、爲梵唄、撰文製音、傳爲後式、梵音茲爲始也、この全文ハ〔法苑珠林四十九〕に出づ〔笈埃隨筆九〕洛北大原の來迎院を魚山と號すると唐土天台山の支山に大原魚山と稱する地あり陳思王此山に在て瀧水自ら律呂を調し水音に曲譜を舍るを沈思し始めて梵唄聲明を創造す慈覺大師入唐傳來し山門に傳へ給ふ良惠上人これを中興し常寺を開基の後今に嗣て大原の聲明の本山たり故に地名も大原と云といへり但し慈覺大師の傳へし引聲あみだ經なり引聲阿彌陀經跋に云、引聲阿彌陀經者、在昔慈覺大師於五臺山傳此曲節、云々ありこれを傳てより今の聲明の始めり其流種々分るること〔魚山蘆芥集〕に見ゆ此こと諸書を引て友人山崎ゑるせる物あり〔徒然草〕六時禮讚の法然上人の弟子安樂といひける僧經文をあつめて作つとめにまけり其後大秦善觀房と云僧ふしはかせを定て聲明になせり一念の念佛の最初なり後嵯峨院の御代より生まれり〔圓光大師傳〕四十八人の弟子に法性寺の空あみだ佛

保之理に奥州岩城山権現の津輕弘前の南にあり社領四百石供僧百澤寺祭神安壽女ヒメなり厨子王が婦安壽の白河院の永保二年正月十六日丹後山良庄にて殞命厨子王後に婦の靈を祭る元祿年中重修とみえたり恐らく此山の祭神と安壽女とする俗傳なるべしおもふに安壽女が事古き作り物語にや其名三庄山莊にて下屋まきなり安壽ハ延(ア)壽にて禪家に行堂といふか〔撮襲集〕に禪院部延壽堂又居所にもいへりありて是をあんじゆと訓り厨子ハもこより戸棚にて又居所にもいへり

其蹟が〔咲分五人媳〕享保廿一年序文往昔日暮小大夫が水調子の三味線に乗せ歌念佛の林聲が鉦に合せて語りたる五説經の中の其一ツ聽人涙に咽ひたる山椒大夫が安壽對王の兄弟に邪見にありたりし物語を近き比浪花にて當風に改め節をこめて竹本が淨るりに語り趣向を元にして云々

かるかや

祭文

歌祭文

江戸祭文

門説經

仙臺淨る

かるかやの〔謠曲外百番〕の内に菊萱ありまたおなじ中に千手寺といふの安壽がことを作れるなるべし今これらの事を門戸に立てかたるもの來る是を祭文と呼ふ按るに〔松の葉〕にさいもんあり是歌祭文なり〔訓蒙圖彙〕に祭文の山伏の所作祭文といふを聞けり神道か佛道か其本據さだかならず伊勢兩宮に四十末社百廿末社などいふ事更になきことをそれさへあるを江戸祭文といふの白こゑにして力身を第一として歌淨るりのせすといふ事なしかゝる事を錫杖にのするのさてもかなし又この草子に圖したる門説經のさゝら胡琴三絃を三人にて彈ありく體なり其注に小弓引伊勢會山より出この所ふし一風あり物もらひに種なしといへども小弓引さゝら摺りわきて下品の一屬なりなぞいへるの何の分別にか

仙臺淨るり奥淨るりと云ふ江戸馬喰町繪草子屋西村屋與八郎が許に〔あみだの胸割〕〔さき

かね會我〔熊谷〕の類の古淨るり六十種元祿寶永のころ再刻きたるすり版傳りたり今に至るまで毎春本にたてて奥州へ下す故仙臺淨るりと稱へ又ハ正本と云ふ彼地にハ今もこれらの淨るりを語る者あり三線のなく扇にて拍子をとるのみなりとぞ寛文年間〔八俳枕〕と云ふ集に調和奥淨るり緒絶の橋や古扇また元祿三年刻嵐雪が〔其袋〕に鋤みちのくの三絃きけば扇かなかれば昔より三味線のなかりしなり〔あみだの胸割〕に天滿八太夫の名ある本あり是説經淨るりの太夫にて〔江戸名所記〕寛文二年の刻堺町の書に大さつまが芝居に並びたり奥州にハ此の天滿節の傳りしなるべしといへるハ非なり或説經かたり奥州に行てまばらくこれを興行して有しもの語を聞しに彼所にハ常盤津ぶし長唄なぞハ皆あれども説經かたりなし其所にて音曲なぞして人を集むるにハまづ座頭首領黒澤けんげうとやらん云もの許に至り門人の分になりて興行することなり此者もまかせしに其時座頭も多く居たるが其中の一人淨るりを何やら少し許かたり聞せしが聞にもたへぬものにて其處にハこれをお國上ると云ふ是即仙臺上るりなり三線に合せかたる又云ふ奥より南部の方に祭文を多くかたると其正本を仙臺にて翻刻して下すと云へり昔上るりすべて扇拍子をとること説經にかぎらず西村屋が六十種の正本と云ハ説經のみに非ず土佐上るりなり説經ハ番數多からぬものなり祭文にハさまゝあり重太夫と云ふものあまた正本を刻せり版元清水屋と云ふ故これをまみつ本と呼ふ

説經世にすたれて久しくなりしも山伏の祭文かたりこれを傳てありしが寛政中小松大けう

みのわ大けうとて二人の山伏同名にてよくこれをかたれり故にその出處住所を冠らせ呼で分てりそれらに次て俗人にて語るもの江戸の端々にひとりふたりすべて五六輩にすぎずもどよりなぐさみにして職業にあらざれ故師弟と云こともなく只兄弟ふんなど云がことしなりものハ錫杖とさゝやかなるほら介にて合するなりこれを弄ぶもの無頼の風俗にて大廣袖はそ帯新しき手拭をみえとなす只江戸のはし／＼に行はれし故近在田舎に庚申十夜などいまねがるれば江戸中五六人のものども伴ひ合せて行てかたることにてありし其頃本所四ツ目に米屋にて何と云ひしか米千と呼ぶものこれをこのみかたりしが隣家盲人のあんなどりこれ語るをきゝて三絃に合すへしと工夫してこれを合てかたるそのころいまだ人集する家後によせと呼處なかりし故水茶屋の二階などかりてかたりける初めの他の者ども此ころ米千が三線に合せてかたると云をろがましきことなり逢なばなぶりてくれんなどをしり合へりしがそれらも中へのめづらしく思ひて其ふし學ぶ者もやう／＼出来たり錫杖にて語りしゆくり數多く定まらざりしを三線にてい定まりきまりよくなれり盲人ハ京屋五鶴と名のり米千ハ若太夫となりぬ又久米といへる座頭京屋が弟子となりよくひきたり若太夫門人あまた出来ぬ島太夫千賀太夫音羽太夫榮喜太夫染太夫等なり島太夫ハ松島町に住で堺町芝居へ立入者なりしかば若太夫をすゝめ薩摩座の名題を以て説經芝居を興行せしハ享和のころのことなりき若太夫ハ文化八年没す今の若大夫ハ千賀大夫なり是に依て今にさつま某太夫といふもをかし

門だんき

又門だんきあり〔訓蒙圖彙〕に法師の柄長き傘をひらきてかたげたるなり注に片言まじりの法文一から十不淨の説法也うけがたき法師の身となり法によつて地獄に落るゝさてもあさましき境界かな右にいへる門説經そのかみミ〔本朝文鑑〕仲喜涼賦に辻談義あり放下師あり歌祭文にハ女中をなかしむ云々寛永五年版本〔伽羅女〕に京うた祭文あり其圖一人三絃ひき一人錫杖ふりて唄ふさまをかきたり世の風説はやりことなどを作りて唄ふことゝ見えて〔入子枕〕おそめ久松情死の條其頃萩野八重桐が初狂言に仕くみ世にあはれを追善の歌祭文に年ハ二八のはそ眉ときくも思ひの種油云々また〔娘容儀〕に瓦橋とや油やのひとり娘のおそめとて云々開帳ばの歌さいもん〔松落葉〕加賀掾上るり〔四條川原涼入景〕神ハうけずや色祭文拂ひきよめ奉る色のさかりハあづまなる八百屋のむすめお七こそ戀ぢのやみのくらがりによしなき事をさ出して云々これらを合してみれば説經また／＼三くさに分れたり〔八百屋お七戀の白玉〕といふ歌祭文正本結城重太夫直傳ヲキ結城伊豫大夫三絃柏木八百市柏木儀泉末に元祖結城石見掾藤原一角結城重太夫直傳印章保高天明四年甲辰初春校合作者松山堂計石正本所江戸本芝三丁目清水治兵衛とあり桐の紋をつけたり

色祭文

淨瑠璃 (薩摩) 淡路 女太夫 左内宮内 喜太夫 虎屋 土佐外記 半太夫 河東
 角太夫 (一中文彌) 宮古路常磐津 新内 宮園 嘉太夫 義太夫 豊竹 肥前
 あやつり 小平太 飛驒 おやま のろま 出づかひ 辰松 淨るり作者
 淨瑠璃ハ平家をとり説經を學びて作れるものとみゆ世に傳ていふ信長公の侍女小野お通と

淨瑠璃

いへるもの、作りたる十二段の物語に始れり「華のすまひ」に小野おつう母小室町松本町に住せし人なりゆく後におつうと手元にて孝養をたしめて迎ひの人の登しおつうが女、眞田河内守と云る人の妾となりて信州松代へたりを通り「姥捨の山」にいらし名を聞て車と返す人もこそあれさよめりこのころの始末詳に記せしもの松代の長國寺にあり河内守と云る、眞田伊豆守の實弟にて七千石をさして彼十二段の作者のお通ならんに時代かな分ちて部屋すみのよしなり此おつうなるべしさて彼十二段の作者のお通ならんに時代かなはずその物語の内「枕もんだう」の處つるなき号にはわけ鳥さしたつもた、れすぬるもぬられぬこの仰かやとある、宗は「大筑波集」にあるもぬられすたつもた、れすぬるもぬられぬこの仰かやとある、宗疑はしき「武守千句」にいと、だに座頭まがひの杖つき乃淨るりかたれともし火のもと今宵はや時いらし若ふけはて、天文九年にかくつらねたり又「宗長日記」享祿四年九月十三夜月見の條旅宿にて小座頭あるに上るりをうたひせて酒もりする事あり又猿樂狂言「昆布賣」に上るりふしに賣れといふこともみえたりされば其始普通の説いたく誤れりまたその物語の内枕もんだうの處云々羽ぬけ鳥の謎の連歌のかたもととなるべし其故「犬筑波」のすべて古きも新しきもかき集めたる物なればいと古きも有と知べし此物語樂師の十二神によりて十二段とするにあらざらず平家物語十二卷に倣へるものなり淨るりを語ることを専ら行われし「了意が説を正しとせむか」東海道名所記に淨瑠璃のその頃京の次郎兵衛とかやその頃、永の間、文祿より寛「江戸惣鹿子」に今の薩摩三郎兵衛四代先の外記といひし者琵琶法師瀧野檢校より是を習ひて西のみやのくわいらしをかたらひて人形に能をさせて一日に五番づゝあけるに淨雲といひしもの外記が座に入一段づゝあひの狂言のことくにかたりければ聞人かへつて能より面白くおもへり自ら能の人よせになりて淨るりをほんとせり外記がなかれ今の土佐なり淨雲が末の伊勢大掾なりとかやとありて其末當時座のなき太夫の内りうかん町江

薩摩

淡路

左内

宮内

戸次郎右衛門と有いせの大掾淨雲外記、座に入、此説誤なるべし「雍州府志」に及慶長、監物某并次郎兵衛某、招攝州西之宮傀儡師相共經營之云々、河内介是淨瑠璃太夫受領之始也、次郎兵衛後稱上總介、自茲左内宮内相續盛行とあり河内介といへる、誰なる歟不分明なる書さま也もし河内左内か事なるか按るに「口宣案」に慶長十八年正月十五日藤原吉次宣任河内目とある是にや「世事談」に正保の頃さつ太夫次郎右衛門といふ江戸上るりの祖なり法體して淨雲といふ其子を又薩摩太夫次郎右衛門と次郎兵衛後に次郎右衛門と改名したる、又二代めの名にまひしものいふ者後に淡路之丞と受領せし西宮の夷子かきをかたらひ貞徳が狂歌に「住吉や霧にまじはる淡路とてたてる小舞のおもしろき哉さあるは淡路之丞の事」にや「四條河原歌舞妓名代改帳」に淨るり薩摩延寶六年十一月廿八日口宣頂戴源之丞所持仕候右さつまと申名代其太夫と申者へ譲り申度旨正徳二長年七月十一日攝津守棟へ奉願候處同廿八日駿河守棟御番所にて願之通御赦免被成候「口宣案」に橋常信宣任薩摩掾延寶六年十一月云々あり今も淡路に源之丞と云ふ人形座元あるはさつま、四條河原にして鎌田政清か事をかたらひて人形を源之丞とハ殊なるかいつれも淡路之丞が後なるべし

やつり舞にかまだ有り彼十二段も人聞ふりたれば舞の文に節を付て淨るりにたり故に貞徳が狂歌に淡路が小舞といへりその後からの嬉あみたのむねわりなどいふことをかたりける次に河内左内といふ者たり女にもなむるも左門よししたかなどして淨るりをかたりけるを歌舞妓と一同に女といふめられぬ「古郷歸江戸土産」に六字南無右衛門といへるからすきて舞にまふやしま高だち替我なきを被ふしにたりける故淨るりに八島高だちと申るさいひておのづから其名になりたり夫より左内宮内などいふ太夫打つといて四條かはらにて語りける故にかばらふしきて座頭よりいやしにほたらかすハ宮内左内よりほしまるさいへり

いろくめつらしき操をいたしけるほどなく宮内、死けり左内もなくなり今其子とも打つゝきて操をいたしめんく受領してかたり續き宮内ハ伊勢島といふ正徳三年「四條河原芝居名代改帳」に上るり伊勢島佐太夫古來より伊勢島宮内と申淨るり

喜太夫

虎

女太夫

名代蒙御免所持仕居申候今江宗壽申者より佐太夫讓受申度旨奉願元祿八亥年十一月十一日御赦免被成只今伊勢島佐太夫と申候○近き頃といへるハ承應明曆のころといふなるへし「竹豊故事」にハ宮内ハ虎や源太夫ハ弟子なり又云京都に昔上るりはやらす寛文中に江戸より虎や源太夫上京有てより淨るり繁昌し定芝居も出来たりといへり宮内ハ喜太夫の條にいふと併見へし「外題年鑑」に伊勢島宮内淨るりも江戸の大薩摩など、同前に五段綴の外題を聞すといへるハ「大薩摩六段物正本を見しに和田酒盛天下」一さつ太夫二條通正本屋九兵衛版寛文四年正月と有○慶安二年丑三月晦日踊子役者の類何方より呼るいさもあんだにのせ申間敷手形の内堺町上るりさつ同七郎左衛門同外記同源太夫同五郎右衛門同茂兵衛とあり中に喜太夫といふもの上總掾になり太平記をかたる「同書」に又云木挽町のつたへ行たればこれ江戸のこさといふさつ「古郷歸江戸土産」にてハそのかみ芝居町にて座とほりりたる其後中橋へ移りぬ其頃ハさつ小さつ四郎與吉七郎左衛門とてつたる中ころ虎や源太夫油屋茂兵衛島屋次郎吉南北喜太夫杯といふ太夫有といへり喜太夫ハこの南北喜太夫なる歟「四條河原芝居改帳」に淨るり虎や喜太夫明曆四年七月十三日口宣預職仕虎や上總掾と申候上總病死仕悴五郎兵衛名代相續之儀奉願寶永六年七月廿九日虎や喜太夫と名代御赦免被成候また「口宣案」に明曆四年七月十三日口宣藤原正信宣任上總目と見え寛文五年版「京雀」(六)天下上總藤原正信とありてやくらの帯に虎の紋付たり「雅州府志」に治郎兵衛後に上總介と稱すといへるハ恐らくハこれをまかへるにや又おもふに伊勢島また此喜太夫ハ竹本なごの淨るりの出その曲節平家とも舞とも謠ともまねぬ島物なりといへり「已上東海道たる根元なるべし下にみえたりその曲節平家とも舞とも謠ともまねぬ島物なりといへり」唐繪の風のかりたる島繪と稱する類なり

慶長年間の古屏風四條河原の繪に女太夫の上るり芝居有り三絃彈も女にて太夫扇を持って出がたりなり人形つかふ處より一段高し人形の上るり語の目の下にあり人形の戦場の体にて城廓矢倉等の作り物あり人形の足又人形つかひの首手など見えず芝居の表やぐら下の札黒ぬり縁朱ぬりにて金かなもの中の文字金粉にてぎやうるり内記と記す内記といふ淨るり女太夫の名ものに見えずなむゑもん左内よしとか杯が内なるべし外記に對へたる名と聞ゆ幕の紋ハ丸内に三枚笹と又一ツ花おもだかなり

其角ハ「焦尾琴」に予童謠歌舞のいにしへを思ふに明曆年中の雙紙に登り八島下り八島とい

はやりかなることゝも十二段に分たるあり六字南無右衛門正本と奥書し侍ることを數寄ものゝ名にふれたる雅なるべけれどいへるをみれば淨るり版本ハ皆明曆已後出来しにやと思ひしに柳亭子に近ぶる京師に行たる人のもて販りて贈りたる由にて小大の淨るり本あり山城國住人六字南無右衛門正本寛永十六年正月吉日八島道行一段目と端に志るして一冊に四段あり三冊にて十二段なりわくの内立五寸貳分横三寸七分文字十四行にて間々に半丁づゝ繪あり末に二條通御幸町西へ入町上るりや喜右衛門開之とありこれつるや喜右衛門なり此家あるによりて此處をつるや町と云となむ「焦尾琴」にいへる上り八島下り八島即これなり寛永より版行あるを明曆を古しと思へるハ寛文頃にはや古版稀なりしにや其角ハ寛文中生れたり

土佐淨るり六段物版行ハ大江山酒呑童子、風流和田酒盛、名古屋山三郎鹽屋文正、現在松風、大職冠二度玉取、新撰紅葉狩、楠湊川、色小町、光源氏袖鑑、津の國難波物語、源氏十二段、當世薄雪、融大臣、頼朝遊覽摘、新道成寺、定家、土佐日記、一の谷八島、和國女眉間尺、中將姫、三世二河白道、大塔宮熊野落、小野道風、遊女源氏全盛競、蟬丸、周防内侍美人櫻、源氏花鳥大全、京四條於國歌舞妓殿飾、なには鑑、萬歲頼政、博多露左衛門、寛濶洛陽壽、蓬萊源氏、源氏六條通、同續、源氏柏木右衛門、古今集、泰平篋三世往來、以上三十七番なりこれら正本往々あり寶永五戊子初秋土佐少掾禰正勝印小傳馬町三丁目木下甚右衛門刊とあるもあり右土佐名乘延寶天和のころも同外記ハ薩摩外記藤原直勝又薩摩掾外記藤原直政と志るしたるもあ

土佐外記 薩摩外記

りこ浄る

り東山三幅對と云ふ六段にもあり古淨るりみな十六段なり正徳頃の前句付に「早いことかなく一段につまるこよみの十二段六段淨るり一段を上下として十二だんなり後さつま座菴屋町にありて又堺町へうつれること見ゆ正徳五年五月廿一日上るり座外記太夫儀今迄菴屋町にて相勤申候處此度堺町庄次郎地面へ所替仕度旨奉願候處願之通今日被仰付普請出來次第御見分可被下旨被仰渡候依之外記名代藤八申來る

こすいでんと云の熊野の本地ですいでんと云ものなり何くれの本地と云ふ草子多くありおもふにこれそのかみの説經に用ひたるものなるを淨るりにもかたりしなり二河白道など同類なり

【色音論】寛永にさつまとらや喜太夫がわやつり土佐か能と見えたり此さつまの次郎右衛門なり又さつま外記の京師の人次郎兵衛にて其子孫江戸に下りさつま三郎兵衛といふ是を小さ

つまとも下りさつまともいひしにや故に次郎右衛門が方を大さつまと呼り三郎兵衛が座の後までもありしに次郎右衛門が方の早く休座たりと見えて延寶ころ其芝居なし江戸鹿子堺町に座元さつま三郎兵衛太夫土佐少掾小太夫庄太夫吹屋町に和泉太夫脇長太夫虎屋源太夫また無座の太夫、吳服町虎屋永閑人形町近江語齋本大坂町肥前太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乘物町對馬五郎右衛門さあり江戸圖鑑（元禄二年）堺町土佐少掾正勝南側あり小太夫庄太夫堺町北側丹波掾和泉太夫脇長太夫源太夫座元さつま三郎兵衛太夫虎屋永閑脇小源太夫また無座の太夫人形町近江語齋本大坂町肥前太夫橋町さつま小太夫宮澤町式部太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乘物町對馬五郎右衛門あり延寶九年堺町の古圖に北側中村芝居の西隣土佐掾虎之助あり同南側に和泉太夫とさつま小太夫并びてあり土佐の虎之助さへも幕の紋の龍を付たりと見えて蝶々子さつま虎屋のさつま三郎兵衛座をいふか永閑の虎屋源太夫が弟子なりとぞ世事談に淨雲が弟子丹後太夫長

こすいで

小さつま
大さつま

語齋

門太夫丹波太夫源太夫の四人あり是を其頃淨雲が四天王といふといへり丹後太夫の名を何といひしか洞房語園に慶安の頃江戸町二丁めに傾城屋甚之丞といふ三絃の上手あり京町二丁めに勘兵衛といふもの有り其頃流行の丹後が淨るりを聞たり語りしか甚之丞すゝめていふ丹後がさるまひせん口惜きことなり一流をかたりかへ然るべし此前四郎與吉が語りし淨るりの風面白かりしとて語りさかせ指南をければ勘兵衛彼丹後と四郎與吉が風を合せて一流かたり出し後に近江太夫語齋と名をあげたりといへり此勘兵衛を印本洞房語園に岡島吉左衛門三線甚之丞を師とし淨るり一流かたり出し明曆中に受領して近江大掾といひ後剃髮して語齋といふとあり長門太夫が弟子に肥前太夫あり丹波太夫の和泉太夫が事なり強勇の男にて關東俠客傳に見えたり櫻井丹波和泉平正信それが子を長太夫といへり丹波の二尺許の鉄棒にて拍子をとる元祖市川團十郎が荒ぶとの此太夫が節付き方を學べるなり俳諧世々かひこ親丹波毎日岩を打碎くといふ付合ありさからば長夫太も後に親の名をつぎて丹波といひしなるべし肥前太夫の伊之助といへり

延寶八年庚申四月十日酒井雅樂頭於二御九御茶被上爲御馳走堺町みせ物上覽上るり酒呑童子操太夫土佐少掾初段すまふ貳段春の茶湯三段さのた女四段有馬奴次郎三郎五段めてんく包丁次郎三郎白銀五十枚吳服一重一種一荷土佐太夫白銀三十枚一種一荷次郎三郎昔々物語に昔の堺町の操さつま太夫筑後丹後近江肥前永閑操の上るりの酒呑童子或贊花車等云々

題して「都羽二重拍子屬」といへり但し段もの一中の上るりの外に楊弓の名手にて一表二百のこらざる中あたるとかやされば一中といふ名のもと楊弓のかたに付たる名なるべし「竹豊故事」に一中の元來本願寺派の僧なり山本土佐掾松本治太夫等の流を和らげ一流かたり出せり亂髮にて十徳を着白き長袴をはきて出がたりたりとむ其子都和泉掾一中と號す

岡本文彌

岡本文彌常盤津師範の系圖に伊藤出羽掾あり是また角太夫が弟子なり「外題年鑑」に岡本文彌

同阿波太夫松本治太夫一中等がいづれも先師土佐掾又の井上氏の淨るりを多くかたられし

故新作多からずこれをみれば一中ぶし上るりなり云々また阿波太夫の難波にあり後岡本鳴戸太夫

是なり是文彌の弟子なるべし

阿波太夫

阿波太夫の愁ふしの上手なり享保二年の草子「娘容儀」に出羽まばゐのあは太夫がうれひぶ

しに打こみ四十八願記の三段目を覺てひとりなぐさみて語て涙をこぼす云々

宮古路

宮古路國太夫「竹豊故事」に後豊後太夫の一中の弟子にて初め半中と云たり後に國太夫又豊

後と號せり他流とちがひ五段物時代事などの語らず世話ことを専らかたる門人可内辨中等

名をあらはす「江戸節根元集」に云京都に宮古路國太夫節芝居にて所作によくあひし節にて

今に廢らず其弟子に文吾といへるものあり元文中東都へ下り宮古路豊後太夫と名乗り三

線相方の鳥羽屋三右衛門が弟子佐々木市藏三線手附の三右衛門なり國太夫節三絃の手は甚

せはしく東都にむかず故に子供にも能彈るゝやうに手を付る其後加賀太夫數馬太夫杯とて

門弟有てわき語りに至る迄はやりしなり「常盤津師範系圖」に都半中事宮古路豊後掾さみゆ初め一中も門弟なりし歟「春臺獨語」に云ふ享

竹本

保の初に又難波より竹本といふ淨るり師來りて廣む江戸の人は是を好みあへりしに其後又宮

古路といふ淨るり師難波より來りてかなしき聲に淺ましく賤きことを語り出す江戸の人亦

これに移りてめではやすことかぎりなし「江戸節根元集」に宮古路淨るりはやる故所々にて

色こと心中欠落もの等多く有ゆゑ豊後節御停止御觸被出相止けり其年中國米の兩に八斗

貳升にて殊外世中も詰り困窮の者多かりしと其時落首に「豊後米八斗貳升とふれられて蕪

をかぶるか宮こぢきめら老人云傳へり夫故豊後ふしも久々打絶しが後に京都寺町位牌屋文

右衛門といふもの義太夫節もよく覺え語りしが東に下り名を舉むと思へど名人ども多く下

り中々渡世なりがたく困り居けるが工風して佐々木市藏を相手とし豊後ふしを中興す古今

の名人とて又はやり出し脇志津摩太夫酒造太夫其頃の常盤橋邊に住居ける故常盤津文字太

夫と名乗しなり此ふし芝居にて道行ごと其外ないかいなの節所作によく合し故今に繁昌す

今の豊後ふしかたりの勝手次第の苗字をつけ富本豊名賀吾妻元來のみな宮古路なりし是を

名乗がたきの御觸を恐れ且のみやこぢきめらを恥しならむとみえたり「教訓下手談義」に宮

古路の享保の始犬の病と連立て來て世人の骨髓に通る終に治し難き沉痾となりぬ此淨るり

を禁めざる家に不義放埒のさたなきいなし云々こゝに享保の初め江戸に來るとするもの

の誤なり「春臺獨語」によるに其時下りし竹本が淨るりなり「賤の小手卷」に豊後ふしの流

弊次第に姪風にうつり遊士俗人の風俗あらぬものになり文金風行はる時世雜の條又云豊後ふ

しも次第に高上になり文句の昔よりの風流にかざりて芝居の所作出かたりいつも常盤津

豊後節

常盤津文字太夫

宮本

嬉遊笑覽卷六上 音曲

新内

文字太夫とて男もよく聲もよく上手にて其狂言當りたり其頃素人藝者にて名を貫ひて女の文字江文字松などして女客などの馳走に雇れてありきたりといへり〔江戸名物鑑〕豊後節泣ぬ日とて波の立居の浮寐鳥奮馬文字太夫が弟子富本豊前太夫寛政九年の頃横死せし兼太夫吾妻國太夫といへりまた清元清水などの富本より出たり〔諸藝太平記〕元祿十四年の作なり四の巻に今常盤津にて老松といふ浄るりふし付したり是かゝふしなどによ

新内の江戸深川扇ばしの邊に住る御家人にて苗字の何とかいひけん名を新内といふ宮古路豊後掾が弟子となり加賀八太夫といふ寶曆の頃一流をかたり出し本姓敦賀を鶴賀と改め新内と名乗たり後受領して若狹掾となる狂歌を好みて濱邊黒人が門人にて大木戸の黒牛といふかたる處の浄るりみな自作なりと専ら近時の心中事を作れり其正本綱五郎花さき二重衣懸占猪之介若草仇比懸浮橋伊太八尾上歸咲名殘命毛時次郎浦里明鳥夢泡雪などの類あまたあり淺草中田甫幸龍寺に墓あり辭世の碑石にゐるしたり「生てゐる内何かと神佛ひじりもいかい世話てこざつた天明六丙午年三月廿二日鶴賀の二字も是より許し出すとぞ若狹が弟子若狹太夫あり又鶴賀加賀八太夫初新内其生年七十歳娘を鶴吉といふ近ころ新内が名の其家に預り弟子加賀吉新内となれり其次新内も加賀八弟子にて初加賀歳といへり

又岡本都太夫より岡本を名のるもの多し其外東洛左文富士松ぎんてうさいこれの初めおさな坊きみ八と云ふ按摩取なり又豊永歳太夫など各々さまざまの名のことの鶴吉といふ老婆家もとにて鶴賀名字をゆるさるる故なり後に新内と云へるの岡田新内なり岡田の元祖新内

岡本

鶴賀

宮園

義太夫浄るりの始

が寶苗字にや

宮園の宮古路園入にて國太夫が弟子なり其次園入中頃豊前といへり戀鳳軒と號す〔宮園新曲集〕の序になまなかき浄るり興さむる事あり故に新曲短篇を作りてかたるよしといへり儀太夫浄るりの始の萬治寛文の頃にや難波人井上市兵衛といふ者誰か弟子なる事を志らざおもふに虎屋喜太夫などより出たるにや遂に一流をかたり出し操芝居を取立受領して井上大和掾藤原要榮と名乗しが後に播磨掾と改む世に播磨風と稱す諸人これをまねんとするに其頃床本のかたく秘して弟子にも示さずやうく聞書して一行二行づゝ覺えて口まねをせりいまだ大坂に浄るり本屋なく使りに求の替り浄るり出れば前の浄るりを乞て京にて是を版行にするといへども細字に五段を書一段ごとに繪を入れ小兒の褌としてひろむ其後心齋橋筋寫本を商ふ井上彌兵衛と云もの播磨かゆかりの者にてかたり本の内〔道行四季神おるし〕などを乞請て寫本にして稽古人の助となしぬ播磨みだりに弟子をとらすと〔操年代記〕にいへり竹本豊竹等みな是より出貞享二年丑五月十九日京師にて死す法名夏月了音日弘長明寺に墓ありとぞ招牌に天下一播磨藤原要榮と記す幕の紋井げたに立花櫓の紋九に九枚笹なり延寶三年印本〔難波名所蘆分舟卷三〕に出づ其弟子石屋三右衛門井上市郎太夫とて芝居を續しはばやら磨き稱す後に剃髪して伴西と號す

〔操年代記〕に近松が新作上るりを義太夫かたりさかりし頃を云て其ころ歌舞伎芝居あたり多く殊に出羽にのさまくのからくりなどし見物諸方にわかると云へり〔竹豊故事〕に元

あやつり

小平太

操道具

あれど豊竹座の絶ず興行せしとぞ古來名人ども有といへども芝居主座元太夫と三ツを兼備せしに京都に宇治加賀椽大坂に豊竹越前掾江戸にこの肥前掾三人のみなりといへり世に古淨るり絶果て竹本豊竹二流繁昌す其他半太夫國太夫等の流ありといへども是等の唯座敷の一興また歌舞伎の所作道行の合方舞子の地にかたりて段物操芝居に用べからずあやつりの〔續日本紀〕に挑文師みえたり綾の紋を取ものなり〔新猿樂記〕に楸營をあやつりどよめり又〔撮壤集〕に操物物真似と出たり木偶の機關もその義なりこれを淨るりに合することの傀儡師に始れりといふ〔傀儡師のこゝろを委しく考へ〕〔羅山先生文集〕に傀儡を見るといふ文あり江戸第一假師小平太といへり〔東海道名所記〕に後に淡路之丞と受領を〔事跡合考〕に紀州浪人小平太後淨雲と云ふ此小平太西宮の傀儡師源之丞といふものに人形を舞さしむといへるの誤なり小平太の人形舞しにて淨るり語り淨雲といふ異なり又薩摩と稱せしこゝろのよしといふに島津家にまれしに木偶を作らせ又家紋付たる蓑を用ひしが事終りて後に是を小平太と興へられしより世に薩摩太夫と稱せしといへるもひがこゝろ見ゆ薩摩は彼を受領の名なるべし〔四條河原芝居改帳〕淨るり薩摩延寶六年十一月廿八日口宣頂戴仕〔口宣案〕福常信宜任薩摩掾とあり源之丞所持仕云々是淡路が後と思はる操道具も其かみの龜末なるにて〔雍州府志〕に其始繼張幕於兩楹之間舞人形於其上といへり〔竹豊故事〕に大方の黒幕と山簾とにて人形の衣裳餘泥のすり込摸様女人形紅の表に淺黄裏杯にて事足りぬ元來足付人形の會てなかりし〔竹本豊竹兩座となりて互に競ひて作者さまくのい皆足付となり出つかひの外ハ介錯足つかひ立つかり歌舞伎役者の所作に増りてみゆといへり〕趣向を工み出し道具立人形美麗と盡し詰人形の外〔人倫訓蒙圖彙〕元禄三年上木なり土佐掾が芝居の處あり人形いづれも足なく裾より手をさし込てつか

石井飛騨

ふ三絃ひき座頭にてゆかひ今のすゝみ臺床机のこどきを土間に居て其上にてかたる〔俳諧温故集〕人形の手にもなしたり魚頭巾ハ介我舌きかふ〔佐渡島日記〕に人形芝居にてハ大坂石井飛騨といへるもり付氣と付りや人形の手ハ人の手ぢや〔四條河原芝居名代改帳〕からくり淨るり山木飛騨云々〔口宣案〕元禄十三年十一月源清賢宜任飛騨掾云々

〔昔々物語〕昔ハ堺町のあやつりさつまつ太夫筑後丹後近江肥前永閑あやつりの淨るりの酒呑童子或贊花車等云々人形の拵やうも先大將の立ゑばし直衣をさせ郎等にハゑばし素袍をさせ女の主人にハ髪をすべらかしかつら帯かけて召仕まで髪をすべらかしかつら帯ひたひにかけ御臺所にハ十二一重の小袖をさせ男女共に規式正しくこしらへ淨るり初る前に先式三番を能の如く濟し其次に人寄とて和田酒もり一流前淨るりにしてすまし其跡にて其日の本上るりを始る云々近年のあやつりの大將も大廣袖だて小袖もやう至極のだてを盡し人形面体浮氣に拵へ相伴ふ郎等もみな廣袖の小袖大白衣のさげがみ女の人形の御臺所といふも皆妓形なげ島田のかみにて小袖も伊達を盡し淨るりの始より終まであるにもあらぬ好色を作り不届千萬なる仕組其上木に竹をつぎたるやふに時代ちがひ云々

〔新著聞集〕に泉州堺の眞言宗の僧辭世の歌「世中のまやのまやの衣つゝんてんく〜くる

でこのぼ
うこのぼ
うこのぼ

坊主に残る松風傀儡師をいへり
でこのぼういもどかうこのぼうとらへり〔埋草〕〔ト養千句〕石臼に何やら入てまはすらんだ
うこのぼういこまかなるべしといへる是なりだうこのぼうのことい別に考ありこと長けれ
ばこいにはす

〔操外題年代記〕に正徳六年「國性爺後日合戦」のとき大幕の上に小幕を引初む享保六年八月
「信州川中島合戦」に山すだれをほりぬきの本山に作る同十三年五月「篠原合戦」に初て正面
の床を横へ直す同十六年五月「國性爺二度め天満のひき組」より芝居の表に幟を立る同十
八年四月「車返合戦櫻」大森彦七人形指先の働を仕始む同十九年十月「蘆屋道満大内鑑」與勘
平人形腹のふくるゝやうに作る延享二年七月「夏祭浪花鑑」人形帷子衣裳を着ず右いつれも
竹本筑後芝居にてなり又豊竹越前芝居にて享保十五年八月「楠軍法實録」和田七人形眼の
はたらきを仕始む同十九年正月「北條時頼記」正面の床を横へ直す元文五年九月「武烈天皇
儀」佐手彦の人形眉毛動くを初む元文五年「花和讃新羅源氏」の切に操大躍いせ音頭茶屋掛
あん灯雀をどりの仕出し珍し右かしくの趣向の三月十八日十九日の事なり廿日に外題を出
し五六日の間に出来作者並木文助及役者中の働前代未聞といへり

おやま
人形

〔江戸圖鑑〕元禄二年操狂言太夫通油町おやま二郎三郎高砂町とんつう與惣兵衛と出たり〔世事
談〕に小山次郎三郎といふもの女の人形をよくつかふ遊女傾城の類をおやまといふにより
是をおやま人形といふといへり紛らはしき書やうなり思ふに上かたにて遊女をおやまとい

浄るり座
看板の圖

形のろま
人

そろま
むきま

ふによりてとなへしならむ〔竹豊故事〕におやま次郎三郎此道の達人なり京都にハ貞享元禄の頃おやま五
歌舞伎にて女がたにいふい後の事と見えてそのかみり女がた太夫くわしやがたにみゆれど
おやまの名なしおやま何の義にか小野頼風が妻女郎花になりたる古事ハ男山に名高けれハ艶色の義をとりてお
いふ歟又さまであらす唯女人形の名なるべし京師賣色に山猫と稱するよりの名にあらじお
やまの人形の名なり一説に思へらく眉墨を付ること遠山の如くすこれを以て名く今妓婦の
通稱となるといへり延寶八年次郎三郎人形上覽ありおやま二郎三郎なるべし
元禄十四年五月三日和泉太夫おやま次郎三郎兩人參昨日紀州様へ御臺様被爲入候に付被
召寄難有奉存候由申候江戸半太夫も届け參候
天和貞享の頃浄るり座看板の圖土佐少掾にたんせん新ぞう與太郎ふく太郎若女彌藏端歌三
味線、薩摩外記におやま與九郎太郎滿助手惣つま方けんさい小歌さみせん、丹波少掾にけん
さいとろ平やつこ彌藏おやま小歌さみせん、金平せつきやう石見守座に能人形どんつうど
ん七ちや平おやま小うたのうたさみせん、とあり小歌さみせんハ其役を勤むるにて人形の
名にあらす思ふに同じ人形にて其座にての名もあるべしけんさいハ賢才にや女形をお
やまといふと同一人形の名なり
のろまハ江戸和泉太夫芝居に野良松勘兵衛といふもの頭ひらく色青黒さいやしげなる人形
をつかふこれをのろま人形と云野良松の略語なり又鎌齋左兵衛ハかしこき人形をつかひ相
共に賢愚の體を狂言せしなりそれより鈍きものをのろまといへり其後そろまむきまなどい
ふもの出来たりと〔世事談〕にいへり〔竹豊故事〕に野呂松氏を祖として京大坂の操芝居に鹿呂岡そろ七夢間な
むきまを付道外なる詞色となし浄るり段物の間の狂言となしたり近來ハ

出つかひ
辰松

やうなること捨り知れる人も稀になりたり又按るに西鶴が「諸體大鑑」に越後町揚屋のこまをいふ處外記が平安城の道行かたればおやま甚左衛門が仕出し人形をそま七郎兵衛が二王のまねなごみゆきて野呂松八氏にあらすのるま鈍きさいふそのかみの俗語にて愚なる人形の名に呼しこまあるし其他の人形の名を見て思ふべし「なるべし」にさうるくけん平又「玉川」(五)人形の中のるま「毒らしき又」(七)のるまつかひも蠟燭で喰平澤常高が「後ハ昔物語老人の咄しをまるし」處土佐ふし淨るりの間々にあひの狂言さいふあり是近來より出たるのるま也のるま米平なご人形の名にてのるまハ治兵衛さいふ男の人形米平ハ甚右衛門さいふ男の人形なり又云土佐ふしの人形ハ襦より手を入てつかひ足ハなく手摺の下より人形ばかりみせてつかひ人の容ハあらはに見せざりしこまよりさしはれにて左を別人のつかひこまもなかりし桐申にて今の手遊のこまく如此にて遣ひし也働人形ばかりつかひこまもなかりしこま也あまり働かぬ人形をい

又云出つかひハ辰松八郎に始る人形の動くに隨ひおのれが身をもそのさまにうつすもの故見ぐるしきを恥て黒きとばりのかげに黒き頭巾を被るなり「雍州府志」に人形と上下の幕の間に出し顔をかくすなり幕の内を幕屋といふ近世舞樂の樂屋に准じてかくやと云ふ辰松ハ人形に手煉し上下を着し手摺をはなれて無量の手づまを遣ふに全身少しも亂るゝ事なし古今の妙手といへり辰松幸介これに亞ぐ各現在大坂藤井小三郎近本九八中村彦三郎みな出遣ひをなすといへり辰松ハ兵衛出遣ひの初ハ元祿十七年曾根崎にりて其積古本今に傳はれるあり其圖に辰松が上下をきて出遣ひの處あり衣桁の如「竹豊故事」に辰松八郎兵衛京大坂にて譽れを取後に江戸に來りて益名高く操櫓をあげ芝居を興行せり是を辰松座といふ京にハ正徳享保の頃三升平四郎宇治久五郎三郎與八郎等いづれも名を得し上手なり大坂にハ辰松氏藤井小三郎桐竹三右衛門等おやまの名人あり當時立役人形吉田文三郎ハ古今無雙の名人なり相次で若竹東工郎譽高しおやまハ今藤井氏男人形にハ桐竹吉田豊松若竹氏の中に上手多し

淨瑠璃作

近松門左衛門

井原西鶴

享保四年亥十一月廿五日葺屋町操師辰松八郎兵衛幸助二の御丸御舞臺にて操仕候事

淨瑠璃作者江戸にハ「世事談」に北條宮内岡清兵衛金平なご此人塚原市左衛門の作者等あり

頃日ハ聞えずと云り關東俠客傳云凡金平さいふ淨るり江戸太夫にさいふま淨雲丹波(後カ)太夫近江語齋太夫伊之助肥前太夫土佐太夫外記半太夫武部皆名人なれ共此太夫マたり得ぬ節に付し丹波父子に不及虎屋永閑牧野備後守殿好にて金平入道武者修行に節付せし計なり丹波太夫本行そのかみ好事のもの戯作すと節のよしさいへりさいふといつ頃のこま延寶頃の一枚繪に金平入道武者修行あり

いへども其人あられず是を産業とえたる者ハ近松門左衛門に始る百餘部の院本奇と稱すべし近松姓ハ杉森名信盛平安堂集林子と號す越前人少き時肥前唐津近松寺に遊學し後京師に住す學醫岡本一拘子の兄なりといへり享保九年甲辰十一月廿七日七十餘歳にて身まかりぬ

存在の時自の肖像に辭世をあるし置り「殘れさいふ思ふもおろかうづみ火のけぬま」あたる朽木かきして大坂谷町法妙寺に墓あり法名阿彌陀佛矣日一具足居士

〔操年代記〕に貞享三丙寅年京宇治加賀豫難波に下り京四條芝居にて西鶴作の淨るり曆といふを語る義太夫方にハ賢女の手習并新曆として兩家はり合遂に義太夫淨るりよく嘉太夫止ぬ其次のかはりの凱陣八島これも西鶴作にて評判よき最中出火して加賀豫ハ京に登れり西鶴ハ井原氏俳諧ハ宗因が門人にて一日二萬三千句獨吟してより二萬堂と號せり〔五元集〕に住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時後見たのみければ「驥の歩み二萬句の蠅あふきけり執証數人なれ此時其角もたの戯篇をこぼく著して世人に悦ばる元祿六年八月十五日五十二歳にて終れり辭世

發句「浮世の月見過しにけり末二年大坂八町目寺町誓願寺に墓あり仙皓西鶴といふ北條蘭水が建る處なり西鶴ハ寛永十九年に生れ近松ハ慶安承應頃北條蘭水に生れたるべし西鶴よりハ十歳ばかりもおくれしならむ昔説經者さいひて蟬丸の流を汲て三井の近松院を本寺とす今の佐々羅さいふものならむと

あり似つか先輩に中川喜雲淺井丁意が類ありといへどもよく世情に通じて滑稽をのべ盡すやうのこゝの西鶴が右に出るものなし八島其碩八文舎自笑等が草子一部の趣向のあれども西鶴が餘唾を拾ふに似たり淨瑠璃に於ての近松が如き者古今獨歩と稱すべし近松に亞てみゆるの紀海音なり筆才他人の庶幾すへきにあらず其外竹田出雲西澤一風錦文流村上喜助松田和吉長谷川千四並木宗輔安田蛙文爲永太郎兵衛などあり後の淨るりの合作のもの多く一筆なるはすくなし

南京あやつり 雨かへる おでこ からくり人形 せんまい 彌三五郎

竹田観 からくりし硝子 獨狂言 樽人形 笠人形 ござん人形 七變化

南京あやつりとして人形に糸を多く付て上よりつりてつかふものあり〔西鶴置土産〕四條のこどをいふ處わまがへるの芝居なる小みせもの云々〔歌舞伎事始〕に芝居四條中島にありし時類焼し雨がるといへる南京あやつりの小芝居一軒残れり又別條に記して云ふ四條中島東門前北側に雨がるといひし南京あやつり有り淨るりの角太夫節なり此雨がると云事のすべて小芝居にのやねなかりしが此芝居にの板やねにて雨のふる時もいとほさりし故かく云りとあり雨がいるの説ハ非なり小兒の戯にあまがへるの家にて作るここあり小みせもの小屋の小きに准らへて云なり〔伊呂芝居〕といふ草子に人をつかふこと南京人形の糸さばくるよりもやすくと云るも是なり〔竹豊故事〕に南京糸操ハ寛文延寶の頃よりつかひ初めし由京都山本角太夫芝居に専らつかひしなり江戸にハ兩國橋廣小路に天明九年の頃始てあり風來が〔放屁論〕兩國橋みせ物の大魚出れば大鮑骨出硝石細工牽絲傀儡

南京あやつり 雨が

南京と云

おでこ こと

人からくり 人形

古きを以て新らしく田舎道者の目を悦ばしむなどいへり此操りいつも國性爺の淨るりなどをして有しが文化十三年に絶たり小きもの南京といふこと近世の俗語なるべけれど何のよしにかあらむ常にかはりて小く愛らしきをいふ殊なる物を唐といひ南蠻といふも同じきにや其内南蠻のことに異變なるをいふさて此南京あやつりの綾つりの義にハかなへるもの也三番叟の人形などに糸を付たる手遊ハ今にあり南京といふのも異様なるを云なり〔花見車〕に俳諧の風体をいふ處談林風の後或ハ南京流とてさぬきを敷と云て圓座になし三輪をひやすとのべてそらめんハ成たる一体半年ばかりいひあらけ云々あり

おでこのこと云ことにねもじを添ていひたる也でこのぼうなり此事別に委き考あり其内一種おでこのいふ人形あり古き〔繪雙六〕にみゆ此雙六ハ前の雙六の條にも云るこゝにおでこハ享保元文頃ありしみせものなるべし放下師の人形箆籬を伏て明る度に其中の手遊さまハにかはる傀儡なりこの人形ハ兩國橋廣小路なるおでこ芝居ハもと是なり月成が〔後の昔物語〕に父が今日いでんつくでんの前を通りて杯といひしハ芝居のことなり堺町を通りしといふことなりと云りでんつくでんハ即おでこでんなり芝居に鳴す太鼓の音をいひしやうなれ共ハされこゝなりからくり人形の傀儡なり漢土にハ周穆王の時に偃師と云者木人を作りて歌舞せしむ是を始となす〔事物紀原〕にいへりこゝにハ其始詳ならず〔今昔物語〕に高陽院の親王ハきりめたる物の上にて細工に巧みにおはしけり京極寺を建給へりしに其寺の前の河原にある田ハ此

寺の領なり然るに天下旱魃しける年此親王長四尺ばかりなる童の左右の手に器をさしげて立る形を造り此田の中に立て置人來て其童の持たる器ものに水を入れれば盛受る時人形の頸引かゝるやうに操り造りたれば是をみる人ごとに水を持來り器に盛興しけるまゝ京中の人群り市をなしければ其田焼ることなくして満秩したりと云ことを載す又いふ後の事ながら〔甲陽軍艦〕に景勝より御曹司信勝公へ御音信に謙信弄物城攻のあやつりからくり物敵身方二千計の人数一間四方の城形進上云々又〔老人雜話〕に秀頼五歳の時京に參内伏見より行列をなす云々錢を箱へ入るれ廻る人形を輿の先に持せ諸大名供奉す椋梨一雪が〔獨吟百韻〕に四條に御成門の立春、長閑めける大あやつりの作り物、水をわけ樋やかくる苗代と云るの右に云る古事をも用ひしにや〔似我蜂物語〕に唐船の作り物に七八百の人形あるを泉水に浮ぶれば人形歌舞管絃を盡したるはてに帆柱を立帆を揚れば一ツの人形火をうち鐵炮を放てばみならちはらひて失ぬるからくりの事を云りこの作りもの語なめれどかゝる細工もあるへき也からくりの義のくりの操の意くり出しくり込なとのくり也からくりの巻ことをからまくからみからめる皆おなじ今刀劍の飾其外白かね細工など根がねを地板に貫き裏にて根がねを打廣げてとめ置をからくりといふ古き詞と見えて〔十二番職人盡〕銅細工の歌「はなれゆく人の心のこはかねのからくりかねてねをのみぞなくの細きを巻てある其形盡せしめは芽（メダシ）に似たれば云にや此むまいと云名いさ後の俗稱ながら何の義に解し難し古くは〔和名抄〕にも載廢せしむらびと訓す後世にせんまいの名あるは歳分たんの爲也いんち鎗の中心より先の巻返して目釘穴したる處を俗にせんまいと云なごハ薇より名づけたるべけれ彼からくりのせんまいハ歳よりさきの名にやあらん押て思ふにせんまいハ細きもの、巻たるなれば織登（オシノボ）にや織羅（オリ）苗なご思ふべし又ハからくりハ緩（ノボ）に巻たる物少しつゝ、巻まれば

せんまい
と云事

彌三五郎

漸（シ）登（ト）歎（ト）いづれも定め難くなん其名トケイ出來てよりの後なるべしトケイハ〔采覽異言〕に慶長十五年秋新伊西把爾亞（シ）ヲニス（ト）ニヤの舟漂着す資糧を給ひ舟を繕ひて歸らしむ十七年其禮として來聘す獻上の物の内に自鳴鐘一口あり此製是より有（リ）〔應筑波集〕あやつりをからくりの智恵や天下一昔の操芝居みな天下一と稱す〔篋絨論〕に火の入あぶら妖もの、出端痰吐ぬせんまい木偶の鳩尾先とあり
からくり人形の山本彌三五郎世に名高し〔佐渡島日記〕に石井飛驒つかひ人形の手を付たる根元なり今の濱芝居の名にのみ殘れり〔歌舞伎事始〕からくり淨るり名代山本飛驒是山本彌三五郎事なり元祿十三年御免有て今大坂へ引移り出羽といふ〔操年代記〕に其頃の歌舞妓芝居あたり多く殊に出羽にいさまくのからくりなどして見物諸方にわかる云々〔五元集〕鶏の句合（六十四）碁盤もていさ函谷へ彌三五郎判詞云右ハ孟嘗君が手のもの未だ出ざりしに其手古しとて新しき手を盡したる 雜術三千の客を越たりさてこそ窺人形の名をあげ飛驒掾と受領をも賜りけり昔のはかりことハ聲をはかり今の工みの形をたくみ出たり和漢の通例を以て寛永の史記にも載ぬべしその鶴飛驒これハ 雜飛驒なり云々 鶴飛驒ハ大工なり〔享保二年御多門御普請御手傳小屋場中橋廣小路にて御渡御作事方御披官松坂源五郎殿棟梁鶴飛驒立會（江戸屋敷子）に平内甲良（等）しく大工棟梁の内に大鋸町鶴飛驒と出たりまた享保五年庚子十二月廿八日鶴飛驒に川船方一件御用仰付られ候事ありある事を見れハ彌三五郎ハ窺覽に備へし事もあるにやされどもからくりの名代ハ竹田を古しとす延寶八年〔洛陽集〕に「玉兔の歩み竹田近江もなかりけり竹子とも見ゆ〔歌舞伎事始〕からくり物まね子供狂言名代竹田近江萬治元年竹田出雲掾といふ寛文二年大坂にて始たり又享保十一年五月名を竹田近江と改む寶永の草子〔伽羅女〕に竹田か座敷からくり等も御慰みとて末社まかせ是より出雲の大社へ大盡入來云々（此時いまだ出雲にて近江に改めざれば戯文と云廻せり）〔我衣〕に寛保元西

竹田

覗きからくり

硝子を作る事

三月より九月迄大坂竹田近江大塚堺町勘三郎芝居の向にてからくり并子供狂言みせしむ貴賤群集して初日より三日の間あまり人多き故木戸を閉たりと云江戸に來りし此時江戸にもそのかみ細工人のありとみえて「貞享江戸鹿子」にからくり人形師并せんまい大坂町なんきん清左衛門人形町松屋庄兵衛くわいらい人形師日本橋南四町同丹後守さかい町横町竹岡豊前とあり正徳二年辰八月葺屋町せつきやう座四郎兵衛大坂より山本五郎三郎手づま人形あやつり芝居を呼下し興行すこれ彼彌三五郎の弟子なるべし享保七年壬寅四月廿四日葺屋町にて掃磨と申からくり芝居來月朔日より芝居仕候に付名主庄右衛門届來る延享二年五月六日堺町肥前屋へ大坂より操師出羽呼下し操仕候處紫縮細水引張候義井出羽呼下し候處御訴も不申上候段御答にて先月晦日肥前義町内へ御預被成候處出羽呼下御訴不申上候段ハ先例もこれあり御用捨成下され紫縮細水引張候段不届につき座元肥前義島目十貫文名主次郎兵衛五貫文過料の事

次でに云覗からくりの頃の頃より始りけむ「職人訓蒙圖彙」などにもみえねばいと近き物なるべし西川祐信が畫ける圖あり今のやうとの少し異なり「本朝文鑑」涼賦に、覗からくりの地獄極樂も都の一錢にて善惡を見すれば一錢千金の遊びの中に巾着摺のいかに見るらんと云り享保四年版「艶道通鑑」花見の人群集する處をいひて、覗からくりをびいどろなしに大津繪を生でみるけしき云々「前句付」黄海に目をふさぎけりくびいどろの内の極樂すぎて飽からくりをみせまた「本朝文鑑」地鼓煎の文に此頃人の覺えたがひて覗からくりのあしらひと思ひ云々あれば其頃よりも飽を用ひしこと、見ゆ硝子をかけて物を見るものと西洋の法なりこゝにて硝子をふき作ることにいつの頃なるか「産業袋」に硝子のふき物なりとい知れ共其術の思ひもよらざりしにふと長崎人唐人に傳授し秘して是を製作せしがいつとなく他にもれて此頃一向法會祭祀の場市中に於てその術をあらにに見せ萬人に奇異たらし

獨狂言

樽人形

むといへるの享保十七年のことなり見せものにまたるの珍らしけれなり風來がみせもの事、是にや今も淺草に長島屋半兵衛といふ硝子師あり年七十餘なり此老父が祖父を源之丞といふ江戸にて硝子をふき初めたるの者なりといへり彼是考へみれば其始正徳の頃にやあらんのぞきからくり西洋の硝子をも用ふべければこれにあづかりたる事にあらねど高價なる物のかゝるものに用ふまじく思ひる貞徳が發句かざりや興行にありて端書氷とくる水のびいどろながし哉とあるの西洋の硝子を粉にして七寶ながしなどせしをいふ歟

獨狂言の貞徳が「油漬」に「ゆるりと爲てり又かしてまる主従者まねするひと狂言に「昔々物語」に右近源左衛門の業平餅を買たまふ所を狂言に舞ふとありこれらの獨狂言の一人して狂言するなり「世事談」に神田多町わらや次郎兵衛といふもの上手也寛文延寶の頃なりといへるも上にいふひとり狂言にや又「伽羅女」獨狂言人形屋あり是のひとりつかひの人形なり貞享四年「江戸鹿子」座敷獨狂言日本橋南二丁目松村休閑南八丁堀一丁目道具屋九右衛門塗師屋惣兵衛などあるの人形の獨つかひなるべし昔の遊人なぐさみに人形を舞す事はやれり「一代男五」人形舞してあをべと狭み箱より疊やたい取くみ上の幕つらかくし首おとし五尺に足らぬ内に金銀を彫め自由をまかけ六段なからのでくるほう動き出ける「諸艶大鑑」あの幕の内に一節きりのつれ吹人形まのし猩々吞をするもあり

又樽人形といふの西武が「沙金袋」明曆三年即本かげうつせ人形樽のかみ餅康重「寶倉」に花見の事をいふ處こゝら行かふわび人の人形樽につめ懷辨當におさめて花のいづれの情に見つる

笠人形

與次郎人形

基盤人形

か知ぬどもとりはこりかななる顔つきも實に春の春なれやといへり人形樽といふの今の柄樽の如きものにてそれを風呂敷にて包めば其頃の遣ひ人形のかたち似たれば酒興にこれを舞したり古き一枚繪樽人形の圖を見しに小柄樽に衣裳着せ編笠かぶらせたるをつかふさまなり是飲席即事の興にせしものと見ゆ右の一枚畫の貞享又の元祿のはじめごろのもの歟又寶曆の繪本「咲分櫻」と云にも同じく樽つかふ人をかけりこれの管がさをかぶらせり人の男の肌ぬぎたる醉狂の體なり

笠人形の西鶴「榮花咄」に菅がさのうへに人形をまかけて顔つきにてつかふ事をいひて其圖もみえたりこれら何ものかおどけたることを思ひ付たる一時のことのいわれを後また非人ものもらひ此を學びて遂に與次郎の名あり「屠龍工隨筆」與次郎人形のことをいひておんどれ／＼とて此前與次郎といふ非人の足のうへにて舞して來ることありといへり

基盤人形前に引る其角が集に「基盤もていざ函谷へ彌三五郎といふ句あるを思へばそのかみ飛騨掾が手づま人形をばんの上にて載てみせし事ありしなり臺を別に作らず基盤を借用せし右の意にひとし「源氏榮卷」の繪に紫のうへに基盤の上にて立繪扇をかざせる所あり昔ハ實非の事にてありしと思ひよりし是等今ハ禮式のやうに成てさるべき姫君御髪みきにハ基盤を參らせらるゝこやこのこばん人形にやならひたりけむ正徳四年八月廿九日「日記」或人の振舞に參りおやま次郎三郎をばん人形見物致候

「佐渡島日記」の佐渡島長五郎といへる俳優剃髮して蓮智坊といへりしか筆記なり予五歳の時より親傳八所作事を教へ東武へつれ下り基盤人形と名つけばばんの上にて我に藝をさせ

七變化

しにあなたこなたよりめされ春より九月までつとめたり去御方の御機嫌に入毎度めされける云々九歳に成たる時最早をばんのうへに乗かぬる時節より傳八工夫まだして七ばけの曲といふことを案し出し教へこみし云々是又からくり人形より案し出しこと、見ゆ蓮智法師年丁丑七月十三日没す「歌舞伎事始」に幼少より此道に心をこめ凡修行三十年來なりといへり年齡いくつと云ふことなからされし剃髮したるハ六十はかりなるべし然らば彼が基盤人形の貞享元祿の間とあらる

又七變化所化をば元祿十三年水木辰之助市村座にて七變化秘曲を盡して七變化狂詩といふ一卷出來金屋平兵衛版行して世に廣むと「元祿會物語」に見えたり辰之助が七變化を始といへる説あれども非なるべし

嬉遊笑覽卷六下

兒戲

あはく

かふく

ほうしこ

○兒戲説好 竹馬 鳩車 べっかう かくし 手々甲 隠れ遊 鬼ごこ 耳ひき 指きり ちんくもんから

「佐夜中山集」付句橋「さぞなともゑと夕なみの紋撫子の風にふかれてかぶりく郡山「河原によする水のわい／＼また「鷹筑波集」鶏冠井「わらび手のわい／＼をするか山の口漢土の俗小兒を哇々といふ「説文」咳、小兒笑聲「孟子」孩提之童、注知孩笑、とあり「廣韻」哇、小兒聲とみゆかぶの頭なり「日本紀」に句鶯都々伊また頭槌劔ともありまた「隣女悟言」に嬰兒の頭をふるをかふくといふこと古き詞なり「神代紀」に頗傾也を加夫志と訓し「天智紀」に垂穎而熟をかふしてあからめりと訓す此こゝろなり「散木集」稻のかたぶくを見て「ねぼつかなたが袖のこにひきかさねはうしこのいねかぶしそめけん信節云はうしこの小兒をいふはうしこの稻

鹽のめ
れるく
べろく
ねんねん

と、實いりよくて頭のれもきを小兒にたどへかふすると作りしなるべし
 正章〔獨吟千句〕に「にらむ目もとにまじる鹽のめ兩の膝に繼子はんの子すへ雙べれるく
 〔和訓栞〕に遼來の轉語なり〔蒙求〕の注に江東小兒啼、怖之曰、遼來々々、無不止者、とみゆ
 遼の張遼なり此説ひがことなりれるく轉じてべろくともいふべろくの神の正直がみ
 よなどいふ何の故事何の義といふことの有べきべるといふ舌の形容をいふなり
 〔懷子俳諧集二〕胡蝶もやねんねて眼る花の影弘承〔風流つれく草〕おねんねやおころく
 と御子さまがたをすかすも上つがた乳母達のむつごとぞかしそれを下つかたにていねろ
 くこの子よといふなりねんねんぼうしや小ぼうしとすかし給へとあるもの申きむかしよ
 りいひけることにや麻戸の皇子いとけなくまししくし時后達のかく仰せられけるとぞ〔太
 子傳記〕にも見えたりまた〔四天王伶人櫻〕中邑阿といふ淨るりに横の井が涙と共に添乳うた
 〔ねんく〕法師小ぼうしや禰宜羅らが候ぞとすかす聖徳太子御幼稚の時月増日増が子もり
 歌傳へて今に云はやすなどあるいまことに狂言綺語にて子もり歌の證にだにたちがたくや
 又子もり歌に「七里が濱の砂の數とらたふい〔半井卜養落髮千句〕わかき時さへ秋のよすが
 ら身もまむの子もちがはのぶしはさよはまのまざこの數はともいや〔松の葉〕裏組錦木に
 「七里おばまの砂のかずはほおもへともと有り
 ていく又たいく共いふ〔續山井〕餅つゝじたいくするやわらべの手攝州戯を童ととり
 なすなり古くの小兒ならでも物を乞ふなごに用ひし詞なり〔狂言記〕山だにていとおこさ

たいく

コテンの
詞の詞

かてん

ぬか〔同續集〕の内に又〔犬子集〕に貞徳「秋の夕の蚊のまんきさよていとこふとおさらぬ文の露
 涙また〔醒睡笑七〕思の色を外にいふといふ條、當家の者やまらちて高き處より落さまに念佛
 をいひけるをいたる人の云やう、題目をば念せずしていかなればあさましく念佛をば申
 つるやと問、さればよ先の落さまにいていと死ぬると思ふた是をねもふに今てうとといふ
 言に似たるやうなれとにあらざ今ちやくと云言の速なるを云ちやくく略してちやつと
 いひ又てやくくとも云是なり
 〔耳底記〕問光廣云コテンの詞と制の詞との差別如何答幽齋制の詞といふのテいと禁制するな
 りコテンといふの制の詞にあらで用捨あるべきことばなりなかくに我戀のなご古點な
 り〇處々にコテンと云こともみゆこれ主あることばなご云類なりさていとハハ屹とあるひ
 いかかとなご云ふ詞に近しテいと〔耳底記〕日ぐらしの瀧の條、このたきの名所にていなく
 て名あり此類多し此やうなをばていと日ぐらしの瀧と云ふやうに詠ぬものなりたとへば
 なにとやらして日ぐらしのたきのなにと云やうによむものなり
 小兒の人みちりするをおもきらひとといふ古歌に「世の中いといけなき子のおもきらひみし
 がなきにぞねいなかれける又〔新撰六帖〕わきもこがまだあさがはやつゝむらんかみふりあ
 げておもがくしする
 〔俳諧懷子〕萬治元年釋氏任口が跋にあそこころのこを拾ひ書あつめは、に入云々あなおさ
 なや敷島の直なる道にわいやをもせず筑波の正しきことにていがかてんくをもせでかぶり

人見去り

あわい
かぶり

くをふらば誰かてうちくの手を打てあひいと笑ひざらんや又「古今夷曲集」寛文五年序文おさ
あいをあひやてうち川水の阿晒和いな船の掉頭々々、土佐の手手甲、大和の元興寺隠斯、なご
やうのことをもてつらぬかいちらす

あんよ

小兒の詞に足をあんよといふのあゆむ事を教ゆるにあんよの上手といふ是なりこのことを

漢字に「朶」といふとみえたり「鷄肋編」易正義釋朶願云、是動義如手之捉、物謂之朶也、今

世俗以手引小兒學行謂之朶、莫知其義、以此觀之、乃用手捉、則當爲朶也、「類柑子」千里の

濱八百日行道あるべせんとてあんよくとはやしもていざなれ行云々

斗々運歩色葉集に倭國小兒呼魚曰斗々類說云南朝呼食爲頭呼魚爲斗故南朝宋齊梁陳南江

都ありこれ「北戸錄」に前朝短書雜說即有呼食爲頭注畧以魚爲斗注に梁科律生魚若干斗と

あるこれなり「墨莊漫錄」云吳中魚市以斗計斗爲二斤半なとあるにて知べし魚のことを斗といひ

しには非ず計ふるの法なり

隠れあそびの「うつば」また「榮花物語」などにかくれあそびのわらはげたるをいへるの今

のかくれんぼなり今の目かくしとかくれんぼと二種なれどもも同戯なりめかくしをめん

ないちどり共いふ「福富草子」にめなしと軒のすゝめといへり一休の「水鏡」にめなしとち

く、辭についてましませとある注にちとくとい尋ることはなりといへるのわろしとちの

友どちなどのどちにて同志の意なるへし今めんないちどりと訛れるの雀といふがちどりに

なりしにのあらずとちといふが倒にちととなりさてもじ添たるもの歟又の前に一つの名

隠れ遊

かくれん
目かくし

めなしと
ち

にて目なきもの、足もとをちどりにたどへたるにてもあるへし佐野紹益が「賑草」に今頃の

やよひの半なり軒の雀とて外の鳥よりの人近きものに侍れども人をおそるゝ事すこしもゆ

たんせす此ごろの常の如く早くの逃さらず家の内迄も入て餌をもとむ子をやしなひ侍る故

なりとあり是軒の雀の義なり「俳諧發句帳」親重が句「雲に月かくれんぼうかかつらのほ此

「天子集」にも見えたれど「古今夷曲集」に題あらざ行安小姫子のかくれごにさへまじらぬのはや

桂のほもじなるべし「風流徒然草」其譯知れぬこと侍りかくれんぼうにまじらぬ者うちつち

や子持やかつらの葉とは子供のいふことなりと有り行安が狂歌も是をとれるなり「吾吟我

集」山居せば奥よりおかくれんぼう跡をも人のたづねぬほど「續山井」花見にの人に

かくれんぼうし哉「竹」かくれんとするか葉かげの兒さくら次長「小櫻もせよや風にのかくれん

ぼ守昌「季吟廿會集」寛文十二年の巻「あつまりて遊ぶ桂の里子供宗英かくれんぼうにまじら

ぬはなし季吟「崑山集」慶安四年「つちやこぶしかつらの里にうつ礎吉景「後砂金袋」西武「月うつ

るつちよこぶしよ桂の葉など見えたり天竺桂と云ふもの桂に似たるものなりやふにつけい是なり諸州方言多

これにやもつとけと云しはつになさるを信田小太郎と云上るりにかくれんぼうにまじらぬものい

あふちやこぶちやかつらのはどうりかくしかたぐま足のつめたいちよこく走りと云るの

つちと云こと分らぬ故さかしらにあふちと改めしなり「物類稱呼」かくれんぼ出雲にてかく

れんご相摸にてかくれかんちやう鎌倉にていにかくれんぼ仙臺にてかくれかしかと云ふ

此戯も一極めて鬼となる者を定むる事なり其時いふ言は江戸にてい「かくれんぼうにどよ

いちくた

提迷藏

芥かくし
草履隠し

鬼ご

子をさる

ふよなみのかさつくれんぼうとわりやそつちへつんのきやれ又づんくつめの云々中切てく出羽庄内にて先幾人にも互に拳を握り出して是を順に數へる如くにいふ「かくればちだてやなわなめちくりちんとはじきまたのおけたのけ又」にぎりたぎり志よたぎりおけたのけとも云へり又江戸にていちくたちくといふことをもするなり〔篋絨輪〕に寵愛の餘り猪口迄おいとしぼいちくたちくに毛だらけな腕千雪、彼ち、や子持もこの一極めといふ事をするにいへりし諺なるへし漢土にこの戯を提迷藏といふ〔瑯環記〕に玄宗楊妃との戯を志たるよしみゆ此遊ひどの異ながら芥かくし又草履かくしありいづれもおなじ志かたにて一人尋る者に中りたるに隠せし物を求め出さしむ尋る者を鬼といふ明和二年〔川柳點付句〕朝のうちさうりかくしを廊下でし妓女の禿甲乙次第を定むるに草履をかたく脱でこれをあつめ空に向ひて一度に投げ馬か牛かと云其伏仰をいふなりたとへる象棋の金か歩かといひ碁の調か半かとするごとし

鬼ご〔物類稱呼〕江戸にて鬼わたし京にてつかまへば大坂にてむかへば東國及出羽邊又肥の長崎にて鬼ごといふ奥の仙臺にて鬼々津輕にておくりで常陸にて鬼のさらといふと有り子をさる子とるといふ鬼ごとの和州天の川辨財天の祭祀にありとなむその原の〔三國傳記〕に惠心僧都閻羅天子故志王經をみて其心をとり童を集め地藏と獄卒と取むとられしとする學びを始めて比々丘女といふといへり後京極攝政良經公の〔作庭記〕に凡石を立る事のにぐる石一兩あれい追ふ石七ツ八ツあるへしたとへる童部のとてうくひるくめといふ

小路ぐく
鼠ねまひ

耳みみひき

指ゆびきり

たのふれを志たるがごとしとあれい鬼の多きことと志らる今するとい異なりさて鬼わたしといふ事もこれより變したるにや〔月令廣義〕の打鬼戯また〔帝京景物略〕の替鬼などもこの類なり前句付〔廣津海〕目をふさぎけりくかくれんば聲のかさなるみはづくし或人の狂歌に「やうやうにつまめる髮の角たて、まんまくいふが鬼わたしする

〔帝京景物略〕云、小兒共以繩繫一兒腰牽焉、相距尋丈、迭于不意中拳之以去曰打鬼、爲擊者兒所執、々者闕然其捉代繫曰替鬼、更繫更擊、更執更代、終日擊不爲代、則佻巧矣、これハ擊んとする鬼を執ふるなり又云、繩以爲城、二兒怕蒙以摸一兒、執敲城中、輒敲一聲、而輒易其地、以誤之爲摸者、得則蒙曰敲兒曰摸蝦兒、これ又捉迷藏の類なり

〔浮世物語〕前〔鼠まひ小路がくれ云々あり新井白石久間洞窟に贈る書に人の亡命したるを小路鼠まひの出んとして出ざるなり元隣か誰身のうへ三〕庄や殿の一人の子もちたれ共此子うちねがみにて我うちより外を志らざといへる是なり又出す耳ひことい鬼になりたる者のいふ言なり〔鷹筑波集〕重和「出ずの耳ひくへき月の兔かな〔篋絨輪〕」火傷ならず果報に引耳の睡とあり此らこと異ながら耳ひくと種々なり

又小兒いさかひなとして中なほり互に小指を曲て引かくるを心とけたる験とすこれを指きりといふもをかじ懸路に指を截るをいかに心得て志をめしか指きりの〔西武獨吟〕月の出ると又いやくそく指きりをするゆびくひが露涙、自注に約束にゆびきりを付るなりゆびくひの女〔源氏はいさゞの卷〕にあり〔後撰夷曲集〕ゆび切や地獄の釜へはつたりとおちようと

ちんぐら

竹馬

云ハ二世のけいやく安勝この歌行風が旁注に童口遊詞とあり又小兒約束をして違へといふ印に油證文とて髪のおを指に付て柱などに押とあり證文の印肉よりおもひよれるにや又ちんぐらもんがらハ松の落葉三づんがらもんがら踊といふ小歌あり是なり「櫻歌阿宅松」にひく足もたびかさなれちんぐらくぞする(廣通)

古の竹馬の葉の付たる生竹を弄へり古書にみえたり又「福富草子」に童子の持たるハ二本にして今の製に近く但し木にて作りたる物とみゆ「江吏部集」に七歳初讀書騎竹擊蒙泉九歳始言詩舉花戲霞軒古歌に「竹馬を今の杖ともたのむかなわらばあそびをおもひ出つ」此心には「温故集」に蓮谷ハ竹馬や杖になり行けさの春竹馬の友人醒齋か書るもの有おのれも「雜考」の中に載たるありそれらのとこハに略きていはす中山三柳ハ「醍醐隨筆」に端午戲作あり劉木作刀紙作旗揚々竹馬着鞭騎兒童安習陣勝陣斯亦安中不妄危また古き俳諧發句に「竹馬に乗か小篠の轡むし」「續山井」に「はねちらす篠ハ雪の竹馬哉如貞松江重頼懐子の集を撰萬治三年卒業して」若竹の馬つれやみな懐子猶あまたあるへし田樂の驚足の一本なり又行人の鳥足といふハ高足駄なり古くは鐵にて鳥の足の如く作りし故此名あり

「保元物語」爲義の罪名定むる處長徳の比花山法皇紅の袴をつぎのへさせて奉り高あしにめされ築垣に御腰を懸させ給ひよなく御遊事ぞありしをどあり按するに此はけ物のまね遊はされしと云ことハこの御門御書をよくあそはされてさやうのさまうつさせ給ひしよし「大かみ」に見えたるをまか誤りつたへたるなるへし

高足

225694

馬具の戲

鳩車

高足の「洛陽田樂記」に高足一足などいひ又「古事談」永長大田樂に一足とありて其下に又高足とあるにても高あしハ二本なること知へし前の田樂の條にわれハ合せみるへし

「列子」に以雙枝長倍其身屬其蹕並趨並馳弄七劍迭而躍之五劍常在空中云々「口義」云雙枝屬於蹕今人所爲接脚之戲是也「因樹屋書影」云雙枝屬足即今踞高蹕之戲也高蹕之戲習子着履寸々而上長倍身矣亦能弄刀劍等

又馬具の戲ハ是を戲場にて所作ことなたりし始ハ九代め市村羽左衛門明和二年乙酉の顔見せにたたるか始なりさりなからその戲ハ古くよりありしなるへけれど詳ならず「篋絨輪」此書文祿五年の縹珍とんすを狎の首玉黒駒でなし貝の駒御召領鈔同又「義山後覺」此書文祿五年の明智光秀か信長を弑せし頃織田源五郎安土へ逃奔れる事を謠に作り童共貝からに綱付て遊ひく是をうたひしなりといへり童謡ハ一時の事なれ共この馬介の事とたしかに聞えず今錫杖のこま介ののあれこ綱付るさあるに遊ひは常にたたる事なれ共この馬介の事とたしかに聞えず今錫杖のこま介のなるきさこ緒に貫き弄ふ故これに錢を介と云ふ

「あら野集」次第ハに暖になる冬文春の朝赤貝はきてありく兒舟泉

鳩車ハ「潜確類書」云鳩車高二寸二分長三寸輪各二寸二分狀鳩鳩形置兩輪間輪行百百ハ面誤歟鳩從之其禽背負一子有紐置之前以貫繩蓋繫維之所也按鳩鳩之詩以況母道均一故象其子以附之因以爲兒童戲若杜氏幽求子所謂兒年五歲有鳩車之樂七歲有竹馬之歡者是也このふるき手遊とみえて「官遊紀聞」に古器之名則有鐘鼎云々鳩車提梁云々の屬などいへりこにもふるき畫に直幹申文の卷ものに童の鳩車をひくところをかけりまた

紙つけ合

ことに負たるものに墨をぬるこれにやあらん
又額に細き紙を唾にてつけぬれざる處目のあたり迄下りたるを息をもて吹落すとあり元祿
頃の繪にかやうの童戯多く集め書たる物あり其内にも此わざ見えず猶近き頃の戯事或人云ふ
英一蝶「續山井」寛文七年短冊の紙つけ合か花のさきたんばと云句ありこれ鼻の先に紙をつけ
合ふ戯によりて作れるなるべし

アリヤリ
ヤンリウ

次でに云このしろ小兒走り行つゝアリヤリヤンリウといへりヤリヤと云ことをかさねて
リヤンと云より拳をうつ詞になしてリウトウといひ出しやうなれどもさにはあらずリウと
ハ物を振物を打なごの勢ひを云「物類稱呼」に尾張にてハ走る時なご猶豫なくけハしきこと
をりう〜と云とあるこれなり又此しろ富有なる人をいふにリウとしてと云ことはやれり
これ亦同じ詞ながら意ハうつりたり

馬のり

江戸近在平井村あたりの小兒の遊びに馬を追ふ學びあり一人馬となるもの繩をもて首より
背にかけて結び兩手に杖をつき馬の足かたどる一人其つなを牽て行なり

馬のり「榮花物語本編」おとゞも消入ぬ計にてふし給へるにや一のみやおはしましておとゞ
おきよ〜馬にせむとおこし奉らせ給へばわれにもあらずおきわがり給てたかばひしてむ
まにのせたてまつり給てありかせ給へば一のみやまいよりうごかぬむまかなとて御あふき
してとくとくと打奉らせ給おきよ堀川左大臣顯光なり其御女小一條院の女御にて其御子一の宮中務卿敦貞
りおさな遊びの今も昔も貴も賤もかへらぬさまみるが如し又「猿樂狂言」外五「手車」と云に

はい馬

乗物とも馬とも思し召身ともおもはれて下されいとあるハ下に這て負ふにハあらずよの常
のことく背に負ふなりそれをも馬といふ今もまかり今はい馬〜といふこと「東海道名所
記」にみかどより五畿七道へ御つかひをくださるゝ時出しける傳馬を驛馬と申す驛馬とだ
にいへハ人おそれてたちのきけり今の世までもはいま〜といへハ道行人もかたはらへ立
のくハ此事よりいひ傳へたる言葉とかやといへり「日本紀」に驛を訓り早馬の急語なりいと
ヤと通す傳をハイテとよめるもこの義なり後世ハ傳馬とのみいへりとぞ「好古小録」に驛傳
古函の圖を載「俳諧錦繡綴」に「宴りにさかなのなきハ比興なる蕭山迷惑なから馬になる袖
彫棠「篋絨輪」に「若子の抱守り袴きた馬といふ句もあり

肩くるま

肩くるまハ古くハかたくびといひたり「義經記」に奥州平泉寺見物の條ねんいち見たわとて
めいよの兒チヤありはなおりて出たゝせわか大意ゆのかたくびにのりてぞ來りける近くハ萬治
二年印本「私可多咄」に江戸駿原の事をいふ處あどよりかふるハ肩くるまにてきたる云々「く
らべこしふりわけがみの肩くるまハ君ならずしてたれかわぐべき

手車

又今童の戯に二人して左右の手を組合せ其うへにまた一人を乗しめこりやたがてんぐるま
とはやす上にも引る狂歌に手車あり又「伽羅女」といふ草子に或もの、奢りをいふ處すぐれ
し艶女廿五人此女の役めにハ二六時中の差別なく御隠居の仰に隨ハ皆々立より御手車云々
又「崎人傳」に享保のはじめ手車といふ物賣翁あり糸もて廻してこれハたがのぢやといへハ
これハたがのぢやとこたへて童部買て遊ぶとありか、れハ彼手車のはやしとここれらよ

手にて豆
を作る事

爪とくふ

わやく

ヤニチャ

だ

の咄にあり又「産業袋五」わたはうしの條出來合にうちへ唐綿を包みにして上綿ばかりを
 きせ作る日に透してみれば包みか眞わたばかり歟よくあれみゆるものなりきつね綿とい右
 の包みのことなるよし「俳諧江戸枝折」狐か付て越後屋の損
 手にて豆を作ること「きのふのけふの物語下」長老さまへよ六太夫どの、おかた御み舞にぞ
 せん豆をもちて御こしある新發知長老さまへ申すやうよ六太夫殿の御内儀のこれを持て御
 參り候といふて指にてものを作り御目にかくる長老御らんじてさてくくにいやつぢや人
 のみる所にてさやうなることをするもの歟とあれば此こと近時よりするにあらざ
 爪をくふこといといと古し「源氏物語竹川」玉かづら侍従の君してかか和琴をすゝめて彈まむ
 る所にあまへてつめくふべきことにもあらぬをと思て云々注にはづかしくせんことにあら
 ずと薫の心なりとあり童のはにかみ爪くふといふも是なり又小兒のわやくといふ「正章
 が千句」俄にも七社の神輿ふりたて、侍賢門の前にわやくたくのの畧の義くらうがはし
 くわやくなりこのわやくとなりしにやまた「應筑波集」にわらはへのすかすも
 きかざやにいふてみるもあふなきまつの木ののぼりといへるの脂のねりてもてあつかひか
 たきにたどへていふか此をヤニチャともいへり延寶七年「俳諧富士石」いら高數珠西瓜のた
 ねややにちや坊ヤニチャ坊とい小兒のヤニいふなり西瓜のたねの粘るにたどふそのたねを
 數珠によそへたるの坊を法師の如くいへるなりやにちや今のやんちやんと云是なり
 今江戸にてだといふ地踏々なりこれもと小兒にのみいひしことに非ず「雨夜三杯機嫌」惡

左禮會に大蓋催亂舞障者ガ言押者ツヤク袴又「物類稱呼」にまぐむといふことを江戸にて
 はにかむといふまたひるといふを東國にてまぐむ又はかむと云ふ房總にてかなづうと云
 かなづうとい寄居虫のことなりおのれが家より外へ出るとあたはず内にはかり居にたどへ
 たり遠江にてまると云ひ關西にてわにる越後にてけすむと云ふ「萬葉」につのふくれに
 まぐむあひけんといふまぐむといふにまぐむといふにおなじと有とみゆ按るにまぐむ即ちこ
 むにて尻込なりこれを「萬葉」のまぐむといふ詞と同じとするの非なり右の内やにるのやに
 いふにてまぐむとい別なり

- 卵槌卵杖 打毬 毬杖ふり 飾り花 藥玉十二月 萱蒲萱蒲 小兒山伏
- のまねひ

毬杖ふり
卵槌

毬杖ふりの遊の打毬より起る但しその杖の曲杖とて毬杖ふりに異なりよりておも
 ふに毬杖ふりの形の卵槌より出たるものとおもはる卵槌の「枕雙紙」に正月ついたち齋
 院より后宮へ御文來る處御文わけさせ給へれば五寸ばかりなる卵槌二ツをうづゑのさまに
 かしら包みなどして山たちばなひかげなとつくしげにかざりて云々卵槌のかしら包みた
 る小き紙に「山とよむをのひきき」をたづねれいはいのつゑのおとにそ有ける又「同雙
 紙」正月十日そらいとくらう云々の條、桃の木にわらはの登りずはえを切るに女の童のそれ
 を請ふ處うつち木のよからんきりておこせこにめすぞなど云て云々「源氏物語浮舟」正月
 初に宇治より匂宮の若君のおまへにととある處卵づちれかしうつれくなりける人の志

またぶり

卯杖

わざと見えたりまたぶりに山たちばな作りてつらぬきをへたる枝に「またぶりぬ物にのあれと君かためふかき心にまつとあらなむ」

〔和名抄〕に杖極をまたぶりと訓り樹枝をいふなり〔花鳥餘情〕に木の枝に山たちばなを造り花にして卯杖を枝につらぬきたるなりといへり〔江次第二〕絲所進卯杖、藏人取之、結付畫御帳懸角柱、前立細木爲柱、槌末出五尺計、可用桃木、又四角可削、近代丸也、失歟、とおもふに卯杖と卯杖の長短によりて名のかはれるにやおなじ程の物なり〔延喜兵衛府式〕云々其御杖楨櫨三束一棟爲東木瓜三束比々良木二束中翠梅木三束椿木六束などみゆ〔夫木集〕に「色かへぬときはの峰の玉椿君か八千代の卯杖にとさる」〔西宮記〕卯杖春宮坊立案藤芳云々作物所供御杖四枚、作御生氣方物形置洲濱上云々、持統天皇三年正月乙卯、大學寮獻八十枚、〔漢宮儀〕云正月卯日以桃枝、作剛卯杖厭鬼これもと漢家の剛卯にならひ給へるものなり御生氣の方の物形を作り風流の飾物さへ付るの後のことなり〔源氏の孟津抄〕に洲はまを作り物にて其上にははの中、に御生氣の方の獸を作りて卯杖にわしむたとへに生氣東にあらぬ南にあらぬ馬なるべし臺盤所に置く〔新古今集〕後冷泉院おさなくおしましける時卯杖の松を人の子に給ひせけるによみ侍りける大貳相生のをしほの山の小松原今より千代のかげをまたなん

剛卯

剛卯のたゞ漢家のまじなひ物也〔天祿識餘〕說文、設大剛卯、以逐鬼也〔廣韻〕剛卯又謂之大堅、以辟邪也〔漢書〕王莽傳云、劉之爲字卯金刀也、其去剛卯、莫以爲佩、注剛卯以正月卯日

打毬

作、長三寸廣一寸四分式、或用玉、或用金、當中穿作孔、以綵絲貫其底、如冠纓頭、刻其上、面作兩行書〔北堂書抄〕云漢家以五月五日、用朱索連五色剛卯、止惡穢、また〔沈約宋書〕十四、舊時歲旦常設葦茨桃梗、磔雞於宮及寺門、以禳惡氣云々、桃卯本漢所以輔卯金、又宜魏所除也、云々、宋皆省而諸郡縣此禮往々猶存とありか、れに此にのさらに用のなき物から熱田の神事に卯杖舞をなす一つの程より有ることにか知らず〔鹽尻〕に正月十一日熱田の宮前にて宮人卯杖舞を奏し倍從竹川をうたふ尾張氏踏舞の頌を唱へて高巾子の神人鼗鼓を振り侍るさまいとく昔おほえたる云々いへりその歌曲に杖の舞翁子舞など委しくあるしたれども略之ざるを或人漢土の碌瑠といへる農器より出たりといへるのうけかたし形の似たりとてこゝにいまだ用ひざる物を漢籍より見出て兒童の戯玩に作るべきやうなし〔野守鏡〕にりうこのことをいふに「いまだよくまはらぬさきになければふりくとして落ることありこのたゞ投る時の形容の詞なり」

打毬の騎馬にてまり撃わざにて唐の代の戯なるを其頃こゝにも盛に行われ〔萬葉集〕四年丁卯春正月云々、右神龜四年正月、數王子及諸臣子等集於春日野、而作打毬之樂、其日忽天陰雨雷電、此時宮中無侍從及侍衛、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路云々といへることあり散禁といふ禁足せらるゝなり〔續日本後紀〕仁明天皇承和元年五月戊午、亦御武德殿、令四衛府馳盡種々馬藝及打毬之態など見えたり又舞樂に打毬樂あり、節會の馬藝おこなはるゝ時この様を奏すとなく〔平家物語十二〕に後鳥羽院稚き御時打毬の玉を愛させ給ふ故

玉をきる

月の男子にいぶり／＼女子にい飾り花をおくるとなん此事古風をまもる者まれ／＼する事なりといへりされど飾花のものと五月の節物なり下總の千葉などにて玉をきると云て今も弄ぶ玉のけやきなどのかた木を丸さ宜しき程なるを小口より挽きりて用ゆ杖の木も竹も末の處を少し撞木の形に作るをよしとす凡二十間ばかりも隔て玉を轉しやりて打するなり玉の初め地に打つければ廻りて走りゆく廿間もゆく間に三四五度も地に付てい飛上り／＼してゆくものなりこなたに居る者幾人にも并び皆彼杖をかまへて玉の來るを待てもと來し方へ打返す力まかせにすることなれば此時向ひ居る者の面などに中りてあやまち有り又江戸近き逆さ井などにもこれを弄ぶを見たりこれをはんまを廻すと云習へりこの濱弓のはまど名のまがへるなり

飾り花

〔枕の雙紙〕五月五日の條わかき人々のさうふのさしぐしさしものいみつけなどしてさま／＼からきぬかざみなかきねおかしき折枝どもむらごのくみしてむすびつけなせしたるめづらさういふべきことならねといとおかし云々つぢありくわらはべのはと／＼につけていみしきわざしたるとつねにたもとをまもり人にみくらべえもいはずけうありと思ひたるをそばへたることぬりわらひなどにひきとられてなくもおかしむらさきの紙にあふちの花をさかみにさうふの葉はそうまきてひきゆひ又白き紙をねにしてゆひたるもおかしと有わかき女房ちなど衣服に糸はな紙花にてあふちあやめなどを付る也按るに〔拾芥抄〕に〔證類本草〕を引て是日俗人取檮葉佩之避惡氣とあるによりてあふちを帶るなるべし古くより檮を

玉さつきの

あふちとすれども誤にてあふちの棟字にあたり檮のちやんちんといふ木なり〔同雙紙春曙抄〕卷二の頭書にくすだま〔雲圖抄〕に藥圭とかけり〔河海抄〕に續命縷靈絲絲なといへりみなくすだまの体なりと云々今女わらひ端午にもてあそぶかざり花なりといへり〔雍州府志〕藥玉の條下に端午のことを云て以彩絲作花枝貼白紙上掛之於女兒背後是謂藥玉舌以丸藥交其間避穢氣長命縷之類也とあり是即かさり花なりおもふにその形の兒女子のえりかけとて花など縫たる物のあるそれにや似たらん後に其用もなく只もてあそび物とするよりかざり花などと呼ぶるなるべし

藥玉

清俗も此日よもぎ菖蒲を用ること同じ〔松亭行記〕重午の日還都城人家戸懸赤靈符菖蒲艾葉藥玉の〔河海抄〕に御記曰延喜十三年五月五日丙午、絲所供奉藥玉一如常、撤去年九日菖蒲以藥玉懸替、着御柱前例也〔枕雙紙〕にくすだまの菊のをりまであるべきにやあらんされどそれの皆いとを引とりて物ゆひなどしてまばしもなしとみえたり然らば重陽に藥玉を撤し菖蒲を懸ると知べし懸ものに菖蒲袋二様あり古製なるやあらず菖蒲の藥種の吳菖蒲にて食用の胡頹子ナシロクにあらざり〔雲州消息〕一名「問術往來」云今朝自或所給藥玉一流作以百草之花貫以五色之縷、摸草虫形、極其花房云々みゆれば古くより虚飾多かり近世堂上に十二月掛物とて毎月に懸るものあり皆藥玉の如く五色の糸を垂て頭の方に其月々の草木の花また鳥虫な

菖蒲

十二月の物

をを作りものにして付たり古代なき物どもなり藥玉をもとにして作り出しなるべし或云これ大抵後水尾院の御意巧なり「年中故事要言」民間にも五月五日女童の翫物に色々の作り花を糸につけ紙に張なとして用るハ藥玉を下に習てする事なりといふ

衣服にハ袂につけし事前にも見えたり又「爲兼卿家集」菖蒲露「引のこすあやめの草の袂にもさ月の玉のかくるまら露と有り

菖蒲胃

菖蒲胃ハ「辨内侍日記」に建長四年五月五日の條、女房たちにあやうぶかぶとせさせ花ども脱文「あやめかつらかけはけしきはせに云々辨内侍」黒かみのあやめのなきをひたひなるかぶとの脱文と人やみるらん此時後深草院御年十四にやつきそひ奉る女房にせさせ給ふなりこれを「増鏡」に所々より御かぶとの花くす玉なと色々多くまいれり朝餉にて人々これかれひきまさくりなどするに三條大納言公親の奉れる根に露おきたる蓬の中に深と云文字をむすびたる糸のさまもなよひかにいとえむありて見ゆるを云々あるかぶとの花を後世の胃人形の如く紙にて胃を造り其上にさまくの花をかたどり作れる物とおもへるハ非なるべしかぶとハ云どもそれ程に頭にかうふるべき物にもあらずたゞかんざしのやうにやあらん女房式正の時ハ垂髪して頂のうへに髪を瘤の如く束ねて是をかぶと名く其かぶに釵子をさすかくするを髪上げといふとぞこの如くかぶとの花ハ彼かぶとに挿む花なるべし「辨内侍の日記」なるあやめ胃も同じかるべし此所菖蒲を用る事古き例とみゆ

菖蒲綬

「續日本紀」天平十九年五月庚辰、太上天皇詔曰、昔者五日之節、常用菖蒲爲綬、比來停此事、

從今而後、非菖蒲綬者勿入宮中」と有る是なり又端午に諸衛府甲胃を着ること「延喜彈正式」に見えたり後に兒童のもてあそぶあやめ胃ハその始「園大曆」文和四年五月五日條に今日加茂社競馬神事如例、彼是云今年天魔流行云々、童等結構菖蒲甲、即學合戰、所々催其興、童部親類已下、成人武士等相交、及傷殺害所々數輩云々、誠不可悅事歟とみえたり是印地の戲なり幟を立木刀をもてあそぶ事もこの遺意なり「諸社根元記」藤森縁起、毎年五月五日祭禮、神幸之時、在地之神人等、鎧甲胃帶弓箭列騎馬、自爾以降、洛中洛外至邊土遠國、小男童兒帶作大刀刀等、以菖蒲飾之、稱菖蒲甲、是則當社祭禮供奉行裝也といへれどもさばかりにハあらず「寛永發句帳」にけふさすハ印地のまやうぶ刀かな「雄長老百首」さしまさに軒のをそひの名にあて、菖蒲刀のはハをれにけり「紅梅千句」に「持もさるも輕き番やばん具足五月五日もやゝくれにけり

「洛陽集」に「割ばさみいづれあやめぞ蓬ぞと行正「中古風俗志」に享保のころまでの所々の廣小路へ童集り菖蒲にて大きなふとき三ッ打の繩をこしらへ或ハ長竿等を持出往來の子供へあやめがめくといひて下座をさせもし下座をせされば打かゝりなどして使につかひしたるハ小襦布など重箱をこはされはうく逃かへりし事などありしが今ハ絶てなしといへりされど予が幼き頃までも童共人家の簷なるあやめを竹のわりばさみにて取あつめ三ッ打に組で持あるき他所の子供を見れば此繩にて地を打草履を脱で下座せよと云ふされども下座する童もなく又絶てさするに及ばず唯かくして遊ぶとなりき今も此戲する處もあるべし

削りかけの胃

削りかけの胃〔俳諧懐子〕明曆甲をみれば削りかけなり殊更にも鹿茸や馳走ぶり重頼内田順也が〔俳諧五節句〕貞享大かた槍物師細工なり人形に武者あり舟あり平家物語の躰有り鹿相なる張貫もありまころに木をつきかんにて削り短冊の長さやうなるを色々に染いくつともなくぶらさげるによりて削りかけの甲といひ賣にや又けづりかけにあらぬも有り此頭の宮殿寺社兒法師女さまの古事どもあり江戸にて張良辨慶など名ある武者を只一騎作て張良々々辨慶々々と賣り胃といひ賣ありかぬ也〔日本歳時記〕正徳五菖蒲胃太刀等の事をいふ處に此ことむかし厚き紙に人形をほり付薄き板を胃の形にこしらへ或は菰の葉にて馬を作り或は木を長刀の如くにけづりなとして戸外に立侍りしが近年の風俗美巧をこのみて木をもつて人馬の形をささみ又はりこにして彩色をほどこし或は甲胃をさせ劍戟をもたせ戦鬪の勢をなさしめ戸外に立侍る是を胃といふ

菖蒲刀

〔應筑波集三〕安井正親けづりかけの胃のだしの鯉節これ彼厚紙にて作りて胃の上に付たる物をだしといへり江戸にて今神祭のだしといへるものもうへに付たる人物草木何くれの作り物をいふ名なり此句の右の作り物と鯉節のだしとをかねていへり又〔世話盡三〕明曆二年刻「夏の胃をかさはむる窓檜物師の軒もあやめの節句にて是も削りかけといなけれ共檜物師といへるにて知るべし

正保慶安の町ぶれにも前々より小旗之義絹布一圓仕間敷候と仰付らるゝ萬治二年四月十六日毎年如申觸候五月節句の甲結構に仕問敷勿論作りもの作り花糸類金物金銀の箔漆につ

胃人形

け商買堅仕まじく候いかにも鹿相なる人形一つ二つより外付申まじく候寛文七年十一月朔日町觸の内五月のもてあそびの甲古へのごとくかぶり候やうに拵へ人形ほり物可爲無用但甲に立物の不苦候すべて結構に不可仕事此頃かざり物をむねとしてかぶられぬ胃を作れるとみゆ今の上り胃といふ物麻を垂たる木の削りかけにかへたるなるへしもどうへに付し人形を後に別に作ることとなりても猶胃人形といふなり上り甲といふことなきあたりへ奉るの義なりひなにも此名ありしとみゆ〔類柑子〕廣蓋を車大路やわかりひな適山ひなの小きものなればなり

〔世説故事苑〕寶永七年板 胃及人形を造り門戸にかけ紙に畫きて門に出すといひ〔五元集〕に五月雨や傘につる小人形といふ雨日に傘を共うへにさしかけたるを傘につると作れるにや又菰の葉にて馬を作り戸外に立と歳時記にいへり〔好色つれ〕草〔七夕のこと〕をいふに百姓の麥わらにて馬人形を作りて高き木のうへにかけならべまつりとす今も信州松本にて七夕に町々繩をもて家と家との軒にかけ路を横きり木にて人形をいとおろそかに造り紙衣をさせいづくとなくかの繩に吊おくとなり

越後鹽澤わたりにても七月朔日より七日の夕まで家々の軒に繩をひきはへ人形のすげにて作り五色の紙衣させ大小刀鎗長刀などを竹にて削り鏝また鎗の鞘等のかるたなどの厚紙をきりて作りすべて大名行列のさまなとうつし吊たき七日の晩方にとりて川水に流し捨となむおもふに牛の七夕に因われば靈棚に牛馬手向る事の七夕に移りさて人形などさまく吊

ちまき馬

ること、端午とまがひたりさるながらこのさまをもて昔の端午のやうもおもはれぬ傘につるといひしも其をりにて言を設ていひしにあらぬにや
〔散木集〕の連歌にをさなきちまきのちまき馬もちたるをみて承源法師「ちまき馬のくびからきいぞ似たりける附る人もなしきうりの牛の引ちからなしとあり又〔著聞集〕草木部泰覺法印五月五日人の許へ菖蒲をつかはすとて讀侍りける「わりなくぞあやめのふちを心ざすちまき馬をやひきいだすとて此歌を請へるにやあやめのふちの穂の形鞭に似たるをいふ又元祿比の畫に見えたる端午に門に立し人形の體甲冑きたるも廣袖にて手なく又其ころのあやつり土佐の芝居などの人形に似て下のみなはかまのみにて足なし茅卷馬など古の兒童のもてあそびにて常にも造れるなるべし

小兒山伏の學び

この日小兒山伏の學びせし事〔日次紀事〕延寶中撰以柳木作大小刀是謂菖蒲刀、男兒橫之於腰、著頭巾、傲山伏体、〔むかし〕物語享保十一年六七十年以前までの五月の初とさんすかけはら菖蒲刀を賣てありくそれを子供もとめて五月四日に子供をやうぶにて鉢巻しとさんをかぶりたすきをかけ菖蒲刀をさしほらを吹ありくといへり〔俳諧懷子卷十〕明曆二年撰すかけも頭巾も脱てゆかたびら端午の暮をおしむわらんべ致也これ男兒が山伏の装ひいかめしきを好めるのみにあらす頼光大江山入義經辨慶大塔の宮などの似せ山伏の体をよるこひ學ひしなるべしその彼胃人形にも多く作るればなり又小兒のみにも非すたましく武人のこの装ひせしこともあり〔北條五代記〕に北條家の武士主家没落して後大家の招きに逢へるか其君

の命によりて馬上のはたらきをなす時兜巾をかぶりけさをかけたりこれ何の爲なることを知らず小兒の戯におなじ〔北條五代記〕結城秀康卿北條の舊臣等を扶持せらるゝ内朝倉能登守入道犬也に命してむかし軍陣のはたらきを學ひて見せよとある條、犬也つぎの駒に黒糸おどしの鎧を着はし甲の上に頭巾あて白袈裟をかけいぶせき山臥のすがたに出立弓を射鎗をつかへることありおもふに此者法體なる故をもてかく装へるなるへしそのかみ甲越の兩將みな法師にて戎服の上につけさ掛たり當時のならひと見ゆ

羽子板こぎのこぎ 踢毬

羽子板こぎのこぎ

羽子板こぎ〔下學集〕元安羽子板正月と出たり〔年中定例記〕室町殿の頃の年中行事書し物なり正月十一日の條、比丘尼御所の御參云々御所へ御みやげのこぎいたこぎの匂員已下云々また〔搦囊抄〕爆竹の條に羽子板の名出たり初春に用ひしものを爆竹に焼ことなれば羽子板もそのうちに入ることならむ〔俳諧水鏡〕にさぎちやうばねとあるの〔埃囊〕によりたるにや爆竹の書を板のうらにかきたるもそのことによれるに似たり〔世諺問答〕にこぎのこつく事の蚊を避る呪なるよし見ゆ早春より夏日の虫を呪はむこといか、附會の説なるべし扱田舎のはこ板處々にて小異ありといへども殿さまかみさまを畫けるの奥州三春にて作れるも同し信濃はこ板ハ夫婦の體ばかりにて子供ハなし内裏羽子板と云ひ此繪あるによる〔寶藏二〕ひさうなき家どうじをぐし見さまよろしからぬ子などもあまたつれてはこ板の繪のやうにむかひぬたるもみづからいたのしと思ふらめ〔一代男三〕はこ板の畫も夫婦子あるをうらやみ云々〔諸國咄〕貞享二年版此女袖より内裏羽子

内裏羽子板

板をとり出して獨はねをつきしにそれの煙突かと申せば男もいたぬ身をよめとい人の名を立給ふと切戸押あけて走りいる殿さまのみさまの描は板のみにあらず洞房語園便面記に寺院より煙て古め云々このよめつきと云の敷をかぞふるをよむといへばよみつきの轉じたる歟又今も一とごに二たごみわたし四めごとかぞへいふ是によりて嬬づきか「俳諧懐子十」かぞふる春の日なみもよしや伴ひてはねつく胡鬼の子供のとも重頼是つく敷をかぞふるなり「同集一」つくはねの敷よむこのもかの哉龍賢敷つくや鳴の羽音百羽かき山田又二人より四五人聚りて羽子つくを追はねと云ふこれに男も雜る享保中の「前句付」に羽子板に男の髪うなつかす「胸算用」江戸のことを云處十二月十五日より通り町のはんじやう云々正月のけしき京羽子板玉ふりふり細工に金銀をちりばめ云々京羽子板とい内裏はど板なるべし「安齋隨筆」に日光山より出ることいふ菓のこきのこの形なるを後水尾院の戯れ歌によませ給ひしにも「つくはねのそれにいあらぬこきのこのとよませ給ひし今も都にこきのこといふにこそといへり此木の實比叡山などにもありそにていたからまんと呼とぞ江戸にて今つくはねとのみ稱す漢土にも羽子に似たるもの有り「廣東新語九」廣州時序正月條に晝則踢毬五仙、觀毬有大小、其踢大毬者市井人、踢小毬者家貴子云々又「同書十一」土言の中に以鶴鴿貫皮錢、踢之曰踢毬、毬亦曰燕又「清朝探事」に毬子とて鶏の毛を結び束ねて錢に貫き蹴あくる遊びあり又「清俗紀聞」正月の條、兒女共に見鞠とて鶏毛二本又五本錢に挿み絹にて包み是を蹴て戯とすと見ゆ毬は音近く同物なり見鞠の見も毬の音なるへけれは恐らくは語倒コトハカシにて見鞠とあるへきにやこの羽子

京羽子板

つくはね

毬

何鳥の羽にても作るべけれど昔の雛を用ひしにや重頼が「獨吟百韵」はなれかたの「雛子のめん鳥折を得て胡鬼の子供がつくばかり

「咏物詩選」蹴鞠の詩の次に踢毬、明馬如玉、腰支嬢々力微々、滾々紅塵拂羽衣、掩月鬢淺星獨墜、石榴裙底鳳雙飛、とあるいふうきことなるべし

「帝京景物略」云童謡云、楊柳兒活拙陀螺楊柳兒青放空鏡楊柳兒死踢毬子楊柳發芽兒打板兒この毬子即けんてきなり板兒の小兒以木二寸製如棗核置地而棒之一擊令起隨一擊令還以近爲魚曰打板々古所稱擊壤者耶其謠云楊柳兒云々

あまがつはぶ 犬張子犬の ひな紙びな、裝束びな、土 後のひな紙びな、裝束びな、土

「源氏物語雜雲」明石の上の姫君を都へ移し入る所にめのと少將とてあてやかなる人はかり御はかしあまがつやうのものとりてのる「河海抄」に尼兒ニヤカはふこのやうなる物なり「仙源抄」に諸事凶事を是におぼするなり三歳まで用また「源氏上」明石の姫君皇子をうみ紫のうへあまかつ作ること有りちごうつくしみ給ふ御心にてあまかつなど御手づからつくりそぐりおはするもいとわかしくし「榮華物語本」小法師のさまをいふ處小き地藏井のかくやおはすらんとみえ又あまかつなごのものいひうごともみゆと有さてあまがつに説ども多くあれどひがとのみなり按るにあまかつのあまがたなり天兒と書ひ其形によりて兒字を用ひしなるべしあまの尼なり故に尼兒とも書ひ「翻譯名義集」に阿摩此云女母とありてもて梵語なりと「釋日本紀」にいへり「日本紀」に阿尼の字を用ふ今も部語に女あまといふはくくのみにあらずよりてあま

あまがつ

あから

がつい女母形と心得られぬ是に凶事をおほすことはもと神事祓除の義なり〔儀式〕に御贖儀二月十神祇官預前受儀其物料鉄偶人卅六枚云々木偶人廿四枚なぞみゆこれ人かたなり〔公事根源〕六月祓の條には朔日より八日まであからこ持てまいる朝餉にて主上にまいらす四のかはらけを指して上にはりたる紙に穴をあけて御息を入るなりと有り清祓の時流す物は土器を覆ひて其内へひなと入上紙にして張るさいへり十二月贖物は是に同じと見ゆ此あからこといふ物はあまかつのよりに起る所なり

人かた流すなり

又三月上旬巳の祓に人かた流す事ハ〔源氏物語須磨の卷〕浦邊に陰陽師をめし舟に人かたをのせて流すことあり加茂保憲女の歌に「おほぬさにかきなでなかつあまかつのいくその人のふちをみるらん〔江家次第〕立太子の條に阿末加津また比々奈の名出たりひいなひ雛の義にて小き物をいふ是また小き人かたなりあから子といふ赤裸の體をいふにや

〔雍州府志〕に天兒一尺餘竹筒上以白絹造偶人首建之於尺餘竹筒二頭又別以尺計竹筒横首下是爲肩以置小兒之枕頭云々これ城殿の製造なり〔和訓栞〕城殿にて造るハ老女の面を造る肩と胸とに竹筒をこめて内に護身符を入るなり禁裡の御膳にあまかつをすうる事〔日中行事〕に見えたりといへり〔雍州府志〕城殿其家之稱號駒井氏也相傳元三韓之役化人而始住近江東坂本邊騎る物を作る〔職人盡歌合〕盤紙賣わすれめやまきのにそむる盤紙云々井自茲終爲氏云々安齋云今も城殿和泉とて京にあり婦人假粧の具扇の類花美なり

はふこ

はふこ伽婢子〔コキキ〕ともいふ母子の義にてあまがつと同じ類の物なり〔伊勢守産所記眞陸〕あまかつ一ツは、この事なり大さ二ツ三ツの子はどにゐるべし御ときの犬箱ゐるべしとみゆ

犬張子

これ天兒は、こを一物とす造りやう少しつゝかはりて又は、こといふ名も出来けめおなじく偶人なれと殊に小きを比々奈といふ今三月に雛祭といふ事するハ上巳祓除の義をとれり〔文徳實錄〕に嵯峨天皇太后崩云々、先是民間訛言、今茲三日不可造糕以無母子也、識者聞而惡之、至于三月宮車晏駕、是月亦有太后山陵之事、無其母子、遂如訛言〔三代實錄〕曰田野有草葉白脆三月三日婦女採之蒸持爲糕傳爲識事これハ漢名鼠麴といふ草なり今の専ら蓬を用ふれども此日草餅作ることに古たりとあり母子のこと此日によしあり伽婢子といふハ彼をいやしめたる名なり其もとの母子の義にかなはず伽狗などより移りて後人の呼訛れるにこそ天兒は尊くばふこいひやしとすも後人の訛なり〔寛永發句帳〕野に遊ぶ人のお伽かほふこ草家次また了意か作に〔伽婢子狗張子〕といふ冊子あり此作者了意ハ洛陽本性寺の僧なり〔東海道名所記〕なごの作者の筆と異なり淺井了意松雲と云るは本性寺の了意伽婢子又彌水子とも云しものこは同名異人なるへし〔諸艶大鑑〕よめ入の處に奉公雛と書り醒齋云おほこいへるこはほうこの畧なりされともいははこなり

犬張子ハ〔産所記〕に御ときの犬箱と有り〔婦人養草〕に犬張子ハ犬の形たる筈なり産屋に用る器なり産衣をまつ此筈にきせ初て其後子にきする筈の内への守り札またほうふやにて用る白粉蠟紙またハ眉掃などを入るなり此はりこハ奈良の法華寺といふ尼寺より天下へ出すなりといへり延寶三年の〔南部名所集〕に此寺のつくり犬ハ小く愛らしきものなりとあり犬張子ハ多く賣れぬ物故其頃も専らにいて作れる犬と賣しこまみゆ

〔俳諧埋木〕明曆二年御づしにひなやはりこの并びゐるとありもとよりひなと共に置るなり又同年梓行の〔世話盡〕大犬も小犬も同じ君のものをもじのかずのはりぬきの箱此物の始を考ふるに隼人宮牆を守ることにもよるべけれとさまでもあらず宮殿に獅子の形を作りて置事

雛祭

ことをするわらはへの髪さきみるもつめる鬢髪はたて髪
 今の雛祭ハ上巳の祓を思へるにや俳諧水鏡にひなわそびこそ慥なる故もあらねば打ま
 かせて源氏物語に元日にも野分の朝にもひなことありし由侍れば今日
 に限らぬとあられたり但いさゝかあひしらひあらば此頃の俗に任せて今日のことにもなりぬ
 べしやとて新續犬筑波集にも少々まじへて入侍りし此書享保十五年浪花人紹蓮といふもの、撰なり
 利を得むとの所爲なりさて新犬筑波の季吟の撰なり件の文の季吟が説を録したるなれば
 此頃の俗との萬治前後をいふ歟それより前にもさるべきあたりにもてはやし、事ながら
 民間にも専ら行はれしのおほやう其頃よりなるべし犬子集の貞徳の撰にて寛永八年より
 同十年正月にあるし終る守武千句の宗鑑が犬筑波に次での撰なり花の句よせたる中に
 政直が句ひなといと花の都の細工かなこれ鄙に雛をよせたり其頃いまだ遍くもてあ
 つかふことにあらざるとみゆ明暦二年刻したる世話燒草三月の條、三日節句云々ひな遊
 巳日被とつ、けて出たり寛文元年一雪が獨吟百韻もとむるにさても直段のやす屏風ひ、
 なわそびいた、祝言のみに是又雜
 用
 相摸愛甲郡敦木の里にて年毎に古びなの損したるを兒女共持出てさかみ河に流し捨るとあ
 り白酒を一銚子携へて河邊に至れば他の兒女もこゝに來り互にひなを流しやることを惜み
 て彼白酒をもて離杯を汲かしてひなを俵の小口などに載て流しやり一同に哀み泣くさま
 をなすことなり此あたりのひな内裏ひなに異なることなし其外に藤の花をかつける女人形

雛流し

多しれもふにひなを河水に流すいもと祓除のことによるなるべし妹脊山淨るりにひなの道
 具を水に流すことあるの作り設しこと、のみ思ひしにかく似たることもあり

寛文八年刻梅盛か撰へる細少石に草餅を「けういはふ餅もやいは、ひな艸重食」餅とな
 りし艸に花みる繪びつ哉離雲延寶八年洛陽集三月三日「ひしきものや袖かき合せ夫婦離數
 寄」黒糸のむすぶ契やめをとひな女綾戸「桃の苔る此子ひなかさる間鍋によろし瀧尾」妹御やひ
 なのかなへひそかにまつ有知「こしかたや子持見なをす雛の節句自悦とあり此頃の専ら節
 物となれり同集春部」飯だこや雛のあたまたに七句ざりひなのもとより小さきものにて後世ま
 でもまかありし七八寸或の一尺にもこゆるなどいといと近き風俗なり五元集雛やそも恭ば
 んにたてしまろかだけ「折菓子や井筒になりてひなのたけ温故集」超波が句に「落雁にのま
 れてみゆる雛かなその小き
 いへりいま古今ひない寛政年中江戸にて原舟月と云ふ者製し出て世に行
 はる

享保六年壬七月十九日先頃御觸人形裝束之儀上方へ仕入申遣候處不得止之儀有之由申越
 に付越前守様へ伺候へば右裝束之儀向後御觸之通り八寸より上拵へ不申并金入純子之裝
 束させ候儀無用可仕候人形問屋共書付持參候事

又むかし雛遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひす飯も汁も蛤の貝に盛て備へけるとぞ
 不角が簗絨輪に「雛に世話局もおもき尻あげて欠伸て棄る蛤の壳寶角といふ句あり配膳の
 老女をいふなるべし又「柳樽五編」蛤であげるが娘氣にいらざりの刻なり明和七年
 寶曆二年「都老子」近年

雛の調度

繪櫃

の雛配膳の調度など殊の外美をつくし金銀を鏤めなどする事となりぬ然れども貧賤の家に蛤の貝殻に飲食を盛て供するも又多しといへり今その殻をば用ひざれども必蛤を備ふることこれによりてなり但し高貴のあたりは格別のことさらでも都下に木地の五器などありしなり〔都老子〕に近年美を盡すといへれば寛保延享のころなどおもふへけれどさにいあらじ寛文七年町觸商賣の雛の道具結構に不仕かろく可致事これ作り置て售ふをいふなり然らば早くよろしき家などこれを買ふて用ひし事とみゆ

又繪櫃といふもの有り〔俳諧五節句〕貞享桃の繪櫃同柳木地櫃に桃柳を繪く櫃の内に草の餅に赤飯も入る御臺ダイカイといふもの添是に繪なしたつば五器是なり木地の挽物に繪あり〔土佐日記〕に二月十六日ようさつかた都へのぼるついでにみれば山崎の小櫃の繪もまかりのおほちのかたもかはらざりけり賣人の心をぞ知らぬといふなる〔土佐日記〕の文の貫之ぬし任國にて幼女をうしなひし歎きの意前文に往々ものかはらねども幼きものうせたりと思ひ出らるゝ我心の商人の知らじと云なるべしこれ小兒のもてあそぶ物なればなり又九月九日條菊繪櫃一つの形三月節句に同じ繪に菊を書なり内に栗も赤飯も入て御臺匙おつば有り又自序の中に袴きぬ浦の蟹の桃柳の繪櫃をみずとあれば田舎にへ行わたらずとみゆ其圖をみるに櫃の形圓長くいはゆる飯びつ形とて蓋の横長のすみきり角なり丸き曲物のかぶせ蓋なるに繪も櫻と菊をかきたるの後の製にて春秋二節を兼たる繪なり浦人の見ずといひしも都にのなくなりて田舎にのこれる處も有にや〔諸國奇遊談〕に繪櫃のことをいひて今も洛北

の村里に三月節句にの必用ふ予が幼き頃まで都にても用ひし故二月の末に賣ありきしに今の絶て見あたらす今圖する遠國また洛北の今の姿をもあるすとてかぶせ蓋の丸き櫃に菊櫻の花をかきたる圖を出せり此冊子寛政の末の撰にて幼き頃といひしに實曆頃にもやあらむ大かた其頃いするのしき膳出來ていつのなくなりしなり繪櫃大小寸法不定おつば大小あり

〔滑稽太平記〕ひなや立圃が傳に寛永十六年より祇園會兩度の山鉾練ものまでをひな人形に作り金銀を鏤め綾錦を飾り大造の膳を以て首尾し明る十七年に武江に持參しけるに心當ちがひてすべきやうなく引放しつゝ拂けり又宗門の大乗寺へも納め殘る處明る十八年正月廿九日の火災に滅す云々

ちぎびつ

あまさけ

〔以呂芝居〕享保三といふ草子にひなさまに出します一升櫃の底はどな小判と云り其頃までの皆横長の櫃のみなり此繪ひつ江戸にの九月芝の神明祭禮にちぎびつとて飴を入て賣繪に藤の花をかけるの三月にもあらすおもふに柳と桃との繪の轉じたるやうなれどさにあらず此繪八朔の餅による下にみゆ又此祭禮に生姜をうり氏子の家に醴と酢を作る生姜を此月用ること〔昔々物語〕に端午の粽九月の生姜を臺に載て取替す是等の祝儀の取かはし近き頃の見えすと享保十七年にかく云り又〔同物語〕に三月の草餅をひなの行器に入れ醴を錫に入れて親類へ遣す事ありと云りそのかみ今の白酒ありしかと又あまさけも用ひし故に飯倉神明祭にこれを作るも後の雛に用ひしものなればなり

〔雍州府志〕甘さけみえず土産門上白醴酒今處々にて是を製すし筑前博多の練酒に倣てかもす酒店の製さあ

白酒

れば今の中波又井ひて山川酒六條油小路酒店にて醸す山間水多く白して濁る此酒その色に似て甘美なり因て名く夏日造之とあるは白酒なるべし今も山川酒といへり〔社記〕云人皇廿九代宣化天皇御宇諸國郡縣に屯倉を設て洪旱を救給ふその穀倉ありし故に民俗飯倉領と號す是に依て土民此所にして飯を扱ふ器を専ら製す臼杵木鉢餅器等なりチ器の古へ藤葛にてあみ餅を盛によりて餅器の上階なりと云々この説非なりちぎと呼の社に用ひしちぎの餘木と云へる意なり〔宣胤卿記〕文龜二年正月廿五日内裏御月次和歌御會云々賜入麴天酒等甘きけな〔御傘〕にひとよ酒夏なり夜分にあらず夜字に句嫌なり醜字を書故なり六月朔日より七月廿日まで日毎に奉ると〔公事根元〕に見ゆ

生姜市

昔の俳諧にひなのかんなべ見えたれば早く白酒を用ひしなるへし生姜市の〔貞享江戸鹿子〕に九月十六日芝神明祭詣志やうがうす其外諸色市立なりとあれば久しきこと、みゆ俗に目くされ生姜とて此市にの目のたゞれなせしたる者の售るを求む〔鞞隨筆〕に拾芥抄食禁物部に三月五辛を食はず九月生姜を食はずとありあさつき鱈の鱒供にさだまり芝神明の生姜祭り食品にあらざして何ぞといへりげに〔本草〕に孫思邈云八九月多食薑至春多患眼と云々孕婦食之令兒盈指あり目くされ生姜のこの儀にのよるべからずその辛味つよく目にまむの意なりこれを相贈ること其時肥たる節物なればなり其うへ古諺あり〔貞徳百韻〕に生姜手が三へきと筆にかすませて其自注に手がはしかみならば生姜三ぎきと云ふ俗語と記せり諺の意を押して考るに盈指生姜にておもふやうに物かゝれぬ手のわるきなり三へきの音信なるべし生姜の指の事よりいひ三片のすこしばかりを云心ざし松の葉といへるごと

く生姜三片といひたることより音信とりかひしもまたるもの歟こゝに用なき事なれ共次に云ふさて繪びつまた繪行器ともいへり延寶八年〔洛陽集〕に入朔繪行器や今こそ秋よ藤の森眠松繪はかゝるや東からけの後紐可致繪はかゝるや後の灯心入となる花を自悦ねもふに藤森の句の其邊にて賣たるにや今こそこの用ひらるゝ時をいふ

〔日次記事〕に入朔に乳母のもとより養ひ君へ行器に柿と藤花とて白糸餅に赤小豆付てその花の形またるを人て贈るとあり故に藤の森をいへり東からげの後紐とい藤花を畫きたるさまをなぞらへたるなり形状を面白く見たてたり此ことにのよらねども〔篋絨輪〕に山形ありく端折□□と云る句あり灯心入となる花をとい後の外に用るやうなく燈草など入るべし藤の花房を畫き又白糸餅を藤の花とて入る事おのづから灯心に似つかはしきを云なり彼ちぎびつに藤花ゑがけるの全くこれにて藤を假字もじにあし手がきに志たるもよしあるべし藤の花かぎの後京極殿より始れりとぞ〔京羽二重〕林鴻撰櫃の菊むしるの稚ごゝろ哉三竹これ九日節句なり〔若葉令第三〕歌仙尺艸上方の寺と竹にの負にけり葉ばかり底に残る繪行器これらゝの雜の句なり敷葉のかい敷のものなるべし

新井白石安積氏に答ふる書薑芽のこと捧心とも又歛手とも候へば此方の俗に手のはしかみ候と申如き手のわろきことと埒明候きハシカミのことの〔續博物志〕に妊妊者不可啖生薑生兒多指と候へばこれ枝指のことと見候餘り俗語にのあなたにても注脚に及ばぬと候〔風俗文選〕吾仲が飯餠銘に云ふ飯餅のいづれの時よりもてはやしけん此六條の名物にのい

飯餠

後の雛

紙雛
裝束雛

へりける今おほやけの奉りものにかぞふれば下さまの人の日を限りてもまつべしにして卵の花さくころの此ものけしきも清からんに藤の花のさく時にそれが節をあはせたらんいかなる人のふかき心か侍りけん是にて二季草の名も世の人のいふべし器物の杉の香もつけたる折にいて此花をかざしにも又の文など付てやるべしかくことくまきやうなれとすべて上さまのもてあそびものなり醒齋云ふ斯の如くあれば彼ちきびつのもと鮪をいり器にて藤の花を畫くのかざしの意なること明らかし生姜を賣も鮪にそへて食ふものなればなるべし〔雍州府志七〕飯餅六條人家製之云々〔後盛磁器〕温冷酒加生姜葉一而食之夏日珍味也云々〔西本願寺門主待藤花開而與飯餅被獻禁中院中〕

後の雛〔滑稽雜談〕〔正徳三〕今また九月九日に賞する兒女多し俳諧是を名付て後の雛とすといへり前に引る〔俳諧五節句〕九月九日菊の繪櫃御臺魁おつばある事三月節句にはしき由のみ有し雛のこといはずこれの眞享戊辰重九の日とあれば元祿元年なり此ころ雛を賞すること餘りに今めかしく記すべき程にもあらずとみゆさりながら飯匙五器もある雛の具にあらず何ぞや漸く多くなりし其後の事なるべし〔續五元集〕穴いちに塵打はらひ草枕ひなかさりていせの八朔又〔入子枕〕〔正徳元〕二季のひなまつり今も京難波にの後の雛あるよしなれば三月の如くなべてもてあつかふにあらざるとなむ播州室などに八朔に雛を立るとぞ是又彼繪行器を用る事の似たるより移れるか

今の紙雛といふ者寛永頃の繪にみゆこれ小兒平日の手遊なり又古き裝束雛の今の次郎左衛

江戸雛

土焼の雛

奈良人形

衣裳人形

押繪

門雛の體に似て男雛の大刀なく女ひな天冠なし衣服の體のかはれ共眞享元祿頃のも其如くなりおもふに江戸ひなど稱するもの享保已後の製なるべし〔新野問答〕鳥頸劍の條に云ふ今世にも小兒の所翫俗に裝束ひなど申候人形の劍皆柄首鳥頸に候云々

奈良の在所帶解といふ處に土焼の雛あり〔此所土焼七福神人馬等さまあり其家五六軒ばかりなりとぞ其國の人に尋ねしに今土人形作る處は南都より八木街道なりといへり〕この土雛古きも有べけれど予が見し男雛太刀を帶女雛天冠をきて共に臺あり高さ六寸五分許ありき古風にあらざ又奈良人形木ぼりに彩色をたるの古きもの有り好事の者提もの根付に用ひし故大かた緒ををす穴あきたり男女の體雛屋立間などが繪のさまに似たり菱川師宣出て人形の體りの繪を摸せり〔誰袖海〕元祿と云ふ冊子に菱氏か筆の品面顔うつす姿繪のどうもいはれぬいはした口なし色に染なせるきむくひむくの衣裳人形といへり〔以呂芝居〕〔正徳〕草子といふ物に菱川がことをいひて人形を作るにも又上手にて去かたより御望に役者共の姿を手づから刻み舞臺衣裳其儘に彩色さし上るといへるの非なるべし上に引る冊子の趣をもて誤りて手づから彫たりとする歟衣裳の絹布にて作れる故に衣裳人形といふ彩色にきたりといふ奈良人形のやうなるにや望のもの有て作りし事あり共その必下繪をかき上彩色をたるにて彫刻の他人にさせたるにこそ又衣裳人形と云に今の押繪なるあり〔人倫訓蒙圖彙〕に衣裳人形の諸の織物もて繪を切抜これをつくる云々又〔同草子〕に紙ひな裝束ひなあり紙ひな紙をもて頭を造るとあればむかしの紙雛今よりも質素なりまた押繪ならぬをも衣裳人形といへり〔雍州府志〕衣裳人形木偶人作男女老少形施衣裳其小者

子なき女の
人形を
愛す

さいや
なるもの

謂芥子人形云々あるハ木彫人形に絹布を着せたるなり

世に子なき女の人形を愛する者あり子をほしく思ふ餘りなり漢土にもこれあり〔板橋雜記〕
に願眉生、既屬蕤芝籠、百計求、刷、而卒無子、甚至彫異香木爲男、四肢俱動、錦繡細襪、願乳
母開懷哺之、保母褰襟作便溺狀、内外通稱、小相、蕤亦不之禁也、時與以奉富寓、湖上、枕人目
爲入妖、

さいやかなるもの〔述異記〕に〔高江雜村記〕直大内、見三異物焉、一小金盒大寸有六分、内貯
彫刻牙器百種、如凡榻舟車盤匣筆研投壺碁局絃管升斗算子之屬、具體而微、不受手指、用金
錘鉗而觀之、其一鏤象爲球、周身百孔、凡九層、亦有七層五層者、以金簪自孔中揆之、圓轉
活動層々相似、又皆刮磨光澤、中藏骸子一枚、金碧粲然、其外潔白無縫、非有湊合粘連之迹、名
鬼工珠、其一酒杯二十有四、由大及小、如宰塔波、高二寸許、鏤木爲之、質黃色有木理、薄如紙
柔軟而輕、噓氣輒可飛動、然可注酒、三者精巧絕倫、雖有離婁公輸、亦不能施其心目、不知
當時何以搜剔而成、守者曰、此自外國、航海來貢云、皆鬼工所作とあり精麗ハ異なれども相州
宮根の湯もと細工に似たる物なり至巧たぐひなしといへども眞に無用の長物なるへし

獨樂ふせうこま、はいたこま、はいこま、
ちたんほう、たうこま、木ばち廻し、

紙鴛うな

鞞うな

いしなとり

きさご大小はじき

獨樂

〔和名抄〕獨樂和名古末都玖利有孔者也とみゆ〔今昔物語〕大江定基出家語の内寂照が前なる
鉢俄に狗鷓の如くくるくと轉て前の鉢ともよりも疾く飛行て僧供を請て返りぬ又東山佛
眼寺仁照阿闍梨房詫天狗女來語の内に其時に女二間許投げ被伏ぬ二の肱を捧て天縛に懸

て轉べること獨樂を廻すが如し暫計有て音を雲井の如して叫ぶ云々〔和名抄古本〕に都无求
里此間云古万豆久利とある 十二字を獨樂の下に分注せる〔今昔物語〕に狗鷓とあるハこま
つふりと訓べし〔和名抄〕に鷓の注に漢語抄云都布利とあればなり鷓ハ〔戰國策〕に鷓蚌相持とある
ものにして今まきさいふ俗に鷓
字を用る是なり其種類いさどし又鷓鷓今ハカイツフリ
ムクツチャウなと呼り〔和名抄〕にこれニホさいへり 然らば獨樂をツムクリともコマツクリとも又コ
マツフリともさましくに稱へしなりそをはぶきてコマといふ〔字類抄〕又諸の往來等の書に

獨樂の名みえたり

〔太平記廿八〕長講堂の大庭に獨樂を廻て遊ひける童云々〔寛永發句帳〕慶友が句に「日にまふ
や狗のわたりの瓜茄子茄子なごの枯るを舞さいなど俳諧にもまた多かるべし〔諸藝太平記〕にく
るゝとめぐるごと九州の曲獨樂とても是ほどにあらじ云々其磧が〔色三味線〕に頃日九
州より獨樂廻しの少人のぼりて四條河原の小芝居にてさまたまの曲こまをまひし數萬の人
を取て歴々の大芝居をすからせけるが猶さかりになりて町々にこのこまをもとめて家々に
翫びし後の狗五ツ六ツ或ハ十廿買もとめてあるを押ならし一町に貳百ツ、とつもりて狗一
ツ十二文ツ、にして此代貳貫五百文凡京中三千町狗の錢高七千五百貫銀になをして百五貫
目餘なり云々

按るに江戸に來りしハ初太郎を學べるかげまなるへし〔元祿十四年日記〕十一月九日堺町狗
廻し金之助方々へ參候儀無用之由被仰付其節狗廻し候様と有之見物申候元祿十四年巳十
一月十一日町觸頭日はやり候こま堺町木挽町見物所にてハ格別其外こま廻し候者の分屋敷

方へ遣し候儀令停止候尤商賣にも一切仕間敷候若於相背者可爲曲事候已上又町中連印手形之文上畧こま廻し候者之分遣し置町中にてこま廻し候歟又こま商賣仕候もの御座候は、何様之曲事にも可被仰付候爲後日町中連判之手形差上申候仍如件已十一月十一日とあり

宮川町の子供屋の主不器用で隙日の多い若衆におなじ慰ならばこまはしこそおもしろけれと親方ゆるして黒塗の狛をかふてあてがひける下地螺まはしの手き、なれば其格をもつて早速上手になりて初太郎も耻るはどなりしかば諸方より招きてはさゝの太夫子より格別はやりて其名高しとあり

古末といふのも高麗より渡りしものなるにや都玖利の都无求里の略と聞ゆツムリハツツリにて是又略語なり粒粟の義か今物の矮短なる貌をツングリと云も同義なるべし

はかた狛
ふせうこ
ま

今のはかた狛といふの九州よりはやり出たればなりこまに種々あり獨樂と陀螺といふ音同し陀螺といふのふせうこまなり〔尤雙紙〕慶長年中の草子めくる物の中た、けばめぐるふせうこまと有りまた〔鷹筑波集〕れもひまはせばみなねなし事前句に打た、けばいくつ有てもふせうこま〔堀河百首、頭狂歌合〕に池田正式「冬の内のふせう氣にしも見えつるかうたねとおどりまはる春駒その判に云ふせうこまを春駒に引まはされたり云々是今のばいこまなりばいの介殼に鉛をどかし少し許つぎこみぬれば介の尖りたる所に入りて重くなる故まふに勢ひすぐれてまばらくまふ小兒これをまはして勝負をいとむ先薦をしき二人ともにはいをそのうへに

ばいこま

ぢたんぼ
う

たうこま

はんごう
ごま
坊主こま

はすに當りあひて勢ひ強きいよはきをばしき出す〔本草啓蒙〕にこれをばい〔一代男五〕よい年をしてばいまはし云々又西鶴が〔大鑑〕に是も秋の末より螺つくはやらし云々ありつくこいふこまツ古名の遺〔冬〕の戯と見ゆ〔帝京景物略〕に楊柳兒活抽陀螺とあると時候異なり陀螺と漢土に云も螺をまはしたるにこそ今のばいこまの木にて作れり寛延寶曆の頃までも介殼にてありしと見えてその頃の繪に見ゆまはす紐のはかたこまの緒のごとしこれにてこま、ひ終らむとする時打た、くに不便なるべし今の作り革を細く截て短き竹のさきにつなぎたり越谷より日光山のわたりにておたむぼうといふ其形尖りたる處いさ、かくびれて木口に穴をほらす紐と竹に付たること同ぢたんぼうといふ地踏々房なるべし地踏々の俗におだんだんだふむといへる是なり房の例の人に准へていへること常に多し又漢土空鐘といふものいたうこまなり〔續山井〕寛文七年たうこまの花のうなるやあぶのこえ重利その聲と鳴る故江戸の小兒いどんくこまといふ安齋云蟻目の音の小兒の弄ぶたうこまとて竹にて作り候これと同し音にて候漢土に惜千々といふ物のこれ今のはかたこまなるべし〔長崎歳時記〕たうこま象こまといへり其ひき象のうなるにたどふといへども象の聲あるものすくなし又同書にふせうこまを鞭こまといへりこれも打物の形唐畫にかける馬のむちに似たるにや又同じ類にはんどうこま坊主こまと云へるあり是の博多こまの如く緒を巻てまはすとぞ其圖をみるにはんどうこまの水かめの形に似たる故の名歟其故の同書方言の中に水甕をはんどうかめとあり又坊主こまの上圓くして凹に下のはそく尖りたり

木ばちまはし
はし
りいこのぼ

木ばちまはし相州津久井縣にて正月兒童女木ばちの中に小錢をまはしてまひ止たる時又次の者錢を出してまはしてこま止たる時先の錢に少しにても重りたるハ勝にてその錢を取もし重ならざれば先者に負を取らるゝなり錢こま後の手車の條にいふいかのぼり〔和名抄〕に辨色立成云紙老鴟世間云以紙爲鴟形乘風能飛一云紙鳶とあれば古の音にて紙老鴟と呼びしにてもこの物にあらぬにやいかのぼりの畿内にての名なり明曆二年丙申正月六日跡々より御法度被仰付候通町中にて子供たこのぼり堅あげさせ申間敷候尤商賣にも拵申間敷候

た

關東にてたこと云ふ〔物類稱呼〕云西國にてたつ又ふうりう唐津にてたこと云長崎にてはたと云ふ上野及信州にてたかといふ奥州にててんぐばたといふ何れも雅名にはあらず長崎の西川求林齋が〔町人箋四〕今日本のいかのぼりの廣く大きく作り弓をつけて空に鳴ひくをよしとす云々古のいかのぼりの鳥賊の形に小さく作りて麻の糸をつけ長閑なる春の日風ふくとなけれども陽氣につれて二三丈ばかりに揚て小兒にひかして悦ばしむ云々けにも古畫にみえたる紙鳶小くして鳥賊の形またり

からすだ

今も一種すがたことて鳥を作る故からすだことも云ふ其外諸鳥の彩色またるもあり管系にてたこの數多くつなぎて一すぢのすが糸にてあぐるものあり此物江戸なごに春の戲とすれ共諸國他時に弄ぶところ多し〔志保之理〕に三州吉田より遠州見付のあたりまで五月五日家々大なる紙鳶を作りてあげ端午の遊とす大さ一丈餘方費銀百四十匁まづ四月の末より試

うなり

にあげて端午各家廣き處或ハ河原へ出て美を争ふ所の男女集り見て酒肴を備し終日遊ぶこといと賑なり

〔夏山雜談〕に大坂なごにてハ五六月西國邊ハ七八月兒童のもてあそぶなりといへり〔入子枕〕と云冊子海川忠兵衛折から紙鳶イカボリ世上にはやり前文に衣きかへるさまく朝日卯花垣根に咲氣をつくしたるおもひ付三井富山をさばがしきれくをあつめ石たみハ上町の屋敷かたひぢりめんの達摩の中島の苦なし仲間もみの盃ハ天滿の蝸組白綸子のたか袖ハ新地の色茶屋鬼のかいなハ渡邊節鳥いハ阿波座ぼり封じ文ハ新町の情盛りハ紙鳶百羽雀ハ竹田さハいがらハ嵐三郎四郎おやまいハ上村吉彌大黒ハいづくの寺のいかなるべき龜やが方にも客かたよりあづかり置し孔雀いハ御馳走にと上手をえらみ町代の半兵衛にのぼせさせると見えたり虚文ながら此物の流行たること是より先西鶴が〔二代男〕にも難波風の暮々鳥賊幟のはやりてさまざまの作りもの雲にかけ橋のたよるといへるにても知べし俳諧にハ〔鷹筑波集〕寛永十五年貞徳撰「かみなりのなるに天氣のあがる空とあるにいかのぼりこそ風にふかるれ長次今のうなりといふもの付たるにや漢土に風箏といふものうなりなり〔續山井〕いかのぼり木にかゝりければ〔魚や木にのぼりのいかの糸ざくら道安〕〔江戸三吟〕物の名のとこや古郷のいかのぼり信徳〔蓑絨輪〕水を汲袖風ぬれん御茶の水殿のかたくま守りの一角利角今小兒めんくふといふハ水汲ことながら語ハ舞狂ヒョウケン轉訛なるべし

〔咏物詩選〕風箏唐司空曙が詩に松泉鹿門夜笙鶴洛濱朝また唐高駢が詩に夜靜絃聲響碧空宮

商信任往來風、後世これを紙鳶とするハ非なりといへり〔楊升庵集五十七〕古人殿閣簷椽間有風琴風箏、皆因風動成音、自諧宮商、又云、王半山有風琴詩云、風鉄相敲同可鳴、此乃簷下鉄馬也、今名紙鳶、曰風箏、非也といへりこれ風鈴の類なり唐人の咏する物是なるべし響碧空などいへるを思ふに風幡に鳴器を付たるにやこゝに風みと云ふ今この製ハ其物の向ふ方を見て風を知るのみ音を聞かざるをせず

〔長崎歳時記〕二月條此月より四月八日まで市中にて風を放ち樂む快晴の日の金比羅山などへ行厨を携へてこれ放つ風巾の製一ならずばらもん舞舞箏ばらもん入道はた奴はた百足ばた蝶ばた障子ばた日本ばたわこばたかははらばたとんぼらばた桐に鳳皇海老尻天下太平天一天上大吉等の文字を作るもあり又つるはかしと云事あり硝子を細末にして糊にし是を芋よまに引つけ日に乾し風巾にかけて放つ硝子よまと云ふ手元の常の芋よま也互にこれを以て町をへだて谷をさかひて相かくる術の工拙ありよまとよまとすれあひ遂にきれ行を負とす又十日金比羅祭禮參詣群集す麓の廣野に毛せんをまきへんとう携へ大人小兒風をかけて勝負を争ふ此日市中のはた屋其野中に假店をまつらひ硝子よまはたを商ふ人々これが爲に數百錢を費すといへり其風の圖を見るにばらもんと稱するものいもと蠻製と見ゆまたさも思はれぬかははらばたなども同じものと見えて出島内の黒坊ども是を造りて海をへだて市中の者どつるはかすことありといへりはかしと云ハ奪ひ合ことなり其唐製のさまなる風も見えたり崎陽の俗多く家業に怠り浮靡の樂のみ専らとす因て此樂より爭論をなし

つるはか
し
硝子よま

互に疵を蒙り又ハ田畑を踏あらしまハ公に訴出る事などあり他邦になき處古來よりの土風となむ無益いはん方なしといへり

〔廣東新語九〕南海之佛山、歲九月十日爲放鶴會、先期主者懸式于鶴場、鶴皆以白楚紙爲之、凡兩翼一竿一弓、翼廣一尺、以平爲上、竿長三斤弓二尺、絃以竹根片或銅片、以薄爲上、主者察之、俟以印、放日主者立一竿於地、長二丈、人十人爲耦、離竿二丈、約之曰、毋過竿、毋不及竿、出大竿復出小竿、如是者賞約、已依次而度鶴、出於竿末、則以綿之直上者爲上、線已直上、則竿中更吐一竿、高至三丈、又以線之直出於三丈之末者爲上、線已直出於三丈之末、又以縷之聲清和中節而其態廻翔合度者爲上、この小兒の翫ぶにあらざり弓のうなりなりその絃竹また銅にて作れるのこゝにてもまゝこれを用ふれ共大かたハ鯨鯨を用ゆ昔のいいかありけんおもふにもと漢土の製に倣へるものにや〔類柑子〕に元ゆひこく音をいふに唐人風巾の雲に吼て春色をもよほす響もありとあればうなり付たるを唐人だこと云ふにこそ

〔賤緒手卷〕に延享寛延の頃風を上るにさまゝの物すきをして尤大風をあげたりハツ花形九曜の星蟻蛭などの形の風をよくこしらへて家々にあげたり畢竟ハ大人の慰にて子供の所作にていなしといへり予が幼かりし頃までハ大なる風に切ぬき風として種々に作り其間を切ぬき透したる細工風またからくり風として傀儡師など作りたるハ箱の人形かはり舟辨慶のさまあらはる又何の風にてもよくあげまた小く風のやうにこしらへたるものありてのぼせたる風の糸にとをし糸をまやくり上げれば風の糸めの處まで上り行なり是を猿をやるといふた

切ぬき風
からくり
猿をやる

とへば頼光など作りたる風にと土蛛をさるとし上行盡たる時急に糸を引て風をどんと響かすれば頼光の太刀抜て蛛を切るが如く蛛より血の如く赤き紙垂れ又細に截たる赤紙飛出るなどする類なり竹また鯨を用ひて機撥を作れり

鞦韆

白杵

ツクマイ

いしなご

○鞦韆〔和名抄〕鞦韆和名由佐波利もと北狄輕趨の態を習ふ伎なるを後中國に傳り専ら女子これを戲とするよし〔事物紀原〕等にいへり和名ゆさはりのゆれる義にてゆすふるといふ是なり但こゝに田舎などにする事もありそれも女子の戲にあらざ漢土にいはれは風流の事とす〔中山傳信錄〕に女子於歲初皆擊毬爲戲又有板舞戲横巨板於木槽上兩頭下空三尺許二女對立板上一起一落就勢躍起五六尺許不傾跌敬側也といへり江戸などには小兒ことさらのあそびにあらねどもかやうのことすることあり是を白杵と云なり〔房總志料〕に夷隅郡萬木城の麓に妙見の社あり秋社に鞦韆の戲あり〔太平記〕の頃の古俗を傳へしとみゆ其名をツクマイと云名義未詳といへりツクマイハ突舞なるべし江戸などにも兒童二人にて一木を踏あふりて白杵といひて遊ぶ事あり〔六玉川二篇〕ゆさはりに小僧をのせてあやまらせなごいへり

いしなご、ろありあゆかせてとれ〔山家集〕石なごの玉の落くる程なきに過る月日のかはりやはする〔散木奇歌集〕いせの齋宮に侍るころいしなごりの石合といふ事せさせ給ひけるにちいさき草子のいしなごりの石の大きなるをつくりて十の石にひとつ、かき侍りけるとありて歌十首あり其歌〔金葉集〕に一首入「くもりなくとよかさのぼる朝日に君ぞつかへん萬代までも〔和訓栞〕に法隆寺の寶物にいしなごりの玉あり小兒の語に小石をいしなごいふ伊勢に石名原あり奥州に石名坂ありといへりいしなごりの今いふ手玉なるべし〔瑤囊抄〕に石拵子イシノケをいしなごこと訓り拵ノケハ字書に摸也とありて義のかなへるやうなれ共其字面何に出たるか疑ふらく拵字の誤にや〔帝京景物略〕に正月元旦是月也、女婦問手玉五丸、且擲且拾且承、曰「拵子兒丸、用象木錄礫爲之、以輕捷、とありこれ手玉なるべし〔物類稱呼〕石投江戸にて手玉といひ東國にて石なんご又なつこと云ふ信州輕井澤邊にてはんねいはなご云ひ出羽にてだま越前にてなつこと伊勢にてをのせ中國及薩摩にて石なごといふといへり〔房總志料〕上總附録の内に長柄山邊二郡の海錦砂子を産す女兒輩イシナゴといへるものなり又ナンゴといふ其最小なるを市原望陀の海に産す其名をキサゴといふ土人採て稻田の糞とすなごみゆ大なるをいしなご小きをなごをいふにや

小

きさごハ〔鶴岡職人歌合〕蒔繪師「月かげにみぎはのきさごかきよせてこゝにまき繪のはこ崎の松と有きさごに大小二種あり大和本草にチシヤコ小螺なり殼薄し赤白の紋あり云々小兒其からをつらぬきあつめて玩とす殼薄しさいへる、非なり堅厚にして斑なし小斑文あり大灰色にて斑なし

部白菟〔集解〕に根形似扁螺といへり白菟根はさきさきに似たるものなければ此扁螺さきさきなること明らかなり京師にてせ、介と云ふ小兒是を貫き翫ふといへり近江にてせ介と云ひ膳所貝にて蜆をいふ是なり せ、貝と云ふ錢貝の意なり江戸にていだんべいさきさきと云だんべいのもと石つむ舟をいふ〔風俗文選〕李由段平に大石を積平の耕作のたすけなりとあり段平といふ舟の平たぐ堅厚に作れるをねもひよせて貝の名に負せたるにこそこのきさきの大なるを今の手玉にもとれども古への小石を用ひしなり此介をいしなごとも云ふこの戯事よりうつれるなり又童戯に舌尖にきさきを吸付ること有り〔屠龍工隨筆〕にシタ、ミのキサゴのことなり此貝を舌のさきに吸つくれば舌のだみて物いはれぬ故に名けたりといへる説わろし神武天皇御歌に大石に八重匍纏へる小螺子と讀せ給へりし石なりタ、ミの重なるをいふ今又一種石だゝみと云ふ介あり是の紋理の石たゝみに似たるなり〔入子枕〕の正徳元年の梓行なりマ、こと石なごなどにもむすめらしくと云へることあり此ごらまでも手玉とるといはいはざりしにや手玉とるにてつといふこと相撲の條にあり

はじきといふの小さきさを玩ぶもといしはじき軍器の名なり〔和名抄〕に濬音繪和名以建大木置石其上發機以投敵也とあり地石をもはじきと訓り前のつふての條に出す小兒のはじきも石もてゑたるにや〔正章獨吟千句〕あてなるがせよと仰ある放會縮字誤て二といへり西鶴が〔二代男〕に藻屑の下のさゝれ貝の浦めづらかに手づから玉拾ふ業してまゝことこのむかしを今にはじきといふなごして遊びぬ真皇元年の版なり貝をも其處により有に任せて用ひしなるへし今江戸にていささごは

ふたつみ

はじき

きさきにはしきのツマヤツ

ごうくめぐり

じきといふも昔よりの名にてあるべし海近き處の貝類多くあればなり

〔怡顔齋介品〕にきさご肥前にて猫貝と云〔長崎歳時記〕に猫貝を小兒玩ぶことを云て其法のせはじきと云の貝を握り手の甲にうけ又手心にうけ握り取疊の上にもちりたる餘り貝の一々はじき取て勝負を決す十五握と云の各々貝二十を出し合せ順々目を塞ぎ面をそむけて數十五をつかみ取るを勝とすとのみと云の各々目印ある貝一ツ、出し合せそれを掌にてふり出し餘り貝の俯せ一貝仰ぐものを勝とす

きさごはしきにツマと云のツマツクの略ヤツといふのやつあたりなりきさごをかぞふるにちうじくたこのくはへが十てうと云ふちうじの重二なりそれを重ねれば八ツとなる章魚の足の數なり是に又二ツ加へて十となるをいふ

ごうくめぐりまはりの小佛、一の膳 首かたかれいたいけ ありもち の、十 三七ツ 尼がべに 木登り 土なぶり 小家を作る 猫廻し

童のごうくめぐりの行道めぐりなり行道の佛家にする事なり古のたゞめぐりとのみいひしとみゆ〔榮華の華〕年十二三までの小法師にねぶつのさまうつし云々頭の鼻をぬりかほのべにまろきものをつけたらんやうなり云々小き地藏井のかくやおはすらんと見え又あまがつなごのものいひうごくとも見ゆ又ちごどものめぐりするとも見えたりとあり〔源氏傳〕又〔山家集〕にまんだらしの行道ごらへのぼるのよの大事にて手をたてたるやうなり大師の御經かきてうつませおはしましけると申傳へたりめぐり行道すべきやうにだんも二重に

つきまはされたり登るはどのあやうさことに大事なりかまへてはひまはりつきてめぐりあはむことの契ぞたのもしきさびしき山のちかひみるにもトヨカケリ「源氏櫛」に志はず十日ばかり中宮藤つほの御入講なり云々又の日の院の御れう五卷の日なれば云々みこたちもさまぐの棒物、はうもちさくけてめぐり給ふ細流に五卷の日の第三日也薪の行道ある日なり又明石卷にあかしの入道源氏にわかれたる處に月夜にて行道する物のやり水にたふれ入にけり細流に物字に心なし行道すればなり又鈴虫卷講師まうのぼりきやうだうの人々参りつど給に提婆品を講するなり採薪及糞跡、隨時恭敬提婆品にあり八講、五日十座なり五卷の日さいふ、中日にて給の行道あり行其井の「法花神を我えしこま、薪より菜のみ水くみつかへてそえしさいふ歌を聲明にして行道あるなり手桶に花を入六位織人などになひて主上の御行道のさ御法卷薪こるさんたんの聲云々藥師琉璃光來本願功德經、書夜六時禮拜行道供養彼世尊琉璃光如來また阿彌陀經に飯食經行とある經行も行道なり拾芥抄齋月條正五九月云々或此月々上十五日可持戒齋、行道慈覺大師廻り給ふ時正月一日二月八日十二月七日とありまた舞の雙紙景清に折ふし頼朝の六はら御所にてえんぎやうだうしてましくけるなどみゆもと是より出たる童戯かまたおのづからこれに似たるものかその知べからぬともだうだうめぐりといふ名の行道めぐりにぞ有べき正章獨吟千句小人どもの袖のあつまり手車の果ての後のとゞめぐり廣々とした辻堂の内雜兵もの語「屠龍工隨筆」に一の膳いやく二のせんいやくといふより段々かぞへて十の膳までいひ立る童部のごとくさのたはひなきよりいふにて膳府の本膳二ノ膳三ノ膳までなると思ひしに甲陽軍鑑の料理のことを書たる圖に誠に十の膳ありしなりといへ

一の膳いやく

り此こと今一種に粟の餅もいやく米の餅もいやくそば切素麩食たいなど云つゝとゞめぐりするなり

〔雜兵物語〕作者をまらび挾箱持の條によその挾箱持めが人込にだいたうめぐりをして挾箱をぶち破た云々有りこれいとゞめぐりをよこなまらしか

〔南海寄歸傳〕五天之地、道俗多作徑行、直去直來唯遊一路、隨時適性、勿居閑處、一則疾病、二能銷食、禺中日映即行時也、或出寺長引、或於廊下徐行云々、故鷲山覺樹之下、鹿苑王城之内、及餘聖跡、皆有世尊徑行之基耳云々、若其右繞佛殿、旋遊制底、別爲生福本、欲虔恭徑行、乃是銷散之儀、意在養身療病、舊云行道、或云徑行、則二事總包、無分涇渭、制底ハ軍略波ナリ

まはりまはりの小佛

又一種まはりまはりの小佛といふことあり土御門安部泰邦卿寶曆十年庚辰正月東行話説に水口の宿はづれの橋をわたり云々小里今在家えもまればぬ處に惡七兵衛景清武藏坊辨慶が脊比石といふもの有り其由來を聞に昔辨慶この處にて晝飯を喰居たるに小兒打より遊びて中の中の小坊達のなせ脊が卑いぞという時辨慶がたけ此石と等しかりしとなり云々あり此また今いふ言と異なりたゞへは三人已上にて一人ハ立てゐるの外ハ手引あひ立たるものをかこみて旋りまはりぐる中なる者ハめぐらせ一廻してかこみ居る時中に立しものめぐりの者の首を何れより共心まかせに指先にて數ふるに線香抹香花まつこり櫛の花でおさまつたといふ其音の畢りにあたる者又前の如く中に立ッ人となれば中なるものめぐり入なり或云此戲輪藏に安ずる博大多童子を學べるなりといへり

又一休はなし寛文三、或人日蓮畫像の讚を望む處に、この畫のさても小くかきてうす黄なる衣をさせけるよと笑ひ法然の讚を所々なをしてなされつゝ奥にはうすく小ぼうず豆の粉

ほりすはうす

にぬりほらうすとぞおをばしけるとかやと有これも小兒の戯ことを書るなり〔阿宅松〕といふ芝居うた童戯を種々いへる内にほらうとく大坊主とある是なりこの文句今ハ葉ごしのく月のかけり今もほらうとく山芋などはやすなり

千艘萬艘

小兒體をゆすり千艘や萬艘やと云ひ舟にゆらるゝ學をなす正月十四日朝まだきに本所龜戸の里の童共小き船のひな形作りたるに幣を立て昇あまた打むれて市中を廻るに千艘萬艘お舟か參ると云家々にて錢を興ふれば幣一ツ代りとすこれ道祖神の祭りなり道祖の祭處々田舎にありて各異なれども船を用るゝなしこれ古へ道公法師が柴をもて小舟を作り道祖を送りし古事なと思ひ出らる必これによれるにもあらじ河邊の兒輩の自ら舟などを玩ぶなるべし〔南島雜話〕三宅島の條正月十四日渡船の其乗組水主の子供漁舟の組合の子供とむれを分其舟々のひな形を作り順を立て村中家別に持歩行これを稼初とすとありこれ似たることなり又是とい異なれど〔長崎歲時記〕に四月下旬より市中の男兒端午麓渡舟の學して町々を廻る二間程の竹を船に表し兒輩面に丹をぬり髪にたゝみ紙をはさみ又いぬ笠を着右の竹の左右に取付てセロウノ、ワタイと同音によびあかね木綿ののぼり或ハ五色の紙のぼり劔ばたに何町子供中と書たるを押し太とぞらをならし廻る他町の子供に行逢ば互にのぼりを出し合せ年齢ひとしき同士雙方より一人ツ、出で走りくらぶ是をハイロンと云ふ負方ののぼりを奪取と云りまことのはいろんに二ツせり三ツせりと云ことありせらうと云ハ此せりにてせり合はんと云也わたいといこれへ來よを云ふ方言と聞ゆ

ハイロン

かみかた

小兒のかみかたかれといふこと〔守武千句〕に「あふなきこともあらぬみちなりおさないやかみかたかれとたむけまし〔東海道名所記〕に四月十六日三井寺にせんだん講といふ事ありそれを俗に千團子といひならはし團子一千をつくりて持て參れば子どもの首かたしとかや申つたへし又猿樂の狂言に小兒をかなぼうしといへるも堅固を祝へる名なるべし

〔散木集〕連歌部におは空のなみだ法師となりけり云々あるハ今いふ法師の意小兒のことをいふなるべしかな法師の鉄のやうにて潤なく肉もなく疲發意と云ことなるべし先達の説に悴の子といふ義なしやせると云字なればやせかれの上略ならんとさればかな法師も同意なりと柳亭いへりされど入道きたる新發意といへども唯はちどのみいはず然らばはちと云ハ猶法師の急呼なり

かたこ

又かたこといふハ〔醒睡笑〕に女房の子を抱きたるをみて此子息のいくつと問へこれいことし生れかたこでおはりありと答けりこれハ一歳にいまだ足らぬをいふにて前の義にはあらす

いたいけ

いたいけハ痛氣なるべしいと愛む意の深きをいふなり〔沙石集三〕繼母あまりにうれしく思ていたいけきたる靴物取具して交をやりける〔守武千句〕玉くしげまたかたふたり明やらでこずゑ詠むるなりハいたいけ花ぶさをちぶさなりと思ふらむ、猿樂狂言に七ツになる子がいたいけな云々〔尤雙紙〕ひろき物みな人毎のこと草にいふおほぢの頭巾孫のきておやのくつはくいたいけさよ〔佐夜中山集〕に「けふ摘や七ツになる子がいたいけ菜池田正式が〔狂

も天を尼にとりなしたり按るに舞樂の安摩の面の繪やうの鼻の左右に丸き巴の如き紋あり
これあまのほなるへし「守武千句」いつか法師のうかび出ましまうくるも又せうくるもあま小舟
阿摩は女母の梵語なり又熊野比丘尼が色を賣ものとなりて紅粉にて粧ひ臉べ
これハ男子の出生ハなきて女子のみまうくるナにつけたるを尼がほといひけるにや是「鷹筑波集」に「おやにまかられ迷惑やする尼がほに
これハ女とあまを云へるこま古くありしなりつけたる紅粉をかひぬぐひなどあるをねもふべしこの小兒のされどまたるを親の叱りた
るナリ「安宅松」といふ歌舞伎歌に尼かべに付てと、やか、にいほうよといへるの此句など
 を意とまたりとみゆ

あま

又あまの前のあまがつの處にもいへる如く今も女のことをあまといへることありて女の頬
 紅とみても通ずべし昔の女のほへにさしたり此故に少女椿の葩を頬また額にも粘へ戯れあ
 り當時の妝を學べるなり不角が撰める「續清鮑」に「誰惚なまし椿はへべに云ふ句あり又
 同人撰「水馴棹」と云ふ集に「似合かと袖とめ前の茄子鐵漿と云付合の句もあり茄子の皮を
 口に含ではぐるめの學びすること今もあり似たる戯なり

又小兒の京橋中橋おまんがべにと云い今も女兒のてまり唄におん京々橋なん／＼中橋れつ
 や十六大ふり袖どうたふこれと同く江戸の中にも殊に繁華の處なれば女子の風俗もとりわ
 きて勝れたるをいふなるべしさればおまんがべにもうるはしきを處がらに付て云なりおま
 んとい天が紅の時なるを女子の名にとりていへり或説に中ばしにおまんいなりとてべにを
 供へて願がける社あり享保の頃はやれりといへり思ふに此いなりの名の童謡によりて人

木のぼりにや

木のぼり

木のぼり「枕雙紙」桃の木に童ののぼり枝をさる處黒きはかま着たるをのこ走りきてこふ
 にまてなぞいへば本のもとによりてひきゆるがすにあやうがりて猿のやうにかいつきてお
 るもおかし梅などのなりたる折もさやうにぞありし「類柑子」柿の木にあそぶ子共や蟹と猿
 自書「書紀神代卷」一書曰、門前有「好井、井上有「百枝杜樹、故彦火々出見尊跳昇其樹而立之
 ひなたぼこり「嘉多言」といふ書に慶安三ひなたぼかうといひ日南北向と書侍ると云へり然る
 をひなたぼくりなどいふいよろしからじといへり此説非なり「舊本今昔物語」に西京仕隠
 者出家語の中に日なた誇もせん若菜も摘なむ云々また「著聞集二十」ある田舎人京上して侍
 けるが宿にて天道ヒナタほこりして居たりけるに云々あり日なたの暖なるにあぶる意にや焼こと
 をほこらすといひ其塵をほこりといふ是なり

土なぶり
砂あそび

土なぶり砂あそび唐太宗の土城竹馬兒童之樂といへる是なり又「法華經」方便品に乃至童子
 戲聚砂成佛塔、如是諸人等皆已成佛道とあり季吟「獨吟百韵」に「まるをどり腹を機嫌をと
 り／＼にあやま、泥をふむやおさない

小家を作
る

又小家を作ること長明「方丈記」に幼子のついでのかげに小さき家作りて居たるとあり「一代
 男」に里の童があまがへるの家などしてとへるのいふとよ、やかなるをいへり此こ菴の
條にいふ歩行戯あり「たが廻したたがまはし初めけむ

籠廻し

雪山雪佛、雪ころはし、雪やけ、雪女 ころく元木、葉竹、へしづき ふりつみはりつ

雪の詠めり月花をもかねて須臾の程に白たへならぬ隈もなくおもしろきながめにいあんなれど北風はげしく吹て手足こゝゆるいたへがたく往来も自由ならず晴て後消かゝりて穢けなるいさらにもいはず路次のぬかり日數経れ共かはきかたきなどを思へり月花にたくふべきにあらざる雪のふる日寒くこそあれといすなほなることぞかしこの下さまのことにてやむことなきあたりをわることなる詠めど興し給ふにこそ又さらぬも酒のむ人と兒童とい寒さをも恐れずいたく降つむをよろこぶも多かるべし歐陽子が乃知一雪萬人喜といへる雪爲五穀之精といへるに據て豊年をおもふことなれば其意異なり〔公事根源〕曰昔初雪のふる日群臣參内し侍るを初雪の見參と申也桓武天皇延暦十一年十一月より始る初雪にかざらず深雪の時り必諸陣見參をとる也此事絶て久しと云々いにしへの初雪の日を曆にふるしたるにや〔紫式部家集〕こよみに初雪ふるとかきたる日目にちかき日野のたけといふ山雪いとふかく見やられるれば「こゝにかくひの、杉村うつむ雪をしほの山に色やまかへるとあり雪にて岩を作ること〔萬葉集十九〕天平勝寶三年正月三日内藏忌寸繩麻呂の館に宴樂の時の歌に積雪彫成重巖之起節信云起 奇巧綵發草樹之花、屬此椽久米朝臣廣繩作歌一首、奈泥之故波秋咲物乎君宅之雪巖剛左家里祁流可母、遊行女婦蒲生娘子歌一首、雪島巖爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之挿頭爾雪の岩に花を彩り作る也 雪の山清少納言物のあはれあらせかはなる物の條、まはすの十日のはとに雪のいと

雪の山

たかうふりたるを女房もなぞしてものゝふたにいれつゝいとおほくおくをねなくの庭にまことの山を作らせ侍らんとてさふらひめしておほせとていへばあつまりて作るに殿守司の人にて御きよめに参りたるなどもみなよりいとたかく作りなす宮つかさなど参り集りてことくはへことにつくれば所のさう三四人まいりたる殿守司の人も二十人ばかりになりけり里なるさふらひめしにつかはしなぞすけふ此山つくる人にいらく給はずべし云々いかにといはせ給へりむ月の十五日までさふらひなんと申す云々その山大なるを思ふべし又其續きにその山作りたる日式部ぞうたゝたか御使にてまいりたればとねさし出し物なぞいふにけふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき御前のつはにも作らせ給へり春宮弘徽殿にもつくらせ給へり京極殿にもつくらせ給へりなどいへば「こゝにのみめづらしとみる雪の山ところくゝにふりにけるかな〔源氏朝親〕女の雪まらばす處、いとおほうまろはさむとふくつけがれどもえもおしうごかさでわぶめりかたへり東のつまなぞに出ぬて心もとなけにわらふ一とせ中宮のおまへに雪の山作られたりしよにふりたる雪なれど猶珍くもはかなき事をなし給へりしが〔禁秘御抄〕雪山條上凡此事古不見、自中古事也、事始文略、一條院御時以後也、清少納言記在其仔細、初雪見參近代絶畢、初雪日仰六位藏人、各取見參、藏人東帶或宿衣、召朝餉仰之、内侍傳仰藏人、進見參給祿、内藏寮絹、大藏雀布也、又雪山のと〔榮花晩待星〕などにもみゆ〔河海抄〕に雪山伏見院永仁の頃まであり諸家記録に出つ藏人頭奉行として沙汰する也云々雪佛雪ころばし〔新拾遺集十七〕雪にて丈六のはとけを作り奉りて供養すとてよめり勝西いに上人

ゆき佛

寒垢離

庭前雪打人〔源氏浮舟〕わらはへの雪あそびまたるけはひのやうにぞふるひわがりける
寒垢離〔洛陽集〕に寒垢離があびける水に月もなし有知寒垢離や綿子て足らぬ人もあり自愧こ
れぬき事などありて堪かたき事をするなり今世乞食坊の寒ぶりといふ代垢離の意なり
もろこしの潑寒胡戲といへるの只寒中に水嬉することみゆ〔唐書〕中宗神龍元年十一月己丑
洛城南門觀潑寒胡戲また睿宗景雲二年十二月丁未作潑寒胡戲この事止みたるの玄宗開元
元年十二月己亥禁潑寒胡戲とみえたり其後この事なし今小兒裸體なるをかんてはりと云
ふの氷をまがひたり昔の小兒のおかん氷といひしなり〔佐夜中山集〕句付おさなき人のみる
朝かみつめたきをおかん氷ともてはやしと云へり

寒氷

氷をた
く戯

又氷をたたく戯の〔鬼貫が獨言〕に柄杓の桶の内におつきて柄をにぎれどもうごかずあるの
わらんべの瓶より出してもてあそびていたく音かねのことくむかへみのごとし漢土
にも楊萬里が穉子弄氷といへる詩に穉子金盆脱曉氷彩絲穿取當銀證敲成玉磬穿林響忽
作玻璃碎地聲

小兒
玩物
字の事

小兒玩具〔埃囊抄三〕小兒玩物字事さいらとの編竹と書き或の編木と書く筑子のこきりこ也
肚のころ獨樂のこま礫岩のつんばひ石拵子いしなど无木養むきさい草薙くさきり鞞鼓ふり
つみ輪子らうこ同類也といへり此内他の條に出たるをいはず肚の古來いかなる物とも
いはざれば今さだかにい知がたし按るにころこのころくとまろぶもの故に名づくるなる
べし肚の字昔に腹肚なりとあれば其義ことにはなす恐らくの肚の字を誤りたるならむ肚

ころく

五一切滑なる貌とあれば其義をとりて此字を用ひしにやさて其形のまられず但し兩面にて
四面にのわらじ今の卑き者の詞に錢をチャンコロといひ又小兒の小石を石ころといふ皆同
義なり錢にいふの〔犬子集〕に「なかされて居るの衾やさつまがた鐘の湯つばへは入るころ
錢また〔似勢物語〕おかし男錢えりける女にいへりけりうしろめたくやおもひけん「我なら
でこと錢えるなかなしやころかけとらぬはつとなりともと有をみれり文字なきなり惡錢
をころといひけるにや

〔萬葉集十三〕菅根之根毛一伏三向ゴロゴロコ疑呂爾また〔同集十〕春霞田菜引今日之暮三伏一向コト不穢照

良武高松之野爾コノ一伏三向と三伏一向といおなじ物なるべし〔十訓抄〕に嵯峨の御門の一
伏三仰不來人待暗降雨懸筒寢とかせ給ひて小野篁に是をよめと給はせけり「つきよに
こぬひとまたるかきくらしあめもふらなんわびつゝもねんどよめりければ御氣色なほりに
けりとなんわらはべのうつむきさいといふ物に一つふして三あふけるを月夜といふなりと
見えたりこは正しく右の〔埃囊抄〕に无木養といつる物とみゆ一ツふし三あふくといへるの
〔萬葉〕のころと訓るとおなじ然らばころと无木養といつる物にやそをなとて一ツに分て〔埃
囊〕にの書載つらむおもふに球杖と玉ととりはなしたるとおなじかるべし

无木養

〔萬葉略解〕にも〔十訓抄〕を引て云々あるのこによしなくてことによしと後世につくれるも
のなればわけいふべきにのわらねどうつむきざいといふもの昔よりや有けんさて〔卷二〕
人麻呂の長歌に許呂臥者〔同卷〕自伏君之などよめるころ伏の字のとく自ら伏事にて今も自

ら倒るゝをころぶといへりさればそのうつむきさうと云ものゝ一伏三仰もたのづからころびおくるさまの物なれば古しへ其物をころとや名付て有けんさて上に出たる三伏一向の神佛をぬかつくより出てつきの言に借りたるにやあらん〔十訓抄〕に此一伏三仰ととりちかへてつくよといふに一伏と三仰と書るかこの試にいふのみといへるごとく〔萬葉〕につくの假字に用ひたるの三伏一向なるを〔十訓抄〕に一伏三仰を月夜のかなとす誤なるべし三伏一向の神佛をぬかつくより出たりといふの押あての考にて其實の知かたし

〔十訓抄〕の文童のうつむきざいとあるを世に大かたうつむきざいとよめども〔埃蘖抄〕に无木籥といひまた〔遊學往來〕に無木と出たりこれに據て童の打むき籥と讀べく覺ゆ籥の投るともふるともいへどうつむきざいはぬ物なれば常の骨子にもあらず其法も異なるべければ雙六をうつむきざいと打といふものとみゆさて〔萬葉集〕につくのかなに用ひたるの音を轉じたるにて實の月なるべく籥の目の名を聞ゆころといふのその用ふる所の籥の名なれども一ツふし三あふむけるをころといひけること、聞ゆそのころてふ物の數多なるべし是檮蒲カウヤより出たるもの歟かりとてころといふの稱へも近し〔和訓栞〕に貞徳が書につくよといふの小兒の竹にてつきといふことをするに手の甲のうへにて竹のうらおもてになることあるに譬ふるなり此をげへといふ竹の六本なりと見えたりされば〔萬葉〕に一伏三仰をころとよめるも此等の義あるにやげへといふの今もあり又小兒戯に穴一といふ事をするにまづげをつくとて次第を定むることあり又いちあどの者をへといへり又采もてするげんべとい

げへ

竹かへし
つき

ふりつ
み

はりつ
み

おきあ
りほし

ふ名もげへの轉じたる語なるへし穴一にハケシといへりげへといふこと、今の竹かへしなるべしおもふにつきといふ竹かへしするに手の甲に載たる竹を裏がへさむとする時突やうにするをいふ歟げへといひかななる名義にかあらん未考これら件のころにあらざ

轉鼓フツの〔和名抄〕に鼓鼓和名不利豆々美〔周禮〕注云、鼓如鼓而小、持其柄、搖之、則旁耳還自擊之、となり此字を用ふべし〔榮花〕今のうへわらはにはおはしませばつどもりのついなにてん上人ふりつゝみなどして參らせたればうへふりげふせさせ給ふもおかしこは樂器なるをその形を小くうつして狝物とするなり

はりつゝみ眞徳の〔俳諧懷子入〕京わらんべの心のどけき付句に「けふといへり籥管やはりつゝみ

猿樂狂言にはり大鼓あり是なるべしあらへ緒なく草のつよく張たるをいふ歟

おきあかり紙えぼし紙合點首 錢太鼓唐人 風車 張子箱獅子 籠籠

さの瓢 桃仁松虫 茗荷鶴 折かたの蛙 折居鳥 紙よりの犬 はさみ切形

猿樂狂言〔まんちう食〕といふに子供のもてあそび物、ひなはりこ、おきあがりこほし、と見え〔鷹筑波集〕に「ちれの咲花のおきあかりこふしかな小法師を幸夷の花に取なしたり」〔堀川百首題狂歌〕猶影かいてけて丸艇の丸きつふりより起あかり小法師春立にけり唐山にて不倒翁といふものはなり〔詠物詩選〕雜玩部に吳偉業戲咏不倒翁詩あり是もとより達摩の像にあらぬをいつの程より達摩に作りたるか達摩を狝物とするも近き事に非ず小兒の戯ごとくに二にふんた

ふんだん

紙えぼし

るはむだるまが赤い頭巾かぶりふんまいたふんいすといへり〔安布良加須〕に頭巾をだにも
 今の訛也付句多がず付内夜も晝も不斷達摩を禮拜しとあるの右の戯言をとれるに似たり〔嘉多
 言〕に不斷といふべきをふんだんなどいふこと如何といへり此音使の小兒のみならず今
 も物の多くあるをふんだんと云へり
 紙えぼし〔清少納言〕見くるしきもの、條に法師陰陽師のかみかぶりしてはらへたるも有
 り其〔抄〕に法師ながら陰陽師にて被などする者あり又〔紫式部家集〕やよひの朔日河原に出
 たるにかたはらなる車に法師のかみかうふりしてはかせたたるをにくみて「はらへどの
 かみのかさりのみてくらにうたてもまかふ耳はさみかな紙かぶりの白紙にて作れるなるべ
 し幣にまかふと有にてあらる又耳はさみとの紙かぶりに緒をつけ耳にかけて結たるにや女
 の髪にも耳はさみといへる事有り面にかゝれる髪を耳にはさむといふ容儀部に紙かぶりのか
 け緒の其體にはさむなり〔宇治拾遺六〕内記上人寂心播磨國にて法師陰陽師の紙冠を着て被
 するを何しに紙冠を着しぞと問ければ被戸の神達の法師を忌給へん被のはせ暫着て侍ると
 云ふ物語あり又〔夫木集〕西行の歌「志のためてすゝめ弓いるをの童ひたひえぼしのほしけ
 なるかなこの額えぼし」古き繪巻物に多く出たり三角なる黒きものを額にあつるなり紙を
 染たる物なるべし

ひたひ紙

〔十戒圖〕葬送の處に見えたる男の額にあつるの同形して白紙とみゆこのえぼしの代にかり
 に用る物なり今も田舎にの葬禮に白き紙の三角なるを額にあつるの紙冠の遺風なり越後など
 にて白

木綿の袖なしはふりめく物を着て額に三角なる紙であつこれハ新族の者ごものする事
 なりこの着る物といふ名く大つたハ菩提所よりて借て用さなん猶所々にあるべし 此事のむかし田舎のみ
 にもあらず古き草子のさし繪などに往々見ゆ〔櫻陰比事〕町人のべ送りの處に白衣いぬけ鳥
 帽子の落てそうれい男をつかみさがし云々

乙州が〔それ〕草に歌舞伎子の幽霊を真似るに先細き竹杖額に紙をあてよろほひ出てか
 すかに聲を出すそのまねるものも幽霊のかく有と覺え見物の人も幽霊のかくと覺ゆ云々い
 へるなどを思ふに民間に此風俗うせたるの元祿の中ごろよりなるべし地獄變相の圖など皆
 そのさまを畫けり但し男女ともに同いかハ〔再來田舎一休〕と云ふ草子に女のことを云ふ
 に青竹の杖にてひたひに萬字をあてかちはだして死出の山をこゆ云々あれば紙にマン字
 をかきたるなるべし畫にの只かりそめにシかやうに墨を點じたるがやがて片假字のシの字
 と心得て後にの皆志か書り

合點首

合點首合點のものと官舎にて我得心し同役のものも同心志たる事にのともく點をかくる是
 合點なりまた歌のえらびなどするにも判者二人なれば歌の首に左右に點かくるありこれに
 よりて何事も得心するを合點といふ故うなづく事をまかいふなり合點首の今もある首ばか
 りの人形なるべし〔一人女卷六〕貞享三年刻衣類と首の各別に違ひ合點頭の如し子供の弄ぶに衣類は何に
 な〔六玉川八〕五月雨が人形もみなかてんくび五月人形をいふなれどもかてんくび云ものあるゆゑに
 首の竹の串に付たる首ハ武者又鬼など色々ありしが今ハ見えず

錢太鼓唐人笛〔諸艶大鑑〕貞享元年此處の洛中のお乳の人の集りあそぶ所なり錢太鼓唐人笛のひ

錢太鼓唐人笛

豆太鼓

いき竹馬の鈴の音云々小きを錢に譬へていふの錢龜錢蓮などのことし今豆太鼓といふも同義なり

風車

風車の漢名もねなし「帝京景物略」に出たり「尤草子」めくるもの、内或連歌の前句に「あぢきなやたゞまはしても見ん付句」みどり子のなきがたみの風くるま「雍州府志」に云所々是を作る然れ共祇園町を本とす春の初多く造る藁の臺に建造て賣るこれ兒女の玩具にして和風の體を含みおのづから春初發生の氣あり「永代藏六」に童子すかしの猿松の風車をするなせやうく一日に丸せりにしてから三十七八文より五十までのこととするかせぬかななり「松の落葉」丹前部八 解語出端 されてもくみごとやいたいけきたる物ありはりこのかばやぬりちかふ千くさ結びに籠むすび山まなむすびに風車ひやうたんにやせる山がらくるみにふける友千鳥とらまだらの犬の子とるや逢のやはた山云々具なり「江戸名物鑑」に雜司谷風車新蕎麥や給仕もめぐる風車此は明和七年の作なり其頃雜司谷専らにやりたり「草根集」寄車戀「手にとればそなたより吹風車めぐりあふべきまゐるしとぞ見む後奈良院御撰「何曾」に風車の謎風山を去て軒のへんにあり「帝京景物略」割秫楮二寸、錯互貼方紙、其兩端紙各紅緑、中孔以細竹、横安秫竿、上迎風張、而疾趨則轉如輪、紅綠渾如暈曰風車、路德延孩兒詩の相致放風旋と云もこれなり
はりこ
鶴が「大鑑七」人形屋をいふ處師子笛張ぬきの處又いふんぞしなしの赤鬼太鼓もたぬやす神

獅子笛

鶯笛

鳴是みな童部たらしの様々といへり今はりこのもてあそび時代のみゆるものハ男女の大あたまむかしノ摸ヤ首の動くハ虎の首より出たりニ 用ひて作れり賀曆已上の風俗なり其外田樂をやく女袴きたる座頭などのみゆこも又今ハ古きものなり
笛「西鶴大鑑」獅子笛引上これハ獵夫の用る鹿笛にハあらず頭に獅子を付たる笛なるべし
鶯笛ハ「犬子集」けふハはや鶯笛もねの日かな「誰身の上」春のまらべの琴の音に鶯笛のその聲ハ云々

猿松笛

さるまつ笛「名物六帖」に「夢溪談」の類叫子をさるまつ笛といへり「永代藏」に「童部すかしの猿松の風車とあれば笛のみハあらず猿松ハ廣く子供の名にいふにや

ひばり笛

雲雀笛ハもとひばりを捕ふる爲に吹笛なり「一代男」小兒弄びの内にひばり笛をとろとろへ云々あり

笙の笛

伊勢みやげの笛「諸艶大鑑」に伊勢みやげの笛を吹て門に遊びし云々貞享四年の衣服ひな形をみるにいせ土産の模様あり笛ハ小き笙の笛なり「永代藏」に伊勢のみやげをいふ處、笙の笛貝杓子して世を渡る海の若和布の眞砂の數ふらずなどいへり

むぎ笛

麥笛「藻鹽草」うなひ子がすさひにならず麥笛の聲におどろく夏のひるふし「洛陽集」麥笛や折から蟬に一聲あり榮也麥笛や夜毎に人の在所より同上「和漢三才圖會」云、大小麥共中空白色云々、小麥稍厚硬、小兒用以作笛吹之、謂之麥葉笛、とあり麥笛といふハ即是にて今竹の管笛に麥わらもて飾りたるにハあらず麥の稍を鳴すなり杜中の葉を卷てならず類也麥わら細工今色々あり「吳社編」に虎丘之麥柴、則彫簪回楯、疊架連楣、皆以麥爲之如黃屋、瑠璃光射

ぼんびん
ぼんびん
こん

清旭真奇玩也、と巧みに造れるとの見ゆれと染て用る事をまらざるにや

ぼんびん、江戸にていぼこんくと云ふ〔藝苑日涉〕に響葫蘆ポンピンと出たり一名倒掖氣
と云ふ〔帝京景物略〕云、瑠璃云々、有啣而嘘吸者、大聲咏々、小聲啾々、曰倒掖氣、〔日下舊聞〕に
倚晴閣雜鈔を引て曰、瑠璃廠原爲燒殿瓦之用、瓦有黃碧二種、殿瓦之外、所製曰魚瓶、曰琉
璃片、曰胡蘆、曰響葫蘆、小兒口銜嘘吸成聲、俗名倒掖氣、〔傳家寶二集〕料物不可與兒といふ
條に年節内外滿街都有賣料汁、不動并料汁瑠璃喇叭、但此等要物、最薄最脆、遍地小兒每喜
吹、願若一吹破吸入、喉、脆無藥能救、其破片極是鋼利入、目即瞎、入、腹腸斷、料絲燈上、料絲害亦
同、此全在父兄切戒、ひゝとろの喇叭のポンピンといふ異なり料絲のひゝとろの管又の連珠也
彈き猿、古き前句付書名「行あたりけり」彈かるゝ度にあたたまを叩く猿これ今もあ
るものなり

彈き猿
織さる

又織さるゝもと五月幟の下に付たる括り猿なりもてあそびのゝ其體異なり〔江戸二色〕明和
に刻したる草子なれど
もその圖は古にゆれりのぼり猿の畫あり其うへに「きをかへて猿もさつき」の竹のぼり風のくるま
のおりてこそいれ短冊ほどの小幡の風に吹るれば猿竿の上ののぼるなり又文字の扁にのぼ
り猿といふゝ非なり〔嘉多言〕にも文字の篇に小さと大さと、いふべきを小猿大猿などいふ
の誤なりとかやといへり

釣する猿

釣する猿〔正章千句〕霞む瀧津の鯉つらんとや劫を經し春の山猿智恵ありて貞徳が判に云ふ
猿の釣すること慥なる古事ゝ未知いへとも世にいひ馴たる諺なればよき寄合にて候と云
りこれ翫物に作りたるにあらねと翫物も此諺によりて作れる物と云らる林鴻が〔あらむ

つなかり
猿

つかしといふ冊子に似船が句「來しかたや猿の魚つるかきつばた

手を引連りたる猿の〔僧祇律第八〕云、佛在王舍城、諸比丘爲調達、作舉羯磨、乃至佛告比丘過
去世、時空間處有五百獼猴、遊行人間、有一尼拘類樹、樹下有井、井有月影、猴王見已語諸伴
言、月死落井、當共出之令諸世間破於暗冥、諸猴言云、何能出、王云、我知出法、我捉樹枝、
汝捉我尾、展轉相連、乃可出之、諸猴皆從、纒欲至水、猴重枝弱、枝折墮井、とある是也〔鹽尻〕
に五色線を引て曰、謝靈運遊名山、觀掛猿下飲、百臂相連云々、世に猿の手をとりて連りて水
中の月影をとらんとするさまを畫く此こととや但し月かげをとらんとすることゝ〔經律
異相〕にてや見侍りし相連り下る故事とゝ別なりとあるをひとつに心得て圖し侍るにこそ
水換さる、今水からくりらうすをひくさるあり水にてひくと見えて〔天祿識錄〕に唐人の作
たる孩兒の詩に折竹裝泥燕、添絲放紙鳶、互誇輪水磑、相効發風旋、と見えたり皆翫具なり
風旋かざくるまなるべし

水換さる

米搗さる

米搗さる〔續五元集〕凍たる手から錢洩映のうへ風にいころふ猿の米つき〔江戸二色〕夏冬を
赤いふんどしひとつにて人にましろの米をつくなり〔篋絨輪〕に「輕薄わらひ乳貫ひの常手
みやげに米つき猿を小糠賣子翁

桃核の猿

桃核の猿〔守武千句〕うつりかはれば猿とこそなれ花の春もみちの秋の桃のさね〔以呂三絃〕
にもゝの核にて猿を作り竹の切にて耳かきこしらへ當座の御用に立る云々〔後日〕男桃のた
ねにて猿を作り又ひやうたんの口を細工にして居云々などいへるみな手細工にて賣もの

にいなきものとみえたりこれ今も作る括り猿の形したる也それと異なれ其後藤氏に傳へていふ四郎兵衛祐乘享徳の頃將軍家へ仕へしが故ありて召籠られし時心願を起し桃の核に日吉二十一社獼猴六十餘を彫たる是より祐乘に刀劔を飾る具どもを造らるゝと云ふ又彫刻師が先祖も桃核に山王神輿二十一各舟に乗せあまたの猿掉さしてこきまはる處を彫るあり家に傳へて寶吉岡因幡とす余も一覽たり桃核僅に半分ほどなり神輿にハ寶鳳皇など付たるいと細やうに彫たるやうに覺ゆこれより桃核にて猴作る事あるより出たる事と云らる

蜜柑の猿

蜜柑の猿〔洛陽集〕に向齒や蜜柑の猿の腸をたつ榮也〔一代男〕にみかん一ツ黒髪をぬかせられ猿などして遊びし夜云々是今も柑カキ瓢ヒョウを髮毛にて括りて猴に作るなり寛文十二年〔俳諧三ツ物〕うら白や海老上臈のまたかきね正長〔前句付廣海原〕煎り海老いげに上臈の箸休め松笠の鳥〔日次記事〕八朔條に云今日兒童戲以松笠造雉鳥或以鳥賊魚甲作鷺鷥或以絲絮括金灯笼草實作瓢形又以桃仁製松虫是等類自玩之或互相贈謂之頼合云々綵雀亦與雉鳥鷺鷥之類同又蕙苴子連枝折之與行器贈之とあり〔世間胸算用〕八朔の雀の珠數玉につなぎ捨られといへる是なり

松笠の鳥

松毬にて
玩物と作

松毬にて玩物を作るの雉のみならず〔江戸二色〕に二刀を帯たる奴と鍛かたけたる農夫ありいづれも體ばかり松かさなり其狂歌に「百姓と奴が着たをよくみれば松つふくりてござりまうするこれ雉の鳥より出たる作りものとみゆ鳥賊甲の鷺今も作りて弄ぶものなり酸漿ササキの瓢ヒョウまた同じ桃仁の松虫これをみれば今西瓜スイカ瓜子にて鈴虫を作るのもとなり茗荷の鶴不角が〔矢の根鍛冶後集〕よき作意とて譽られにけり「水物に鳴はなしたの茗荷の

茗荷の鶴

子素仙〔六玉川二篇〕名月やめうがの鶴も生のこり又〔四篇〕めうがの鶴のくさる舟底といへるの臺の肴物の飾にしてありしなり〔俳諧百花鳥〕寶曆五年けしきどり水さかなの體に留る故なり身いめうがの如く頭い赤くとうがらしの如しいかの甲ヒョウに生るの稗ヒョウの中に留る子どもの慰になる鳥なり

折形の蛙

折形の蛙〔清輔朝臣集〕女をうらみて云々青き筋ある紙にてかへるのかたを作りて書つけてやりける云々

折居の鳥

折居の鳥〔一代男〕或時のおり居をゆかし比翼の鳥の形は是ぞ云々これ紙の折方にて鳥を作るなり〔五元集拾遺〕に聖代を仰ける句とて「鶴折て日こそ多きに大海日といへり春の設けの提子などをかざる料なるべし〔俳諧三疋猿〕折形の舟なかさばやかきつばた夢林今をり鶴といふものにや〔伊呂芝居〕に女子の遊びごとをいふ處に折す名の鶴蹴形の兜とあり今も作るものなり蠟紙のみ折居と心得るの非なり此ころ淺草に紙折たみて種々の物を作り人カミヤカミ紙拾の犬〔江戸枝折〕に「もの思ひこよりの犬も瘦かたち望一の紙より細工をよくふたりと

紙拾の犬

か〔あら野集〕はる雨いせの望一がこより哉湍水

鉄切形

はさみ切形〔俳諧名物鑑〕寶曆中より江戸の名物芝鉄切形「きり形に咲せて見ばや菊の花と出たり其人芝に在しなるべしこれ今もある紙をたゝみて夾剪にて種々の紋を截る者なり寶曆十三年の版〔諸藝遊戯雙六〕に紋彫とあり宋の曾三〔異同話録〕に蔣大坊母夫人曰少日隨親謁秦山東嶽天下之精藝畢集人有紙一百番鑿爲錢運鑿如飛既畢舉之其下一番未嘗有鑿痕

假面

其上九十九番紙錢也、この手づまの類なり近時はさみにて紙のはしよりきり初め人物の眉も目もはさみを止めず紙を廻はしながらきり畢てはなれたる紙を合すれば全紙の如し又錦書を白紙にかざね毛筋の如く細やかにほりぬくもありはさみにて截るたくみに及ばず

假面めんかた、般若、乙 芥子人形 今戸焼の女 相撲人形 金平人形 飛人形 輕わざ人形 天狗、まほ吹 西行 鈴 塵喉羅 繪幟 發燭の燕さんぼ 小鍋 箔團扇ほいつ 挑灯

麥わらの蛇 つぼく

めんかた

般若面

めんかたとい湯桶よみなり〔著聞集十二〕小盜の條に、面がた一ツありける其面をして顔をかくして夜なく強盜をまけるなりけりと有おもてかたと讀べし〔鎌倉職人盡歌合〕猿樂の歌「いとつるゝわれとはさらに見えしとておもてかたをもさまほしきかな今小兒玩物のめんがたの面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなりまた芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが今のかはりて錢のやうにて紋形いろく付たる面打となれり元祿の頃〔若葉合〕と云ふ歌仙の内に常陽花をどり指人形の輕はづみ彼けし面指人形の爲に作れるなり般若面〔尤草子〕ひろき物あはうのはなはんにはのめんといへり怖ろしき女の面を般若といふ〔般若心經頌鈔〕云翻般若云智慧、其體也清淨、不受諸妄染云々見えて智慧といふことの梵語なり鬼女の面をはんにやといへるの言の轉りたるなるべしそのもと謠曲より出づ葵上に怨靈行者が加持する誦文を聞て「あらおそろしの般若聲やと有り〔大般若波羅密多第五百七十八〕般若理趣分曰、菩薩摩訶薩、摧伏一切魔怨、とみゆ般若の聲に怕れたる怨靈

尉の面

が着る面をやがて般若といひたるにや又猿樂金春が家に傳來の鬼女の古面あり般若坊といひし者の製造となむ般若坊の南都の僧とか是によりて鬼女の面をはんにやといふとぞ又同じ家に三光といふ尉の面ありこれも三光坊とて三井寺の僧の作といへり然らば老翁の面を三光といはざるのいか、其角が〔錦繡綴〕に鬼女の面般若あぢ女とて古來より角ある面なり黒塚の能の位におもひ合せ侍れば全く一念の鬼女といふにあらすた、罔兩のたぐひなるべしとて源助に申てあたらしく角なき面をうたせけるの時にとりての工みならんやと申されしにいふの誠かといへる兼盛の謠も思ひやりたるやと雜談して兩吟の物ずきにはなしぬ、黒塚のまこと籠れり雪女其角蹴わけ目にたつ白草の足袋沽蓬云々あり源助の〔江戸鹿子〕に面打比谷一町目出目源助と出たり此事いつ頃なるか、元祿中の俳諧なり〔諸藝太平記四〕張貫の般若の面雨にうたれしをみるやうに天晴芝居のみせ物またらば直打のある男云々〔耳袋〕に金剛太夫家に金剛といへる面あり是の古き仁王の顔を面に拵へたるなり其太夫のこれが祟りにや鼻を損じけるとかや右の面の京都の一古寺に納め置き代替に一度これを拜することゝなむ乙御前の面、今おたふくといふの多福の義にとる歎略きておふくなどいふめりこれを世に〔山谷集〕四休の語の内、鹿茶談飯飽即休、三平二滿過即休、とあるを三平の兩の頬と鼻をいひ二滿の額と頤とにて乙御前の事なり此説古く聞えたれども非なり平の心安らかにして満わたらはぬことなきなり三と二の大數をいふなるべし

乙御前の面

天狗の面

天狗の面、書にかけるも古くは鳥の嘴の如くなりし鼻の長き狩野元信僧正坊を畫きしよ

り起れり其圖今に鞍馬山にあり假面に鼻の長さの胡徳樂の面なり又王の鼻といふの猿太彦
 なりといへり〔俳諧馬鹿慰勸〕と云書あり其返答に〔破言魔〕といふ書あり又その拾遺を〔非
 免路〕といふ其内に「木高くて赤きや王のはな柘榴訛言云いづれの君のことにか尤憚ある事
 なり陳云この王の鼻の御靈殿の祭やらんにかづける面なりされ此頃の 小歌にまでわか
 ひ物そろへの内へいれべ人あまねくまれり只末社の神ぞ云々赤い物揃への小歌ハ聚樂城傳計の時の
 子に按るに元信か天狗の像の胡徳樂の面などによりしもの歟今神祭にみる猿太彦の面な
 り是王のはなとて古くより有しものなら元信が工夫奇とするに及ばず王のはなり元信の
 書より後なるべし今鼻の長さを大天狗嘴尖りたるを小天狗といへる何ことぞ〔帝京景物
 略〕云、紙泥面具曰鬼臉鬼鼻目、染鬚鬚曰鬼鬚、これ鬼の面のある鼻の大なるあるの目
 の大なる毛の色のさまくなるもの種々有なり〔胸算用〕元禄
 五年五文の面張貫槌ひとつにてと
 いへるの大黒の面はりぬきなり

志は吹

志は吹〔屠龍工隨筆〕に今童の弄びに口の尖りたる面の鎌倉鶴が岡の拜殿に海よりあがりた
 るとて志は吹と名付たる面あり是を學びたるものとおもひるといへり志はふきの小ばかと
 いふ介潮の干潟にありて口を閉る時水はじきの如く潮をふく假面の志はふきの其義をあら
 ずこれうそふきを誤りとなへしものか嘯く面のおかしげなるなり〔感筑波集〕二人名は
 いかい見たも
 なきうそふく貌のさん三郎月の夜ふるに垢をかく助
 芥子人形〔一代男〕小宮をさがし芥子人形おきあがり雲雀笛をとり揃へ云々〔五元集〕菓子

芥子人形

今土焼の
小人形

盆にけし人形や桃の花これ三月ひなの句の中にあり〔雍州府志〕云、木偶人施衣裳、小者謂芥
 子人形、芥子比至小者云々、

今戸の土の小人形〔西鶴置土産〕淺草寺町の横筋を行に内のみえすくよし籠住あれたる宿
 の棚に小紫姿屋と看板出して土人形の細工する云々御亭主此人形小紫ならべ先遊女にして
 の帯がせまし殊にうしろのとりなりまんさら人のおかためきたをといへり壹文に一ツ、賣
 ものを無理な御吟味それい七十四匁に賣どきのせむぎと笑ひけると有り今もあるふり袖さ
 てすはりたる人形なるべし同じ小人形におみ笠きたる遊客なともあり

相撲人形

すまふ人形、今熊と金太郎のすまふ人形うす板をきりぬきて作れるものあり〔江戸二色〕に
 其製のすまふ人形あり二ツとも人形の體同くは、かぶりを赤く彩りたるいと兎相の作り
 とみゆ狂歌「かちもすまひまけもすまひの木偶坊勝負の人の手のうちにありすまうどりの
 書をきりぬきて後につけきをほそくさきたるを貼つけて立つ様にして二人向はせ息をふき
 て倒し勝負をみる者あり板にて作れるといつれ先なるかこれも古き物とみゆ〔相撲大全〕の
 叙に一戯具取見之摺疊、予少時有繭紙聯、剪爲鼎形、折如人字、乃細觀之、則塗鴉其首爲鬚、
 綵飾其腰、以爲幘、各紀其字號、宛然兩人、將相撲之貌也、其戲法裝之席上、戲者亦相對、曲折
 假僕、尖其口嘴、氣息微々、一齊吹起來、則盤旋欹斜、暫時爭競而仆、得其上者爲勝而呼號、
 金平人形〔西鶴〕に肩車に乗て懐より具足着たる金平を賜り道すがら切合こととしてま
 た手遊とて飛人形又の染分の手拭云々土佐ぶし淨るりに金平の事を作れり作者ハ岡清兵衛和
 さいふものなり

金平人形

飛人形

泉太夫これをかたりて大に行はる是より世に強き事を金平といふ手遊一枚繪繪雙紙などに
 出たり今も男めける女子を金平といふ又漆にひきしく固き糊を製て金平と名付また牛旁の糞やうに金平あり〔六玉川十篇〕金平の女に
 ありておもしろき金時ともいへる〔温故集〕に遊女歳旦「盃や金時らしき初笑ひ秋とあり又土佐
 節〔草摺引〕にも鬼を茶の子のきんひらだんべい
 飛人形の竹の串を膏藥に捻り付てはね返らす張子人形なるべし〔描金畫譜〕に笠着て匍匐る
 人形みえたり今淺草寺雷門にて賣る龜山の化物などいふ張子二ツにて一ツの上に着せは
 ねかへれば脱て形かゝるやうにしたりいと近き物なり又綿に作れる鬼もありこれらのも
 より有しなるべし龜山の化物の四國を廻て猿となると云諺を人形に作りたるが始にて其外
 さま／＼作りしなるべし龜山の化物と云ことゝ觀せものあやしきものと龜山にて生捕しと
 云しこと度々ありしゆゑまか云なれたることゝみゆ此外に紙を方にたゝみ獅子舞の形に作
 り足にまゝみ貝を付てうちわにてあふぎをどらすものあり祐信が畫に笠きたる人形を紙
 に作りたるにうす板の車を付て扇にてあふきて走らすものあり似たる戯なり〔雲合奇
 蹤十五〕飴賣のことをいふ處挑了糖担一頭辨有搖鼓兒泥人兒引線兒紙糊小盞兒燈草發板
 兒丁々當々とあり燈草發板兒の飛人形の類にや
 輕わざの人形〔西鶴置土産五〕渡世かなしく毎夜蛛まひの人形拵へて云々
 てんぼ、西行法師、鈴〔誰袖海〕と云草子に東福寺裏の門前此邊の名物地黃煎土にて作りし狐
 鈴鳩てんぼさてい風呂敷わいがけたる富士見西行かねをためるものゝあの西行の心やうな

輕業人形
てんぼ
土の西行

らでいならぬ其故たどひ首の落されてもふる敷包のはなさぬと大わらひ云々これら今も
 有るものなり土人形を造るみな合せ摸にてぬく也彼風呂敷包みやうの物の後に土を捻りて
 付たるなり故にこれの中に空虚なし首の缺やすきも風呂敷の背に焼付われれば落がたしこゝ
 にやくなき事ながら西行の圖古畫をみるに笈を負て包み物負つるゝなしざるを〔寶藏二〕に
 も西行法師のひらづゝみの世をはなれたる袖にいかけられ難波かたにさまよひて蘆の
 枯葉に驚き云々いへり是今いふ風呂敷包みなり風呂敷の風呂に入る時敷ものなれに常に物
 包むをびらつゝみといへり似たる物故後に大小の違ひ風呂敷にも物を包み用ひてひら包
 の名いうせたるにやひら包の〔下學集〕に平包と有り〔雅亮裝束抄〕にひらつゝみのうゝさし
 〔俳諧染糸〕の内千句に「泥足も其儘涼む一橋岩根におろしれく平包さて包み負へる西行の
 俗圖なるべけれども是もやゝ古く其さま有とおぼゆ熊野山妙見院八坂寺大師修行影像かのひ
 ら包みを背負たりでんぼ今もあり小き炮烙の俗名なり享保中に書たる〔調味抄〕といふ物に
 蒲挺をばうろく焼にすることを云て深き大でんぼに入又てんぼにてふたをして火つよくた
 けバむしやきになる云々てんぼの手くばにやおもへどさる古雅の名にありあるべからずさら
 バ土炮烙の略稱なるべし土燒の鈴の〔洛陽集〕に「初午や典主の鈴を彩りけり春澄兆典主の東
 福寺の繪具谷の土を繪畫の着色に用ひたりとぞ其邊の産物故とり合てかくいへり土燒の鈴
 を彩色するなり〔續山井〕に風になるやすゝの子どものもてあそび拾女鈴子といふも手共にいひかけしなるべし
 摩喉羅を〔名物六帖〕に土のちこ人形としたるゝわろし〔東京夢華錄七夕條〕街内皆賣磨喝樂

土燒の鈴

摩喉羅

乃小塑土偶耳、悉以彫木彩裝欄座、或用紅紗碧籠、或飾以金珠牙翠、有一對直數千者、禁中及貴家、與士庶為時物追陪云々、又小兒須買新荷葉、執之、蓋効擊磨喝樂、兒童輩特地新粧、競誇鮮麗、至初六日、七日晚貴家多結綵樓於庭、謂之乞巧、樓鋪陳磨喝樂、花瓜酒、硯炙針線、或兒童裁詩、女郎呈巧云々、

〔格致鏡原歲時記〕七夕、俗以蠟作嬰兒形、浮水中以爲戲、爲婦人宜子之祥、謂之化生、本出西域、謂之摩睺羅、今富家猶有此、按るに化生の事後に、常の瓶具にて、飾物とせざりしにや〔五雜俎〕に〔歲時記〕知爲化生、而不知、七夕之戲、さいへり

〔清三朝實錄〕天聰八年十二月丁酉、墨爾根喇嘛、載護法喇嘛哈喇金身、至初元世祖、時有怕斯八喇嘛、用千金鑄護法喇嘛像、奉祀于五台山、後請移于沙漠、又有沙爾巴庫圖克圖喇嘛、復移于元裔察哈爾國祀之、墨爾根喇嘛見天運已歸我國、皇上云々、于是載佛來歸、また十年正月云々、先是孟庫地方、送喇嘛喇佛、至命造銀塔一座、重五百兩、塗以金、藏其骸骨于塔中、置殿左側、禮祀之、右〔三朝實錄〕の文分明ならず元世に鑄たる像清に來るさいひ又其骸骨を塔中に安置す、只一處に麻哈喇とあるの、晴字脫たるなるべしされどもこのマコキヤラ即麻喉羅なるべし〔法華經〕來神力品に天龍夜叉など擧たる内緊那羅摩睺羅伽人非人等とある摩睺羅伽もおなじ物にやこの人類にあらざる異なるべし〔元曲選〕に張孔目智勘魔合羅雜劇あり高山といふ者手あそび品々賣ありくその内に魔合羅もあるなり常にある玩物にて七夕に限らず〔帝京景物略〕忿怒變像鳥斯藏每貢之、曰馬哈喇佛、本邦にて達摩を翫ぶもおなじ七夕に蠟をもて嬰兒

冊七夕の短

を作り其外種々の形も作るによりて麻合羅をも作りしが節物となりて塑像も賣り臺座など風流を盡す事となれるならん越後信濃などの國にて七月一日より七夕に至るまで家毎に燈に繩を吊り管の人形を吊す、異なるれども七夕に人形を弄するハ似たり江戸にて近ごろ文政二三年の頃より七夕の短冊つくる條に種々の物を色紙にて張りてつるす其頃のなべてせしにあらざりし只濱町邊の町屋などにて見しが今の大かた江戸の内せぬ所もなきやうなり

繪のぼり

繪のぼり〔懷子三〕五月幟〔門や又立榮ゆべき紙のぼり正村其外紙のぼりといふ句多き〕寛永頃の端午のぼり皆紙にてありしなり〔羅山文集〕慶安辛卯五月端午云々、家々挿蒲造粽、且爲童兒立紙幟、木曾また〔一代女六〕五月の處のぼりの紙をつぎて素人繪をたのみ云々〔五元集拾遺〕なよ竹の末葉のこして紙のぼり今も田舎にこれをを用ゆ又〔五元集〕に卯月十七日或は元集拾遺になり申されて郭公幟とめよとす、めけりと云もあれば此頃より下さまにても布のぼり行はれしにや武者繪の版すりて蘇枋黃汁等にて彩れり江戸にても鍾馗のぼりの紙を用るもあれどそれも此ごろの少なきにや版行の繪など絶たり奥何文角など、墨繪の鍾馗を版にて摺たる目玉に金箔置たるなどありし〔續山井〕繪にかくや目に見ゆる鬼かみのぼり風鈴軒又〔色三線〕に手遊の幟賣あり

頭巾す

頭巾す〔江戸二色〕に出たり狂歌に「四天王ほどにいさほし祈るなり山々ぶしのたねのおひささ此冊子の瓶具これらの物見ゆれば元祿頃の語とあらる」附本を二まい尻尾にし寶曆ごろの京師の繪本昌次さみ發燭の燕〔俳諧口寄草〕元年危り付くにこの燕〔海老藏蜻蛉賣あり竹

つげきのさんば

蝶々

の先に蜻蛉のなぎたり今もある蝶々どまれといふもの、製にや蝶も明和の頃よりあるか、宗因が句に「世中の蝶々どまれかくもあれと云り昔の句なり、柳亭云京師八坂の茶屋のことをかける草子にてうく、どまれの 小歌出たり件の句のこれをとれり然らば葉の葉にとまれと云ふの昔の小歌なり下總佐原あたりにて蝶々とまらんかのめ飛すからんかのめとうたひて踊るこれも同じたぐひか

小鍋

小鍋、貫之が娘の幼き時の歌として「鶯よなとさいななくそちやはしき小鍋やはしき母やこひしき此歌〔袋雙紙四〕〔俊頼口傳〕〔女郎花物語下〕等に見えたり

箔の團扇

箔の團扇、はづき挑灯〔伊呂三絃〕に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本は、づき挑灯三十云々是の踊の調度なるべし

挑灯

唐團扇

挑灯、はづき挑灯〔伊呂三絃〕に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本は、づき挑灯三十云々是の踊の調度なるべし
唐團扇、はづき挑灯〔伊呂三絃〕に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本は、づき挑灯三十云々是の踊の調度なるべし
挑灯、はづき挑灯〔伊呂三絃〕に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本は、づき挑灯三十云々是の踊の調度なるべし

どく稻稈にて編たるものを結付たりおもふに初午稻荷祭にわら合子作りて供物を入れるなるべしその合子の編かたこの蛇の口の如し次でに蛇を作りゆひ付るの蛇を避る呪ひなせにや、蛇の合子のあみかたより出たりとみゆ常のハ大森村の外に麥わらの手遊び賣所なし、駒込麥わらの蛇の寛永の頃此の處の百姓喜八と云もの是を作りて祭禮の日市に賣る一とせ

又葭の穂など

疫病はやりし時此蛇ある家の免れりと云ふ雜司谷麥稈の角兵衛獅子の高田の四ツ家町に住し久米と云へる女製し初たり寛延二年の夏の事なり其ころ參詣多かりしかのよく售たりとど
又葭の穂などにて鳥獸を作れるのもとよりにて近ごろハ大森村にて男女のかつらを棕櫚にて作ることに上手になれり大師河原のみやげに買て替間の生酔などがかふれるもみゆこの頃聞たる折句に「まだ鮫洲きげんで坊主まゆろかつら坊主あたまに、着せすけなり」〔帝京景物略〕稽編益冠幞額曰草帽云々、香客歸途、衣有一寸塵、頭有草帽、面有鬼臉云々、物まうでのかへさにわら細工のかぶりものして鬼の面をきたるなり

つばく、此手遊古きものと見えて慶長ごろの古書人物の衣のもやうなどにも付たり〔犬筑波集〕わらはへの縁にてくるふ薬師堂もてあそびぬる瑠璃のつばく、もと壺とのみいふべきを小兒の詞のかさねいふ例にて名付るにや〔懷子十〕立別れいなかあたりの朝ひらきつはくはどの涙たる中重頼〔松の落葉〕京童といふ東上るりきさらぎや初午參のみやげとて鈴やつばく、風くるま〔好色盛衰記〕貞享五年稻荷の前つばく、かまく、作り賣これも土佛の水あそび云々これ壺と釜となり

- 削り花 餅はな 栗花かや穂の馬猿みづくなどの類 作り花 五色網 はせの花
- 箔おきの金 一文長刀 浮鳥人形 酒中花 紙でつぼう 竹の吊瓶 ふくら雀
- 雀の笛 興次郎人形

削り花

〔古今集第十〕物名、二條の後春宮のみやす所と申ける時にめどにけつりはなさせりけるをよませ給ひける文屋やすひて「花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな〔奥義抄〕に著といふ草をゆひ集めてそれにけづり花をさす事といへり著の〔和名抄〕に女止とあり〔史記〕龜策傳にも見えて其莖の筮とする物なり削り花の木をけづりかけて花に作るなり〔延喜式〕圖書寮に金銅花瓶二口削り花左右各進二枚と有り佛名の時に削り花を供養に備ふる事多くみゆその引歌とも〔餘材抄〕に委しく出たり〔夏山雜談〕に今も西國邊にての著に作りはなを付て神佛にさぐる所も有といへり〔西武獨吟〕常盤の松のかゝりあくよや霞酌たいのものに削り花寛永ころの書に繪物師家に削り花立る洲はま有り今も芋の臺何くれの臺といふものみなけづりばななり

餅花

栗花栗花の種にて馬糞にて作る

餅花〔宗長紀行下〕冬の梅のーりん二りんかすかにさきて匂ふこそあはれふかゝらめあまりに正月の童の餅花つけたるやうにさきたるふさのしからず云々宗長は宗祇が弟子にて文明大永ころの人なり餅花もど節物なるを江戸目黒の餅花など、常にあり〔江戸二色〕にこの餅花出たり竹串をさきかけて其末ごとに餅を丸くひらめて付たり吉野の花餅を學びたるものなり委しく食類の部にいへり〔四神地名錄下〕目黒村條、名産に餅花あり又饅よし近年童子の手遊びに栗花かやの穂にて馬糞虫るい此外いろ／＼細工を仕出し賣るものその細工尤よしとあればこれらの手あそびの寛政初年より出來しと知らる

作り花

作り花雑色の綵帛もて造れるをいふ〔萬葉集十九〕雪の巖に綵花を殖タテたるをよめる歌あり〔伊勢物語〕梅の作り花に雉を付てたてまつるとて「我たのむ君がためにと折花の時しもわかぬ

五色網

物にそ有ける〔清少納言〕二月朔日のことを云處おかしき櫻の一丈ばかりにていみじう咲たるやうにてみはしのもとにあればいと、うさきたるかな梅こそたゞ今さかりなんめれとみゆるのつくりたるなんめり〔金葉集十雜下〕後三條院かくれおはしまして後五月五日一品の宮の御帳にさうふかけ侍りけるに櫻の作りはなのさゝれたりけるをみてよめる藤原有祐朝臣「あやめ草ねをのみかくるよの中におりたかへたる花櫻かな〔新古今集〕に後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心をたのこともつかうまつりけるに大納言忠家「櫻はな折て見しにもかはらぬに散ぬ計をさるしなりけり大納言經信「さもあらはあれ暮行春も雲の上に散ことあらぬ花し匂ひて

はせの花

五色網〔江戸砂子〕駒込富士社の條、常所の産とある内五色網あり〔丹前能五〕娘一人手わざにの五色のあみを拵へ伊勢參りの土産物賣と織どにいとまなく母に孝を盡し云々いへり又今金柑なせ入て小き網も有これとい異にて手遊にのあらぬを〔松の葉〕にあみすきといふ小歌あり、この町の子供でかましましかみの町ですきましま上の町下の町みせのはなに引かけておいてから子供まゆ子供まゆもちつとそちらへよらんせのわくるはくすきわくる網を五色にすきわくる又兵衛かすいたかねの緒とかく又兵衛どののまやくはんこせねかひ宿願後世兵衛といふ者種緒に五色の網とすきたる事ありとみゆ

はせの花、近ごろの物にも非ず〔後撰夷曲集〕にいふことありて酒もりせし座にて四天王寺に名だゝるはせと云ものをこよりにつけて梅ばちに作りたて是をさかなに今ひとつとてよ

める「冬の中に作れる枝の紙ながらかくこそはせの花となりけれ大坂胡蝶女と見えたり天
王寺に名だゝるとい彼十日戎の賣の市にうるを云なるへし小歌に「はせ袋に錢かますとり
鉢さい槌たばねのしと云ふ是なり今のこの賣物どもを手遊に小く作りて小寶ととなへて賣
る子寶の名詮をとるなり

はせハ漢名儼なり後世采花とも李婁とも云ふ明の李翊が「戒菴漫筆」に李婁の詩あり東入
吳門十萬家、家々爆穀ト年華、就鍋拋下黃金粟、轉手翻成白玉花、紅粉佳人占喜事、白頭老叟
問生涯、曉來粧飾諸鬼女、數片梅花挿髮斜、これ吳中の風俗にて上元の夜にあることなり

えんぎの金（佛羅女）の寶永の冊子なり其中に伊勢の處末社へ不殘一角ツ、禰宜達肝をつ
ぶし土の箔おきまんちうかと思ふ猶古くよりあるべし寶永七年「世説故事苑」に正月の祝ひ
ことを云に俵子及金銀の包みたるを買と云るハ今の土にて作れる百兩つゝみなり

一文長刀（一代男四）ある時の一文賣のなきなたをけづりなく子をたらし云々

浮鳥、宋人丁用晦が「芝田祿」に煬帝在江都、代王留守長安郡、盜賊蜂起、有獻計者、刻木鴛繫
詔于頸、致之涇泗、冀關東救兵至、日放百十順、流而下、竟無救至、また「東京夢華錄」に以黃蠟
鑄爲鳧雁鴛鴦鷓鴣龜魚之類、彩畫金鏤、謂之水上浮、また「物理小識十二」戲科斗、樟腦黃臘和
勻染墨投水中、作科斗自然走動、但欲潔淨、油手止之即佳、（今兒女のびいごるかんざしに水を時へ木
蠟に朱を和て金魚に作り入たるあり）
の葉の舟に山椒の實にて人形作り棹とらせたるを鉢の水に浮めたるを讀人不知「木の葉ふ
ね朝くらさより漕出し船頭とのいつかれ山椒（母の物語に開し）「六玉川四」浮人形の掌をこぐとい

浮人形

一文長刀
浮鳥

えんぎの
箔おきの
金

はせ

酒中花

紙でつぼ

豆でつぼ

虫目鏡

竹の吊瓶

ふくら雀

雀の笛

ふ句あり（今ハひろうごのほりかぬして袋を作り小船をこがせ線香花火
をもたせ又ハ蠟引の紙にて鴛鴦を作り火をこもして水に浮す）

酒中花（洛陽集）雪國へ酒中花さそへ歸る雁元好（虛栗集）名をかへて縁か禿おとなしく柳興う
きをさかりの酒中花の時長野西川風の「畫雙子」居あひ抜の畫に酒中花を合す誠にうけて開
くと云ふ謎あり

紙でつぼ（來山點笠付）手をくくにてつぼうにする手本紙「手をくく」に手々と云ことな
り

豆でつぼ（江戸二色）に出つ今あるとい作り異なり狂歌「光陰の矢よりも早くてつぼう
の玉の如くに除夜の豆うつ

虫目鏡（洛陽集）虫めがね老の波こそ螢哉嘉長武藏野のむさしの也けり虫めがね行正
竹の吊瓶（其祐）に筑うりのたが愛相に蹴つるべ其垂果かないとて睨めくら引平砂

ふくら雀、謠曲の「放下僧」にまだり柳の風にもまる、ふくら雀の竹にもまる、「抄」に雀の
子い親よりもふくらかにみゆればふくら雀といふといへり「五元集」神無月ふくら雀ぞ先寒
き鬼貫が「獨言」に雪の云々あはらなる賤が軒ばも風情つきてふくら雀のつくくとならび
ぬたる衣かしたき心ちぞするなといへるの雪にこへたる體をいふ子雀のみにもあらじ
雀の笛、張子のすゞめを方なる臺に居笛をかかけ手にて押は鳴るやうに作りたるものいも
と屁ひり猿とて猿を挑灯の如き臺の上に作りたるものより出たりとみゆ「江戸二色」に圖あ
りこれ中に笛ありて鳴すこと今の雀の如くなるなり

興二郎人形

興次郎〔屠龍工隨筆〕に能狂言手遊やおとろんまり小弓といふおとろんの今やうの手遊びに紙にて作りたる人形に笠をさせ細き串を兩方の脇の下にさして末のひらきたる所におもりをつけて人形を指の先に立すればおもりにてつり合て立なりそれが人のをさるやうに見ゆればおとらうといふことにておんぞれおんぞれといふものにて此前興二郎といふ非人の笠の上にてまはして來たるものなるべしといへり猿樂の狂言何といふものに出たる歟今覺えず興次郎といふ非人即の通稱なり〔風流旅日記〕貞享四年刻伊勢あひの山お杉お玉がことをいふにみな是此處の興次郎が御内儀むすめたちなりといひ〔又雍州府志〕に乞食僧長惣謂興次郎云々四人或の六人入人家庭踊躍敲手唱祝語この故にたゞきの興次郎といふ件の〔隨筆〕に非人が笠の上に舞して來たりしとあるの近時のこと、聞えればそれ故に興次郎といふにわらず興次郎がをさるさまに似たる故に名けしなりこの人形遊女が指の先に舞す圖寶永七年版本〔伽羅女〕といふ草子にあり〔和名抄〕酒胡子、諸葛相如酒胡子賦云、因木成形象人質、在掌握而可玩、遇盃盤而則出、とあり

又笠の上に人形興次郎人形にいあらす置て舞す圖の西鶴が真享中の冊子にみえたり興次郎人形酒席に用ること其條下にいふ併せみべし〔篋絨輪〕いたゞく鉄わ燈蓋の照り行人の興次郎つら合片齒下駄詠流鷺足にのりたる行人なりそのかねあひ興次郎のやうなるをいふ今これを興次郎兵衛といふますく部俚なり

人形筆ひき 手車ま さやこん 狸々小僧 あやふや人形 かはり屏風 芋虫 ば

笠の上にて人形を置て舞す

人形筆

湯本細工ひきもの

手車錢こま

いづき江戸はいづき、草の葉を鳴す葱と吹 松葉のくさり

茶碗を手に付る 瓜戦核 菓物燈籠

人形筆ひき〔佐夜中山集〕付句に「水莖のをかしきふしをいひ立て筆の軸にもつくる人形〔嶺南雜記〕に葵扇出東葉、其販于江浙者、特其麗者耳、其精者有彩畫人物極工緻、又有柄中鏤空内刻人物、自能運動云々、あるのひりやうのうちにはなり其柄の中にからくり人形あること人形筆のごとしこの筆の有馬の産物なり又おもふに湯元細工のひきものも有馬の箱根よりも古かるへし〔童蒙先習〕うすきもの、内有馬のひきもの慶長十七年にかくいへり合子のみにて翫物の作らずともおもはれず

手車錢こま〔崎人傳〕に享保の初め手車といふもの賣翁あり糸もて廻して是いたがのぶやといへばこれのおれがのぶやと答へて童部買てもてあそぶ云々これの土にて小く井戸くるまの如く作り糸を結付其糸を巻付て糸の端を持ってつるし下れば廻るなりそれを上にすこし三やくれば糸おのづから車にから巻いていつ迄も舞ふ今もあるものなりおもふに錢車とて田舎の兒女錢の穴に箸などをとをし短く切たるにて本綿を糸にとるかの手車の中に心棒なけれ共これより出たるものとみゆ又件の錢車を土にて作り心棒を管カダにして糸を巻左の手の指にて心棒の上下を押へ地に廻しつらみて掌にとる物あり是を錢こまといふ柳亭子云元祿の末寶永のはじめ頃何人か錢こまを作り出し一時行はれたり白梅園鷺水が〔新玉櫛篋〕寶永六年の印本なり其中に香山梅之助と云人あり常に獨樂を翫びしがある時文錢六七文又の十文ば

かり筆の軸に貫き別に心木を通し糸を巻てこれを舞し、が是が爲に記を書て曰獨樂よ獨樂よ汝時を得たり一ころ楊弓の柱に催足せられ行成の紙袍を着て射もきの座に連りしさへ珍らしき事にいひたりしに綾錦金襴の衣服きらひやかに眞紅紫の組糸を帶にし猩々緋羅紗の蒲團に象牙玳瑁の杖をつき一曲の舞に錦の袂を翻せば滿座頤を解て喜び中界すがき永代橋何くれの曲に長じたるものい賞美せられて時代蒔繪の箱の中に豊に眼り云々ありすがき獨樂の舞ふ中にすがき幾遍彈永代橋も〔松の葉〕に載たる端唄の名なりこれも同く其まふ中に彈うたゐる、問あるなり小兒の翫弄のみに非ず酒席などの興に舞し、なりといへり然らば手車土にて作れるに習ひて錢ごまも土にて作れることなりしが今の四文錢の形なればいと近き制とあらる今も下總千葉の邊に若き者ども日待などの遊びに各錢車を作りてもちよりこれを舞して少しにても永くまふを勝とし戯る、長崎などにも錢ごまの錢を五六文かさねたるなり

きやくん
びやばん

きやくん〔屠龍工隨筆〕奥州岩城にて所の祭に賣笛ありその形今女のさすかんざしのやうに二股に針のごとく角たてる鐵にて三寸ばかりに作りて又針のやうなる薄き鐵を中の處へ三本になる如くきたへ付たるを齒にくはへて二股に分れたる處にきたへ付たる鐵の一寸ばかり餘りたるを指にてうてばきやくん、となる故其をきやくんといふなり鐵にて作りたるさまのひくつけなき蝦夷松前などの風俗のうつりたる物と思へるといへりたちぬる癸未のとし此笛を江戸の子供もてあそびたり鳴す音のひやばんとも聞ゆるからびやばんと稱へたり

猩々小僧

鯛釣

あやふや人形

風かはり屏
芋虫

ほゝづき

江戸は
丹波は
つぎ

り其頃落首「びやばんを吹くハ、びやばん」
ものいふ今のよの中ま、し有て禁せられて止めぬ

猩々小僧浮人形にあり又飾細工にもするなり〔江戸名物鑑〕に「蜀黍や出水の中のみたれがみ疎遜この句ハ其さまを見たてたるなり〔江戸二色〕と見るに猩々中より出て下に整あ元祿五年刻〔胸算用〕小刀細工に馬の尾にてまかけた鯛釣もはやりやめい云々扱おもふにこれ今もある弓に糸はりて魚の糸に付てをどりながら下にくだる翫物ありそれなるべしあやふやの人氣儘頭巾を着たる〔江戸二色〕に出たり是元祿の係にて其時代を志るべきものなり狂歌に「半面の美人やら悪女やらこの人形のかほのあやふや」あやふやハ危ぶむに永頃女書に股など出したるをあふなといへりかはり屏風これも〔江戸二色〕に出てかくれ屏風といへり芋虫これも〔同草子〕に出づ紙にて作りたる内に土を丸めて入れ破たる竹のうへをまるばすものなり是今の手遊の俵のもとなり

ほゝづき〔榮花初花〕上東門院の御事を申す處は、つきなどをふきくらめてすへたらんやうにそ見えさせ給ふ〔源氏野分〕玉かつらのさまをいふ處は、つきどかいふめるやうにふくらかにて髪のかゝれるひま、くうつくしうおぼゆとあり今白くうつくしきを雛卵に譬ふるどくふくらかにうつくしきを古への酸漿にたとへたりとみゆ

江戸は、づき柳亭子云寛文二年の版〔案内者〕といふ草子七月七日日本願寺立花のことをいふ處に近年江戸酸漿子とて七月に色の赤きをもとめ出してよき彩色の物とす云々今丹波は、

づきの名をいひて江戸は、づきの名をいはず今六月より色づきたる酸漿あるは是即江戸は
 づきか江戸は、づきの絶て丹波の國の種を求めて植けるものかといへり按るに古き俳諧
 もみぢの句に丹波をいへること多し丹の赤きにとるなり丹波は、づきの名もこれと同例な
 ること知べし又江戸は、づきといふいむかし江戸の人情尤き事を好めば赤く彩れるをば江
 戸と稱へしなるべし故に〔空林風葉〕天和三年三月女奴江戸鬼灯や色このみ山川女奴の勝山などを
 いふこの後ながら〔名筆傾城〕寶曆二年三月といふ淨るり使者の段中にも頭と見えたるは又平が
 思ひ付大紋の袖龍頭卷大津祭の大長刀横たへ江戸彩色の頬かまへ紅粉はき茶碗のわれたる
 如く云々ありこゝに江戸彩色と赤き色をいへるも同意なり俳諧の打扮も昔より面を赤く染むるは江戸風なるべし江戸は、づきといふ其色の勝れて赤きを稱せし名にて恐らく江戸にていひ出し名にありあるべからず

〔懷子九〕枝ながら吹は、づきや風の口〔同集十〕小姫こせにも露かゝりては、づきも吹口
 ひるもべにそめか又これを鯨のけんに用ひしこと〔洛陽集〕山の鯨鬼灯の目を出させたり正
 長又は、づきや穴に音を鳴虫くひ齒計此句〔六玉川八〕は、づきの奥歯になるとうまい音と
 似たり

〔大倭本草〕にはうといふ虫酸漿の葉を好みて食ふ故は、づきと名付といへるは假字違ひに
 て誤なり〔枕草紙〕に夕がはの事をいふに悪き實の有さまこそいと口をしけれなぞてさはた
 生出けんぬかつきなどいふものやうにたにわれかし〔新撰字鏡〕に酸漿を訓りよりておも

海ほ、づき

ふに其實下にうつむく故額突に似たればなりは、づきのふくらかにて人の頬にたとへしな
 るべし突の前と同義なり但し額突といふことゝわれを頬つくといふこと他になければ外苞
 ありて生たる處をぬかつきといひこれをむきて吹ならず時は、づきといふかつくのかしら
 つく貌つくなどと同じきによ

草の葉を
鳴す

海ほ、づき〔物種類呼〕に海ほ、づきいうんさうの卵なり岩あるは流れ木に卵を生つけ置を
 取て海ほ、づきと呼小女口に含鳴す其色黄なるを梅酢を以て是を染て赤くなすなり江戸へ
 の安房より出すといへり煮を安房にて磯ほ、づきと呼よしなれどもこの九州の産にて東
 國にいなきものなるに此名あるは其殼の漂れよることなどのあんなるにや此物かゝる名あ
 る故に海ほ、づきをそれが卵なりと誤れり海ほ、づきの蓼螺の卵なり其介の形王螺よ
 り大にして長し肉の紅螺に似たり腸辛辣なる故辛にしと云ふ又夜なきともいふは小兒夜啼
 の呪に用るよし〔本朝食鑑〕にみゆ海ほ、づき江戸近國の産の形小し大なるは加賀能登より
 來れるなり長刀ほ、づきといへるもの紅螺の卵なり

葱を吹

草の葉を鳴すこと〔俳諧口寄草〕元年元文手を打にけりく豆の葉に穴をあけては嬉しかり〔六
 玉川初篇〕寛延三年三年鳴して捨る葉に残る月鳴したる葉に
此く孔あくなり
 葱を吹ハ東坡被酒獨行詩に總角黎家三小童口吹葱葉送迎翁、
 下總千葉あたりに七月七日に小兒まこもを以て馬を作り緒を付て首にかけ馬を腰に付て
 遊ぶ〔散木集〕にをさなきちこのちまき馬もちたるをみて「ちまき馬の首からきいぞ似た

篠船

りけるきうりの牛の引ちからなしといへる連歌あり菰の馬も同じほどの物なり古より有し
弄びなり信濃常陸にもこれを作りて七夕に手向けるとぞ思ふにたま柵に手向七夕にたむく
るの後にてもと小兒統の物なるべし
篠船、さ、葉にて作る舟の〔夫木抄〕源仲正「うなるこが流れにうくる笹舟の泊りの冬の氷な
りけり〔詞林采葉抄〕に神無月をば出雲國にの神在月とも神月とも申なり我朝の諸神參集り
給ふ故なり其神在の浦に神々來臨の時少童の作れる如くなる篠舟波上に浮ぶ事不可及算
數」

松葉の鎖

ちやはん
の尻と掌
に付る事

瓜さし
瓜戦

松葉の鎖、明和二年川柳點の句「迷惑なことく、禮の供松葉でくさりこしらへる
茶碗の尻を掌に付ること〔雜戲畫卷〕上肯定ならず野々寸など
が畫にや元祿中の風俗なり其内に此圖あり古き前句付表題缺平
號もなし
はなれかねたりく、手のうらへ茶碗の尻をねじり付
瓜さし是も〔同畫卷物〕に瓜を多く并べて小刀を持たる男横さまに瓜をさし貫かむとするを
見て居るもの一人あり相手の男なり漢土の瓜戦の類なり〔五雜俎〕に錢氏子弟、取雲上瓜、各
言子之的數、割之以觀勝負、謂是瓜戦、子の數をいふたれ
たまなり瓜食勝て勘三とぞなる是、
瓜戦、神といふこと
に似たり〔葛藤下〕許道獨吟「落る雷七八町のあ
たまなり瓜食勝て勘三とぞなる是、
瓜戦、神といふこと
に似たり又同じほどの戲〔廣東新語九〕廣州兒童有賭
蔗圃柑之戲、蔗以刀自尾至首、破之不偏、一黍又一破直至蔗首者爲勝、柑以核多爲勝、
こゝにて小兒など蜜柑の袋の數をいひて當否を論ずこれをもておもふに瓜の核柑の核など
數多く煩いさしをいひて戲とす異國の人の所作のゆるやかなるこゝの人といたく殊な

ほぞち

豆奴

菓物燈籠

次でにいふ〔和名抄〕に熟瓜和名保曾知とあるをおもふに越瓜などのよくつえたるをいふに
やはぞちの替のれのづから脱る程に熟くつえたるをいふ美濃の眞桑村の産なぞ出たる後の
ことなるべしもし今のまきは瓜なぞをほぞちの落るまで取らで、おかば腐りて喰ふべからず
〔清慎公集〕に女御すのこにはほぞちを長ひつに入ておかせ給へるを夕立のすればみかうしお
ろしたるまぎれにうせられバ「盗人のほそちをみてもあめふればはしうりどてやどりかく
すらん干瓜なぞに熟ぬ内にとるもの歟又別種にや
豆奴、祭文がたりの山伏一乗と云もの、作と云ふ〔西行東下り〕照隆町の段、かゝる處へ向ふ
より深あみかさにて評判の豆奴あたまも豆ならおむとも豆ひやうはんの豆奴とあり高輪の
處にくぢらの上りしことをいへるの寛政十年戊午五月朔日のことなり
菓物の燈籠〔廣東新語〕廣州時序の條、八月十五之夕、兒童燃番塔燈、持袖火、踏歌於道曰、灑
樂仔灑樂兒無咋糜、塔累碎瓦爲之、象花塔者其燈多、象光塔者其燈少、袖火者以紅袖皮彫
鏤人物花草、中置一琉璃蓋、朱光四射、素馨茉莉燈交映、蓋素馨茉莉燈以香勝、袖燈以色勝、
この方にて西瓜の肉を削り取て中に火をともして青くみゆるもおなし類なり

嬉遊笑覽卷七

行遊

○行遊○手向 鹿島立 坂迎 松に胡桃 ぬさ袋 旅籠 伊勢參三寶荒神 びつき

歌枕 花見錦てつぼり、花見小種器 上野の繁華 飛鳥山 日ぐらし 隅田川

手向

〔萬葉集十五〕加思故美等能良受安里思乎美故之治能多武氣爾多知互伊毛我名能里都こり日本武のみことのあづまはやとのたまひし類ひ也〔夏山雜談〕にも山のたうけの手向の轉訓なり手向をたうけと訓するの日向をひらがといへるかことしたうけの上り下りの山のさかひにて國も多くいこにさかへば旅行の人道のほとりをいのりて國つ神に手向する故の名なり此説契沖にもとづけりまた〔萬葉廿〕上總國防人歌「爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波伊波々牟加倍理久麻豆爾小柴もて神籬をかり」〔古事記〕大年神の御手の内に庭津日神次に阿須波神云々あり本居氏云常昔民家の庭に竈神など、共に此阿須波神をも祭りしこと知べし末二句を味ふに彼あすはの神の己れが家のにあらで行前の宿々の家に祭れるをいはひつゝ行むとよめるなれば何國にても家ごとに祭ることにあられたりといへり吾はいはいにさ有い己が庭にいへらん此神鹿島に前立の社といふ〔世事談〕に此神に御饌をさゝげていのるに何の聞えぬこゝにあらん此神鹿島に前立の社といふ〔和訓栞〕に鹿島立といふ旅に居る者飢につかれずとなり世俗影膳とて居るもこの遺風なり〔和訓栞〕に鹿島立といふも是より出たるよし鹿島本縁にみえたれど本社より起れる謔なるべしといへりもと軍に出立時の志はざと聞ゆ故〔萬葉廿〕阿良例布理可志麻能可美乎伊能利都々須米良美久佐爾和例波伎爾之乎なと見えたり猶鹿島立の事〔詞林采葉抄五〕に委くみえたり〔菟玖波集〕竊旅部に

鹿島立

坂迎

救濟法師「これぞこの旅のはじめのかしま立

旅よりかへり来る人をむかひに出てことぶくをさかむかひといふもと都人のあふ坂まで出たりし故志かいへりとぞ〔今昔物語廿〕信濃守に成りし人始て其國に下りけるに坂向への饗アホシをあたりければ云々此國にの本として守の下り給ふ坂向へは三年過たる舊酒に胡桃を濃く摺入て在廳の官人煎子を取て守の御前に參て奉れば守其酒を食す事定れる例也又阿野野群廿二國務條々の中にも境迎事ありとありこれを酒迎とかく非なりさて胡桃の來る身によせて祝したるなるべしかれば此こと古きならひと見えたり〔大幣〕にはそりといふ小歌あり「志のふほを道にまつとくるみさしうゑまいまつとて其身はくるみてもなし是も事のかはれども意のおなじまた關むかひといひしことも有り〔源氏物語關屋〕けふの御關むかへい思ひ捨たまはし

松に胡桃

ぬさ袋

〔源氏物語若菜上〕物へまかりける人のもこにぬさをむすび袋に入れてつかはすとて云々有りにやとおぼゆ〔細流抄〕に三月の末なれば春のくれて行手向をいふなり道祖神に手向る麻にきぬのつまともをまかへたるなり〔花鳥餘情〕にぬさの色々の紙を切てすきたる袋に入たるにや云々〔落くば物語〕筑紫の帥に大臣殿馬のはなむけを云處に上に唐ひつの大きさに満たる幣ふくろに中に扇百入て打覆ひ給へり〔好古小錄〕に圖あり其説云麻囊ハ豊前國宇佐の邊に古製傳りて今猶此を用ゆ竹編たる籠なり竹籠をふくろといふハ餌袋と同意なり其ぬさ今ハ緋帛の用ひずいろく染たる紙を用ゆ囊の目よりこはれて見ゆる體〔源氏物語〕に

色々こぼれ出たる云々書るけにと思はれ侍る近來好事家錦繡をもて製してぬさぶくろとて
翫ふの無稽のもの也といへり其圖ひけ籠の如き籠に竹の柄をさして籠の編餘して垂たるに
花多く付たり長一丈許花以糊粘と記しぬ是をいかやうに用ふるにか其よしをいはず此製
の物いづくにも有べし先年上州草津また野州日光にても見たりしがいづれも葬儀に用ふ是
を二本先にたてゝふらせて籠の内に入たる紙の花びらを散らすなりこの花籠古のぬさ袋に
やおぼつかなし〔日本歳時記〕端午の處を畫きたるに幟の頭にこれを付く又寶永頃の畫掛津
國住吉の御祓の學びする處御祓箱に長き柄をさし其頭にこれを付たり但しこれら飾り物
にて籠の内に花を入れて散らすこといなるべし〔拾遺集〕にむすび袋といへるのかゝるもの
どもおもはれず

旅籠

旅籠のものと〔和名抄〕に宛飼馬籠也波太古俗用旅籠二字とありこれも鷹の餌袋の如くその
籠にくひものいれて旅に用ひし故旅籠と書しなるべし〔今昔物語〕旅の宿のことをい
ふ旅籠干物など食て寄臥たるに云々旅籠に入しかれ飯なり〔宇治拾遺〕八〔備前射佛條〕後世これ
によりて旅店をはたぞやといふ〔きのふのけふの物語〕ある人十二三になる子を寵愛して常
にうたひを教へけるがせつかくならへやがて十月十三日になるぞ百はたぞくひにつれて行
ぞよく覺えて其時うたへといふほどなくおめいこうじやとて寺よりわんないある云々〔布施〕
して寺のときにつくを戯れに百はたぞいひし
ハ旅店の外に物くふへき茶屋もなければなり
〔新著聞集〕に山崎宗鑑が事をいひて朝げ夕げに鳥目十銭ツ、はたぞに持行しと也とあり

百はた

此の旅店なごにて食物を買をいへり

伊勢参

今人多く鹿島詣のせでまの京大坂大和廻りをすめり神佛に参るの傍らにて遊樂をむねとす
伊勢の順路なればかならず参宮す〔皇一后千句〕何方も治る御代のいせ参り太々神樂の小か
ぐら太々神樂と云ことも古くいへりと見ゆ

三寶荒神

〔洛陽集〕に花の根に火燧の馬にころの旅元好これ伊勢海道のことをいふなるべし火により
て居たりしも馬に乗り快き頭となりしとのみにあらざ火燧のごときものを馬の左右に結
つけてその中に一人づゝ乗る又左右に子供をのせ大人中にのる是を俗に三寶荒神と云事あ
り此集延寶中の撰なればその製はやくより有しことのみゆ

二方荒神

志まさん

紺さん

又〔續五元集〕付あひの句に「松に薄を二方荒神といへるもあれどこの名の三寶荒神より後
の名と聞ゆ又伊勢にて間の山の女こしき又比丘尼にゆき、の人の衣服をさして志まさん紺
さんなどいとはや口にわめきいふこともとひ〔丹前能〕といふ草子に淺間山福一萬虚空藏坂
をのぼれば比丘尼あやをり色ある女が前後につとひまきせんをねがへばひにん同前あのです
がたなれといにしへよりつたへ來る所のならひ是非もないうきよぞかし二見へくだる追分
の茶屋参り下向をみて大坂のたれさま江戸權七様こゝろ得て京のせなた河内はりま長崎の
と國々をさしてちがへぬいどこに目あるし有やと大わらひして云々あり彼の志まさんこん
さんのこれより出たるなり

お杉お玉

又〔風流旅日記〕にあひの山お杉お玉が庵前にくれなるの綱をはり三味せん引て小歌云々参